



知新帖

二

2470
2



于多一 特
2470
七一

琉球國懷政王不男南今歸仁朝敷氏之
印

琉球藩王崇恭弟現侯齊
崇典氏叔父

[illegible]

于多1
2470
八二

疏球國撰政王子男爵今歸仁朝敦氏之
印章

琉球藩王崇恭弟現侯齊
尚典氏叔父





月五日與狄詠同館
北客書狄武襄事
元祐二年丁卯先生五十二歲

公在翰林苑每時各有一制
終篇賜御書使序十五日內制
說全寄賀永部詩賀五甫文又進
喬吾師掌於密州識君於常山得
白公神道碑又作司馬溫公神道
鄭公神道碑又作鄭公富
以元豐六年八月命公撰碑于洛陽
至是元豐七年八月命公撰碑于洛陽
其子元豐七年八月命公撰碑于洛陽
過二李得素日我今知此初又作
元祐三年戊辰先生五十三歲

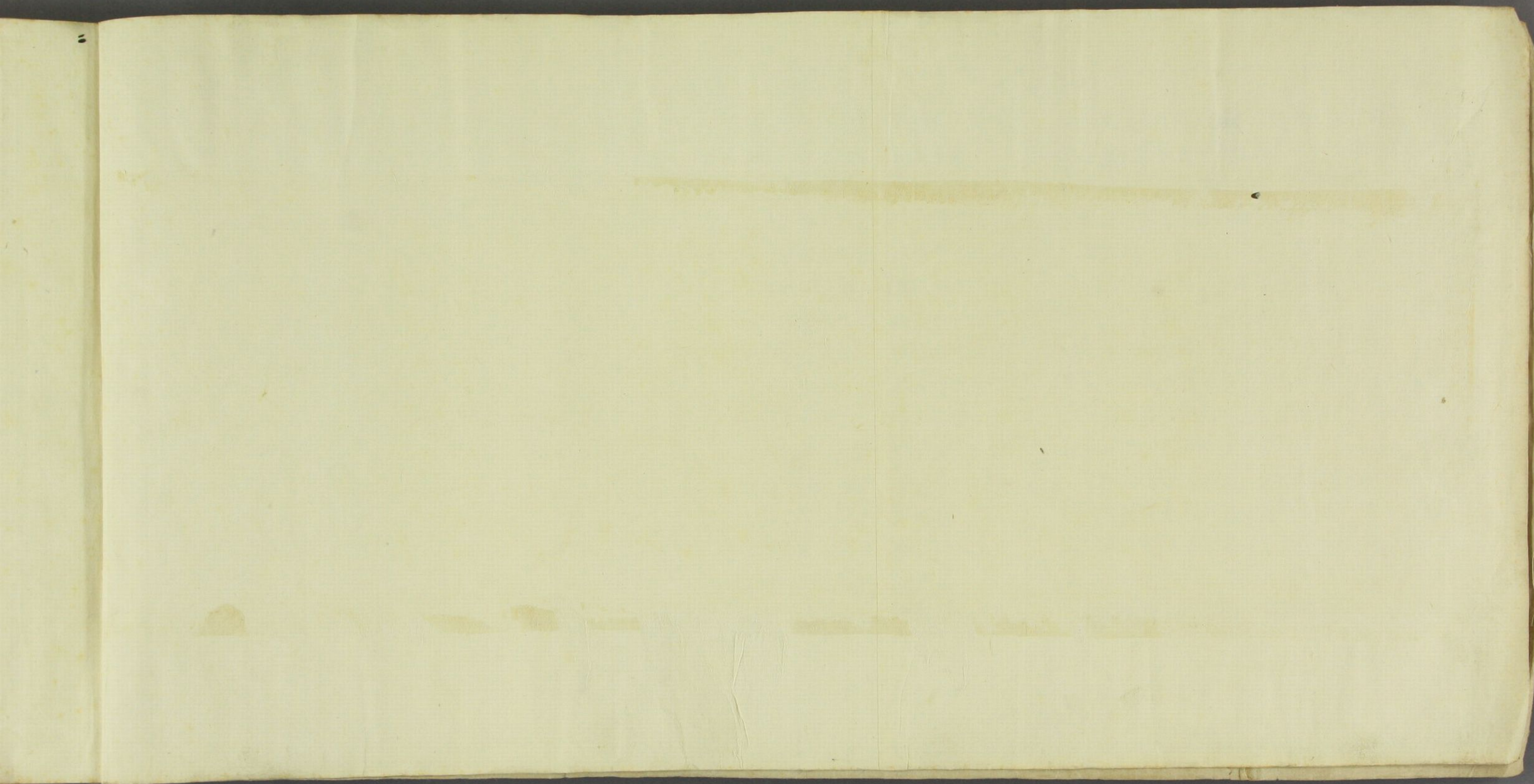
坡紀年

十七

公在內苑每時各有一制
大雲士坐庭中時各有一制
遂之鋪內臣過庭為陵辱傷動
方思仙詩詩三二月八日夜會于
書鬼仙詩詩三二月八日夜會于
明池始見其雪中詩因次韻由同
跋宋漢傑畫五月一日與子由同
病逾月請詩不九月十八日與子
夜詩詩是日苦寒詔賜官燭法酒
王定國清虛堂小飲作詩一日微
勝次詩劉虛堂小飲作詩一日微
貢父詩劉虛堂小飲作詩一日微

元祐四年己巳先生五十四歲

止上元日侍宴端門次韻王晉卿詩
於三月侍宴端門次韻王晉卿詩
奏告東太一



真如常住之月者
法界二周遍せり佛刹
不及ノ妙理之世不可
得ナリ是々々知ハ知
ニニ知ニアラス四相ニ
不移境ハ境ニニ境
ニアラス元来法自王
ナリ古チニイハナ
耳ニニニ目ニニキク
ラハイカハナ
フカ又又凡ノユウケシ
正ニ世ニ是ヲ求ル
ニ可得ナリニ求ル
不可思議ノ妙性
常住ノ春カハナ
ナニ有焉ノ春ハ春
ト悟レトモカハナ
ハ真如ノ春カハナ
く極ホニアラスハ
経ノ外ナシカハナ
ヲキタニフコトナ
一六又又ハナナ
アナナナ
ニ因又中様
日長系様
何れ何れナリ

形津山碑

河川春日村外見奇物

飛鳥淨原大朝廷大弁
宣宣大貳采女竹良卿所
請造所形浦山地四千
代他人莫上致木促穢
傍地也 己丑年十二月廿五日

枚人碑

河川磯長里東端立物

故正六位上常陸國
大目高屋連枚人
寶龜七年歲次丙辰
十一月乙卯朔廿八
日壬午

太上皇製和哥

三傳中納言五條公藤原朝卜為成上

竹葉乃家語小兒果也

たまたま之方いゝをみて

伊予へいすれが考へ

李家

文化十三年正月源弘賢摹刻

[illegible]

物春宮の元日は其のまゝの土月の大御座なりと元正三年三月五日のち思原の所ぬからん世尊の
人々皆御の玉座の土にかりんる事と云ふと其のち有難敷なるものぬれぬと云ふ事と云ふ

[illegible]

竊御得

行司

御還

閩御輿

平

蓮花等 宝珠等

御製詩

貧賤

光藏影

添差 元進

祭さつ西さい

礼部条番附
方弥陀如来

左 あくもあ
嘉すえ
右 うきうき
のわぶま
志さし
西 箱持するも
のはちり生
方 早ふはう
極さるげ
み起るとな
後で後悔
事紋の紙
進めお物
人かそ人
五連の糸
後の海老汁
服薬の時若
名だてる人
大々大偉
龍沈
人ぐろい
常かん
舞子の夜ハ
よましそ
まりりの
十五でも
おんてう小
六十六歳
ひきの能
花ト庭へ
玉ぞうと
もをろふ
登則中
まくと妻産
帯の内ら
大きな子
短いの短石
圓いこころ
口をどう
伝言を巨國
水の人の相
減澤の髪
衣服の髪
水のお髪
何日の日
又ておえ
指針を抜
出あら余
赤肉内
紫りを瘰癧
食子の子
町の町人
彩色の色
白髪の髪
襦袢の袖
毎日は初
お病お
毎日毎年
上へ上る
多竹の竹
唐格係
賞お賞
山荘集の家
ぬお物
髻の髻傷
耳ヶ替年
長う長刀
松木本
岸の岸
井るの
佐別怪漢
昔古来
素子子供
今高世
葵舎の令傳
汗汗雲
汗酒の酒

諸國郡縣狀

天平勝寶三年

<p>造幣司</p>	<p>合奉元</p>	<p>下野國貳百伍拾戶</p>	<p>造幣司</p>	<p>阿波國壹百伍拾戶</p>	<p>伊豫國壹百伍拾戶</p>	<p>以前寺家雜用</p>	<p>造幣司</p>	<p>造幣司</p>	<p>造幣司</p>	<p>造幣司</p>	<p>造幣司</p>
<p>造幣司</p>	<p>合奉元</p>	<p>下野國貳百伍拾戶</p>	<p>造幣司</p>	<p>阿波國壹百伍拾戶</p>	<p>伊豫國壹百伍拾戶</p>	<p>以前寺家雜用</p>	<p>造幣司</p>	<p>造幣司</p>	<p>造幣司</p>	<p>造幣司</p>	<p>造幣司</p>
<p>造幣司</p>	<p>合奉元</p>	<p>下野國貳百伍拾戶</p>	<p>造幣司</p>	<p>阿波國壹百伍拾戶</p>	<p>伊豫國壹百伍拾戶</p>	<p>以前寺家雜用</p>	<p>造幣司</p>	<p>造幣司</p>	<p>造幣司</p>	<p>造幣司</p>	<p>造幣司</p>
<p>造幣司</p>	<p>合奉元</p>	<p>下野國貳百伍拾戶</p>	<p>造幣司</p>	<p>阿波國壹百伍拾戶</p>	<p>伊豫國壹百伍拾戶</p>	<p>以前寺家雜用</p>	<p>造幣司</p>	<p>造幣司</p>	<p>造幣司</p>	<p>造幣司</p>	<p>造幣司</p>
<p>造幣司</p>	<p>合奉元</p>	<p>下野國貳百伍拾戶</p>	<p>造幣司</p>	<p>阿波國壹百伍拾戶</p>	<p>伊豫國壹百伍拾戶</p>	<p>以前寺家雜用</p>	<p>造幣司</p>	<p>造幣司</p>	<p>造幣司</p>	<p>造幣司</p>	<p>造幣司</p>
<p>造幣司</p>	<p>合奉元</p>	<p>下野國貳百伍拾戶</p>	<p>造幣司</p>	<p>阿波國壹百伍拾戶</p>	<p>伊豫國壹百伍拾戶</p>	<p>以前寺家雜用</p>	<p>造幣司</p>	<p>造幣司</p>	<p>造幣司</p>	<p>造幣司</p>	<p>造幣司</p>

按續日本紀云天平五年二月以佐渡國併越後國天平勝寶四年十一月復置佐渡國三代實錄云貞觀二年三月割阿波國美馬郡置三好郡此條以佐渡國加茂郡雜太郡隸越後國以阿波國三好郡附津鄉隸美馬郡与史牒合越後國殖粟鄉今本和名類聚抄作升粟丹後國細野鄉作納野皆傳寫之訛應依此條改正也膽君作五公播多作八多附津作三津橘樹作立花並字異訛同耳今毛人卿為造東大寺次官兼下總負外分豐麻呂朝臣為造寺判官續紀不載焉萬里續紀作麻呂按續紀又有藤朝臣麻呂懷風藻載作萬里古事記繼體天皇之子丸高王欽明天皇之子麻呂古王日本書紀並作梳子皇子可見萬里麻呂古相通也又書紀齊明天皇紀有秦大藏造萬里二應讀為麻呂今本傍訛与呂都左登者恐非是酒主真道無攷文政元年五月五日湯島狩谷望之志

主典是七位下菱努連

造

未
在典位下紀朝臣

寺

歸

下



般若波羅蜜多心經

觀自在菩薩行深般若波羅蜜多時照見五
蘊皆空度一切苦厄舍利子色不異空空不異
色色即是空空即是色受想行識亦復如
是舍利子是諸法空相不生不滅不垢不淨
不增不減是故空中無色無受想行識無眼耳
鼻舌身意無色聲香味觸法無眼界乃至無
意識界無無明亦無無明盡乃至無老死亦
無老死盡無苦集滅道無智亦無得已無所得
故菩提薩埵依般若波羅蜜多故心無罣礙無
罣礙故無有恐怖遠離一切顛倒夢想究竟
涅槃三世諸佛依般若波羅蜜多故得阿耨
多羅三藐三菩提故知般若波羅蜜多是大
神呪是大明呪是無上呪是無等等呪能除
一切苦真實不虛故說般若波羅蜜多呪即
說呪曰

揭諦揭諦 波羅揭諦 波羅僧揭諦 菩薩摩訶薩

此心經一卷為病腦祈願染患筆謹拜書

奉納三鳴社者也

建仁三年八月十日

後二位源朝臣賴家

北畠顯家寄進狀 伊豆三島神社藏

寄進

三嶋社

伊豆國女久卿事

右為天下泰平所願成就奉

寄進狀如件

延元三年正月吉日

權中納言兼陸奥大介鎮守左衛門源朝長

藥師寺東塔撥銘
船王平首墓板

維清原宮駁宇

天皇即位八年庚辰之歲逮于之月八

宮不愈創此伽藍而鋪金未遂龍駕

騰仙大上天皇奉遵前緒遂成斯業

照先皇之私檀光後帝之玄切道濟郡

生業傳曠却式於高躅敢勒貞金

其銘目

巍巍蕩蕩藥師如來大發誓願廣

運慈哀憐與聖王仰迎冥助爰

饒靈宇莊嚴調御高亭寶刹

窮窮法域福崇德切慶溢萬

路

寶勝甲卷三二八陽壽閣同德寺靈驗之碑陰圖二六六

惟祇氏故王後首者是祇氏中祖王智仁首見那沛口
首之子也生於平安院宮治天下天皇之世奉仕於芳由

惟船氏故 王後首者是船氏中祖 王智仁首見 那浦口
首之子也生於乎娑陀宮治天下 天皇之世奉仕於等由
羅宮 治天下 天皇之朝至於阿須迦宮治天下 天皇之
朝 天皇照見其才異仕有功勳 勅賜官位大仁品為第
三頭云於阿須迦 天皇之末歲次辛丑十二月三日庚寅故
代辰年十二月殯葬於松岳山上共婦 安理故能刀自
同墓其大兄刀羅古首之墓並作墓也即為安保万
代之靈基牢固永劫之寶也

右銅墓板藏在河內國古市郡古市村西琳寺王後推古紀作船史王智仁即欽明紀
王辰爾也姓氏錄作智仁君與此板同欽明天皇十四年紀云道王辰爾 錄船賦即以王
辰爾為船長因賜姓為船史故此以為中祖也辛丑舒明天皇十三年是歲十月帝崩故此
云天皇之末故猶死也戊辰天智天皇七年也此板以殯葬伊福吉部氏墓志亦同萬葉
集以真弓岡陵為日並知皇子殯宮亦與此同義荀子禮論三月之殯何也松岳山在安宿
郡國分村往年山崩出此板云那字本作穉漢武都呂國等題名變作那與此筆迹小異
耳今俗作那非是葬作葬出漢苑廟碑後魏司馬晒墓志五經文字云葬上下靈見
漢王稚子關字作罕見漢史晨奏銘云罕字書云罕字作罕下錢大昕跋晉刻 葬字云
祇叙名字官爵及夫人氏族而無讚頌之詞其石上銳 葬
墓板也余今從其說題曰墓板藤蒙齋好 之
船氏墓板字纖刺淺求觀者多不能辨 之
之田 金翁所著古京遺文跋尾一則以附 之
千三月湯島狩谷懷之書

采月音

御於飛香舍可有

御著帶可被衆勤之

多被

作以仍一進也

十月音

歲將監及 隆光

僧經

今年受戒僧事

僧最澄

上休僧今年受戒已畢

經於國司

到奉

曾

大僧都

少僧都

律師

律師

世

近江國滋賀郡古寺鄉金原下津有淨土寺

國師承

寺僧帳今狀下

曾

香月二從儀師常耀

出

威儀師

出

出

出

出

出

出

出

出

出

出

出

開祖傳教大師戒牒舊藏在魚山大原

寺如來藏中顧其示寂距今千年而近

其德愈著其法愈盛雖不可誣而若求

其典而于當時則難矣因刻而傳于世

為平島山仰止景行止觀者思之

寺如來藏中顧其示寂距今千年而追
其德愈著其法愈盛雖不可誣而若求
其典刑于當時則難矣因刻而傳于世
嗚呼高山仰止景行行止觀者思之
宣統四年己未八月朔日僧正良胤謹書

不刊之石

石

以居之邑之且

信



先使宿連端後不承音
憤正德伏惟

應察彼清僻新日距盡

不勝之責定在下吏持

莫不九週仗之免諸在

使主事不更安陳記

十二月音少松多

官下主事

書以省誠未知

乃不以為便

若示

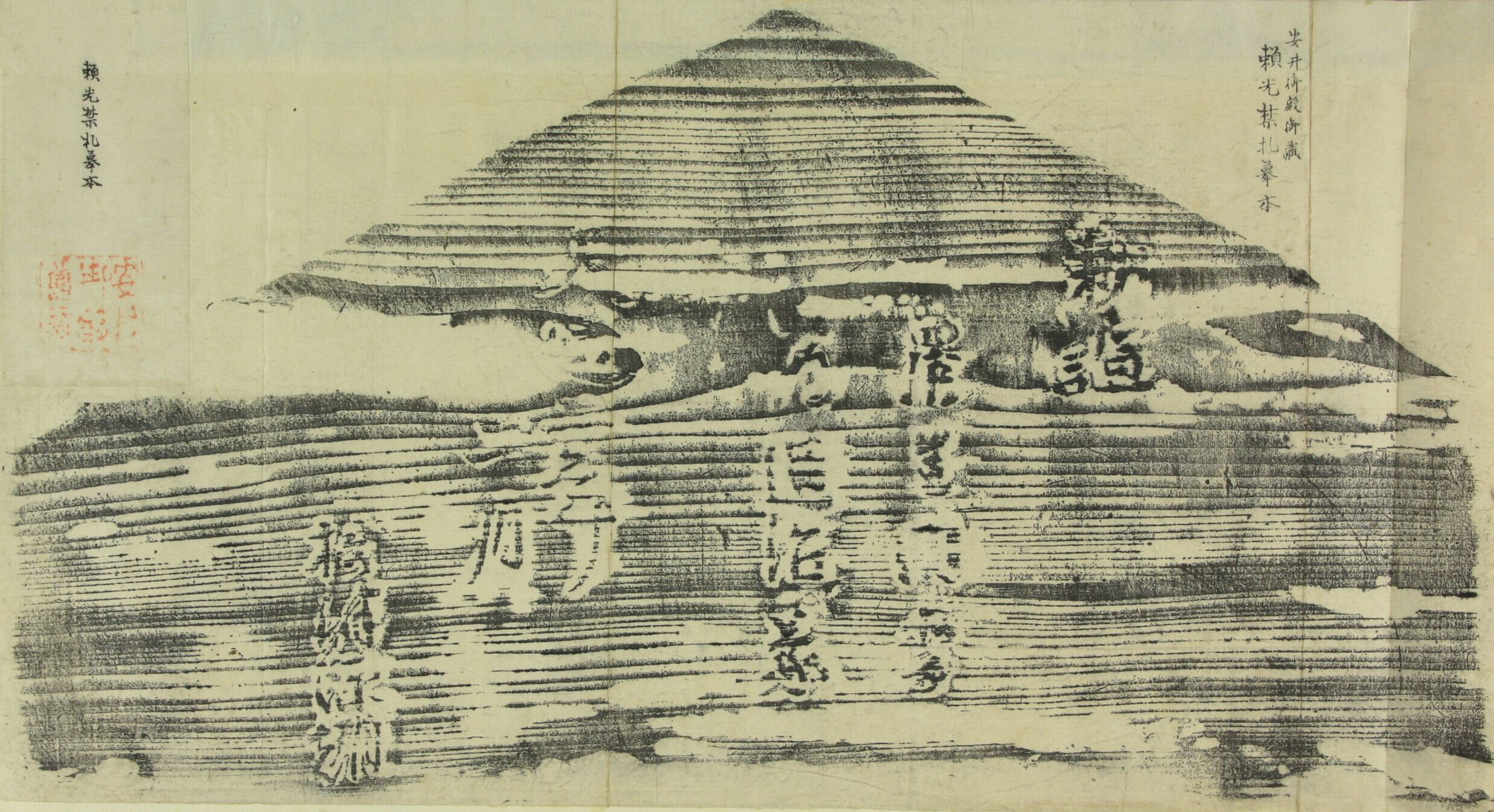
漢書



書東方人思漢往之而唐一如此一創亦以方部于唐且書語
之相別可見時風尚文第其時人不可考然要不下六百字今
則不世而珍之耳己丑人白台洲同之月題

安升衙殿所藏
賴光禁扎摹本

賴光禁扎摹本



恭謙天皇繪封戶勅書

東大寺正倉院御物

東大寺封伍
右平城宮

酒內親王願文

東大寺正倉院御物

大般若經一部 六百卷
金剛般若經一百部
在各錦祿

東大寺造寺司牒

東大寺正倉院御物

下野國貳佰伍拾戶
若狹國伍拾戶
茅賀郡石田鄉平戶
郡倉部高桑鄉平戶
遠敷郡玉置鄉

獻書屏風勅書

東大寺正倉院御物

獻東大寺
書屏風貳帖
十二扇並高
五尺面五色
紺地花錦緣
班竹帖金銅

獻屏風勅書

東大寺正倉院御物

獻東大寺
屏風一具十二扇
並高四尺八寸半
歐陽詢真跡

東大寺獻物牒

東大寺正倉院御物

網是壯所以自在大雄
鉤而利物開智鏡而濟世
生入寂滅之域蠢蟲品類
故有歸依則滅罪无量

東大寺藥種獻物牒

東大寺正倉院御物

奉 盧舍那仙種之藥
合六十種 盛添櫛廿一合

獻太子真跡書勅書

東大寺正倉院御物

伏願以此妙善奉
方廣之通衢恒

施藥院請物文書

東大寺正倉院御物

施藥院請物
桂心壹佰斤

造寺司請沙金文書

東大寺正倉院御物

沙金貳仟壹拾陸兩
右造寺司所請
天平勝寶九歲二月十八日

王子夜半月映松
武穆王像星骨生

臨江以吊

瓦音因以存粒泥由

雖少保體朱仙魄安神

明教如王子參那輝社稷

好兆身大辰自依新不來

蘇轍雪中古來名臣

比奇名畫素好美代為

去等子身重以未初定學

蘇軾臨江

西壘將軍 江上素光先

詩書





乱舞つ聲うき水ぬき
不事よのえーのわは
傾くさるをけりて使に
ふゆがまこのやすれ
あひ入いなる理それ
面より新ね使きのめ
水へ入ちつてこたわ
きれとも皆ふぬん地
よは善悪わけをもとげ
そ日はあゝあのかく
らゝゆるげとや



前田香雪稿

檢印^{（一）}に「藤原保朝」の印あり、つからずの身上に書と詞書とにあらはれ、されしものにて、其書の巧妙なるは云ふも更なる。朝臣の境遇を細く見るを得るは、此巻を指しては他に求めず。此原本は天保年中か古筆丁作が尋ね出し、幕府に献上したるものにて、今も徳川宗家に秘藏せらる。山古寫本は、作吉の二代其處廣瀨の寫によりて、狩野晴川法印の寫したる丁作が幕府に献上す。前記したるこの二本、東京博物館に藏せらる。又本郷家、新州、新官舊藩主の藏版なる丹鶴、藏書の中に編寫し出したるものがあるが、茲に寫出されたる一亦能く寫せり。と見ゆ。原本も前半は缺て、後半のみなが、其概略を云へば、朝臣は

後鳥羽院土御門院順徳院の三朝に仕へて上の御覺えもめてたゞ正四位下左京權太夫たりしが風く所領を失ひて貧乏き年月を送られしにゆくりなく伊豫國の某姓を知行し賜はる由の官旨を下されしかば檢びて其官旨を讀み北堂に告給ふところ其悦びの歡宴を開かる處をかゝれたるもの此書卷中の最も興味ある處なり祝宴に列りし人々は皆大酒家にて貯への酒には不足なりしかば僞を出して酒を買しめしに此使者者酔て足踏のたしかならざりしかば縁板の朽目に足を踏落して酒多くをこぼしたるに水を入れて出でたれど客人も皆酔ひたる未なれば是に心づもものも無しとの詞書あり又新に聞れる伊豫國の知行所は遠く不便なれば舊近き地に移居したりしとの事を歎願せられたる

[illegible]

○日本美術工藝の沿革（承前）

幕府時代に續いて來るのは平家時代だが、此の平家^{の家}の先生方^{の家}、其身は武家の出であるけれども何時か藝上の華奢風俗に化せられて、武士の竟はい所を忘れて、彼の醜陋黒々と太眉毛の公家風に食つたから、衣服から仕居、美術工藝の點に至るまで藤原氏^{の家}の舊依て、別に新機軸を出さないのである、即ち此時代は藤原美術の末葉に算入して宜しいので、其の製作品として今日に遺存て居るのは、安藝の嚴島神社等、其の仕立から軸金具、見返し^{の家}の櫓の如きまで稀世の絕品として今も愛賞家に持囃されて居る。要するに此の藤原、平家時代に、即ち平安の京に於ける美術工藝界の概略を云

へば、給は佛蘭^{フロレンス}家屋の壯なるは丹莚を塗り立てた寺院が、公家方の經殿作^{いすてんさく}。衣服の束帶や十二單の轆轤^{りくど}類、彫刻は勿論佛像。日用の碗皿類は木製のものが、贅澤な上つ方では多く銀器を用ひて居る。寢物は陶器、漆工は頗ぶる發達して、螺鈿の製造には今日迄、目覺しい物が遺存て居る。刀製治には弘仁、大原^{オハラ}等が初めとして備前^{ビゼン}の正恒、小鍛冶宗近、友成、助平、波平、行安、包平、光宗、粟田口國綱、國安、其外備前^{ビゼン}の文字派の名工が輩出してゐる。其に隨つて全日本刀の小道具類の製作も非常に進んで、兵庫^{フナバタ}の太刀柄と云ふもの、到後世の作人及び難い華麗な物が造られて居る。又甲冑弓矢の製作、今京師^{キョウト}の寺社等に遺てある物、又な集古十種に載てある物、漸平威寶記、



しに猶能く考へしこの御内意ありし由をも書たり又ひとりの男子を惜みながらに出家せしめられし事をも記したり朝臣は右京大夫隆信朝臣の長子にて男五人女四人の子あり長男は爲繼次男は信隆三男は信義四男は出家して醍醐寺の信海法師とよばれ五男は三井寺の守圓阿闍梨なり父隆信朝臣も名ある繪かきにて特に肖像畫に譽れありしが此朝臣は夫にも倍て名譽高かりしかば後鳥羽院の勅に因て行幸の圖を三卷にかかれたるが供奉の大匠を初め重立つ人々は皆肖像にかかれたりと云ふ又中殿御會の繪といふものあり管絃和歌につかへまつれる諸卿を皆肖像にかかれ朝臣自らもまた此中にある處をかゝれたり右の外世に存りて有名なる三十六歌仙像(佐竹家藏)二卷北野天神縁起八卷

次男の爲繼はついでに出家し下つての僧とて名を信海とせしむるの傳記あり



と斷片となりて諸家にある上巻の歌仙像平家兼の歌をかける小形の歌仙像などあり朝臣の書に就ての名譽談は多かれど繪師草紙の説明には要無ければ略しぬ朝臣は繪畫に名あるのみならず歌にも巧妙にて多く撰集中に入られたり其身まからしは文永二年十二月十六日にして年齡八十九歳なりしと傳へたり新拾遺集に如圓法師の歌ありて其繪畫に云信實朝臣みづからの影を寫し置て待けるを身まかりて後見てもゆる「思出て見るもこひしき面影を何なかに寫し置きけむ」と見えたりれば他人の肖像のみならず自像をかき殘されしものと知らるれど今に遺れりや否やは詳かならず

朝臣の繪はついでに出家し下つての僧とて名を信海とせしむるの傳記あり

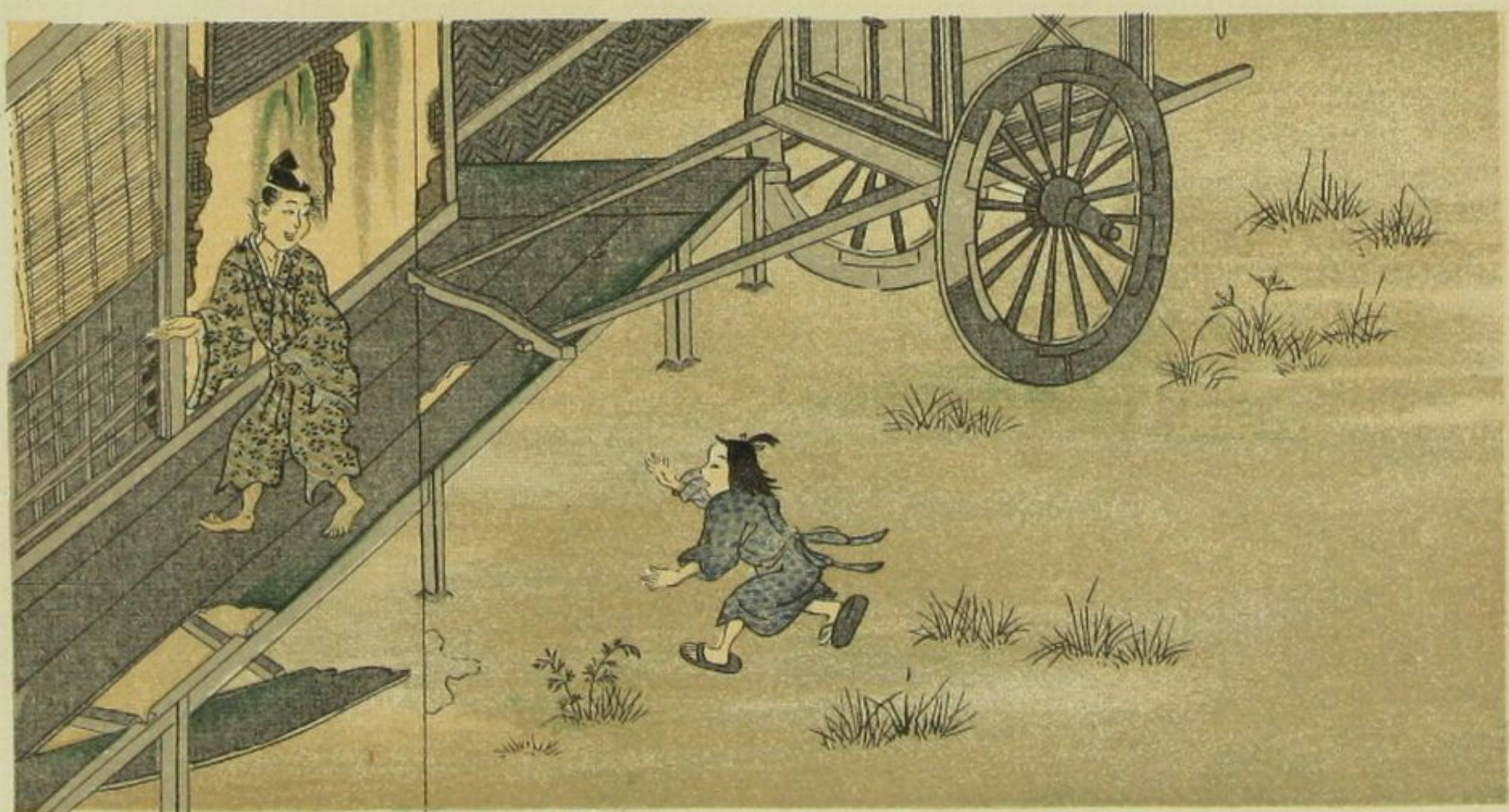
次男の爲繼はついでに出家し下つての僧とて名を信海とせしむるの傳記あり

技藝之友 第參號

(明治三十八年十二月十五日發行)

目次	
挿入圖畫	二
信實の繪本物	四
印譜	九
陶器花活	十二
千代紙	十二
繪師の草紙説明	十二
日本美術の沿革	十四
美術獎勵成績	九
恩賜の銅燈籠	十
陶祖の名譽	十二
博物館の人物	十二
漆工競技會	十三
四季の座敷看	十四
難波の辨四室	十五
岩本見寛	十六
孤に鶴口	十八
モリス友染	十八
染工業に就き	十八
外國行の流行模様	二十一
輸出漆器の盛況	二十三
服裝展覽會	二十四
米國市場の日本陶器	二十五
千代紙	二十六
御花紙の製作	二十九
陶磁器は好況	二十九
社告	三十

乱舞一聲、
 此事の足し、
 須又言、
 公如、
 所、
 國、
 水、
 手、
 一、
 一、
 一、



ふも更なり朝臣の境遇を親く見るを得るは此巻を
措ては他に求む可らず此原本は天保年中か古筆了
伴が尋ね出して幕府に献上したるものにて今も徳
川宗家に秘藏せらるゝ由古寫本は住吉の二代具慶
廣澄の寫によりて狩野晴川法印の寫したると了伴
が幕府に献上する前寫せたるこの二本帝室博物館

かば悦よろこ
悦よろこびの
中ちゆうの最もつ
酒家しゅかに
て酒さけを
らざり

前田香雪稿

繪師草紙は藤原保實朝臣みづからの身上を畫と詞書とにあらはされしものにて其畫の巧妙なるは云ふも更なり朝臣の境遇を親く見るを得るは此卷を措ては他に求む可らず此原本は天保年中か古筆了伴が尋ね出して幕府に献上したるものにて今も徳川宗家に秘藏せらるゝ由古寫本は住吉の二代具慶廣澄の寫によりて狩野晴川法印の寫したると了伴が幕府に献上する前寫せたるこの二本帝室博物館に藏せらる又水野家(紀州新官舊藩主)の藏版なる丹鶴叢書の中にも縮寫して出されたるものあるが茲に寫出されたるも亦能眞を寫せりと見ゆ原本も前半は缺て後半のみなるが其概略を云へば朝臣は

後鳥羽院土御門院順徳院の三朝に仕へて上の御覺
えもめでたく正四位下左京權太夫たりしが夙く所
領を失ひて貧しき年月を送られしにゆくりなく伊
豫國の某莊を知行に賜はる由の宣旨を下されし
かば悦びて其宣旨を讀て北堂に告給ふどころと其
悦びの祝宴を開かるゝ處をかゝれたるもの此畫卷
中の最も興味ある處なり祝宴に列りし人々は皆大
酒家にて貯への酒にては不足なりしかば俵を出し
て酒を買しめしに此使の者も酔て足許のたしかな
らざりしかば椽板の朽目に足を踏落して酒多くを
こぼしたるに水を入れて出したれど客人も皆酔ひ
たる末なれば是に心づくものも無りしとの詞書あり
又新に賜れる伊豫國の知行所は路遠くて不便な
れば都近き地に替賜はりたしどの事を歎願せられ

次目は、いふに、入つてくつ田舎へ
下つて、いわきから磐城に雲煙とある
海浜も丹波さうなれば、いづれより
馬の便あり、米を先ずれるも
よそひらきあるふ。水のあるきぬ也
に、何くて土成の砂礫とかする次
事荒使などして年貢のなきもの
いかにあるか。この外に、竹のりもとて
さるがれハ、大方正解なきふいふ、種
すゝむく家のあまき商人の取柄なき
庭の音なきなりし、秋のかみ手かれ
に、新もちやゆきといふので、さう

舞つたうゝにやうな
事ゝのえーるは



技藝之友 第三號

(明治三十八年十二月十五日發行)

目次

挿入圖畫	
信實の繪卷物	硯屏
印譜	脇差の小道具
陶器花活	銀製花盛器
千代紙	
繪師の草紙説明	二
日本美術の沿革	四
美術獎勵成績	九
恩賜の銅燈籠	十
陶祖の名譽	十二
博物館の人形	十二
漆工競技會	十三

四季の座敷着	十四
難波の蒔葎堂	十五
岩本昆寛	十六
狐に鰐口	十八
モリンス友染	二十一
染工業に就き	二十三
外國行の流行模様	二十四
輸出漆器の盛況	二十五
服裝展覽會	二十六
米國市場の日本陶器	二十九
千代紙	二十九
御花瓶の製作	二十九
陶磁器は好況	二十九
社告	三十



繪師草紙は藤原保實朝臣みづからの身上を畫と詞書とにあらはされしものにて其畫の巧妙なるは云ふも更なり朝臣の境遇を親く見るを得るは此卷を措ては他に求む可らず此原本は天保年中か古筆了伴が尋ね出して幕府に献上したるものにて今も徳川宗家に秘藏せらるゝ由古寫本は住吉の二代具慶廣澄の寫によりて狩野晴川法印の寫したると了伴が幕府に献上する前寫せたるこの二本帝室博物館に藏せらる又水野家(紀州新官舊藩主)の藏版なる丹鶴叢書の中にも縮寫して出されたるものあるが茲に寫出されたるも亦能眞を寫せりと見ゆ原本も前半は缺て後半のみなるが其概略を云へば朝臣は

領を失ひりやうし豫國の基よのくにになかば悦よろこびの祝し中ちゆうの最もつこ酒家しやうかにてさけて酒さけをか買からざりらこぼしこたる末すゑにまた又新またあらたにみれば都みやこに

○日本美術工藝の沿革（承前）

六
華
生

[illegible]

藤原時代に續いて來るのは平家時代だが、此の平家ふぢはらじ だいの先生方せんせい がた、其身そのみは武家ぶけの出でであるけれども何時いつか雲上うんじやうの華奢風俗きゃしゃふうぞくに化くわせられて、武士ぶしの荒あらっぽい所ところを忘わすれて、彼の鐵漿かねくわく黒々くろくろくと太眉毛ふさめゆげの公家風くげふうに爲なつたから、衣服いふくから住居すまゐ、美術工藝びじゆつこうげいの點てんに至いたるまで藤原氏ふぢはらうじの舊きうに依よつて、別べつに新機軸しんきじくを出ださないのであ

へば、繪えは
た寺院じあんか、
の織物類おりものるい
もあるが、
る。窯物やきものは
製造せいぞうには金こ
冶ちには弘こう仁に
小鍛冶宗こかづむね治ち



海防も丹回されたりなり
 属の使來歸り來て定てれり
 又といふ事あるふふ所のあるき海に
 に何とて土佐の御殿とがすま次
 事定使とてきて年貢のなきあり
 いかとかなりこゝれに付りも是
 さをせられ大なる御ちきふいし腰
 へひく家のあき海人の記ある
 庭のききききし物のかる人され
 徳義もちききききききききき
 りのあきききききききききき
 又とては焼婦の別とてききき
 うれしききききききききき
 とききききききききききき
 小ききききききききききき
 とききききききききききき

○日本美術工藝の沿革（承前）

六
華
生

藤原時代に續いて來るのは平家時代だが、此の平家の先生方、其身は武家の出であるけれども何時か雲上の華奢風俗に化せられて、武士の荒っぽい所を忘れて、彼の鐵槩黑々と太眉毛の公家風に爲つたから、衣服から住居、美術工藝の點に至るまで藤原氏の舊に依て、別に新機軸を出さないのである、即ち此の時代は藤原美術の末葉に算入して宜しいので、其の製作品として今日に遺存て居るのは、安藝の嚴島寫經等で、其の仕立から軸金具、見返しの繪の如きまで稀世の絶品として今も鑒賞家に持囃されて居る。要するに此の藤原、平家時代、即ち平安の京に於ける美術工藝界の概略を云

へば、繪は佛畫。家屋の壯なるは丹碧を塗り立てた寺院か、公家方の寢殿作。衣服の束帶や十二單の織物類。彫刻は勿論佛像。日用の碗皿類は木製もあるが、贅澤な上つ方では多く銀器を用ひて居る。窯物は陶器、漆工は頗ぶる發達して、螺鈿の製造には今日迄も目覺しい物が遺存て居る。刀鍛冶宗近、友成、助平、波平行安、包平、光宗、栗田口國頼、國安、其外備前の一文字派の名工が輩出してゐる。其に隨つて今云ふ刀劔の小道具類の製作も非常に進んで、兵庫鎖の太刀扨と云ふと到底後世の作人の及び難い華麗な物が造られて居る。又甲冑弓矢の製作、今京都の寺社等に遺て在る物、又た集古十種に載てある物、源平盛衰記、

伴が尋ね出して幕府に献上したるものにて今も徳川宗家に秘藏せらるゝ由古寫本は住吉の二代具慶廣澄の寫によりて狩野晴川法印の寫したるを了伴が幕府に献上する前寫せたるこの二本帝室博物館に藏せらる又水野家(紀州新官舊藩主)の藏版なる丹鶴叢書の中にも縮寫して出されたるものあるが茲に寫出されたるも亦能眞を寫せりと見ゆ原本も前半は缺て後半のみなるが其概略を云へば朝臣は



次日いふやふとて田舎へ下りりぬさるるに雲煙とあり海浜も月日さられりやまらるるの邊を歩り來て見たる

中の最も興味ある處なり祝宴に列りし人々は皆大酒家にて貯への酒にては不足なりしかば俵を出して酒を買しめしに此使の者も酔て足許のたしかならざりしかば椽板の朽目に足を踏落して酒多くをこぼしたるに水を入れて出したれど客人も皆酔ひたる末なれば是に心づくものも無りしとの詞書あり又新に賜れる伊豫國の知行所は路遠くて不便なれば都近き地に替賜はりたしとの事を歎願せられ

しに猶能く考置くべしとの御内意ありし由をも書たり又ひとりの男子を惜きながらに出家せしめられし事をも記したり朝臣は右京大夫隆信朝臣の長子にて男五人女四人の子あり長男は爲繼次男は信蔭三男は信義四男は出家して醍醐寺の信海法印とよばれ五男は三井寺の守圓阿闍梨是なり父隆信朝臣も名ある繪かきにて特に肖像畫に譽れありしが此朝臣は夫にも倍て名譽高かりしかば後鳥羽院の勅に因て行幸の圖を三卷にかゝれたるが供奉の大臣を初め重立つ人々は皆肖像にかゝれたりと云ふ又中殿御會の繪といふものあり管絃和歌につかへまつれる諸卿を皆肖像にかゝれ朝臣自らもまた此中にある處をかゝれたり右の外世に存りて有名な三十六歌仙像(佐竹家藏)二卷北野天神緣起八卷

と斷片となりて諸家にある上疊の歌仙像平業兼の歌をかける小形の歌仙像などあり朝臣の畫に就ての名譽談は多かれど繪師草紙の説明には要無ければ略しぬ朝臣は繪畫に名あるのみならず詠歌にも巧妙にて多く撰集中に入れられたり其身まかられしは文永二年十二月十六日にして年齡八十九歳なりしと傳へたり新拾遺集に如圓法師の歌ありて其端書に云信實朝臣みづからの影を寫し置て待けるを身まかりて後見てよめる「思出て見るもこひしき面影を何なかなかに寫し置きけむ」と見えれば他人の肖像のみならず自像をもかき殘されしものと知らるれど今に遺れりや否やは詳かならず

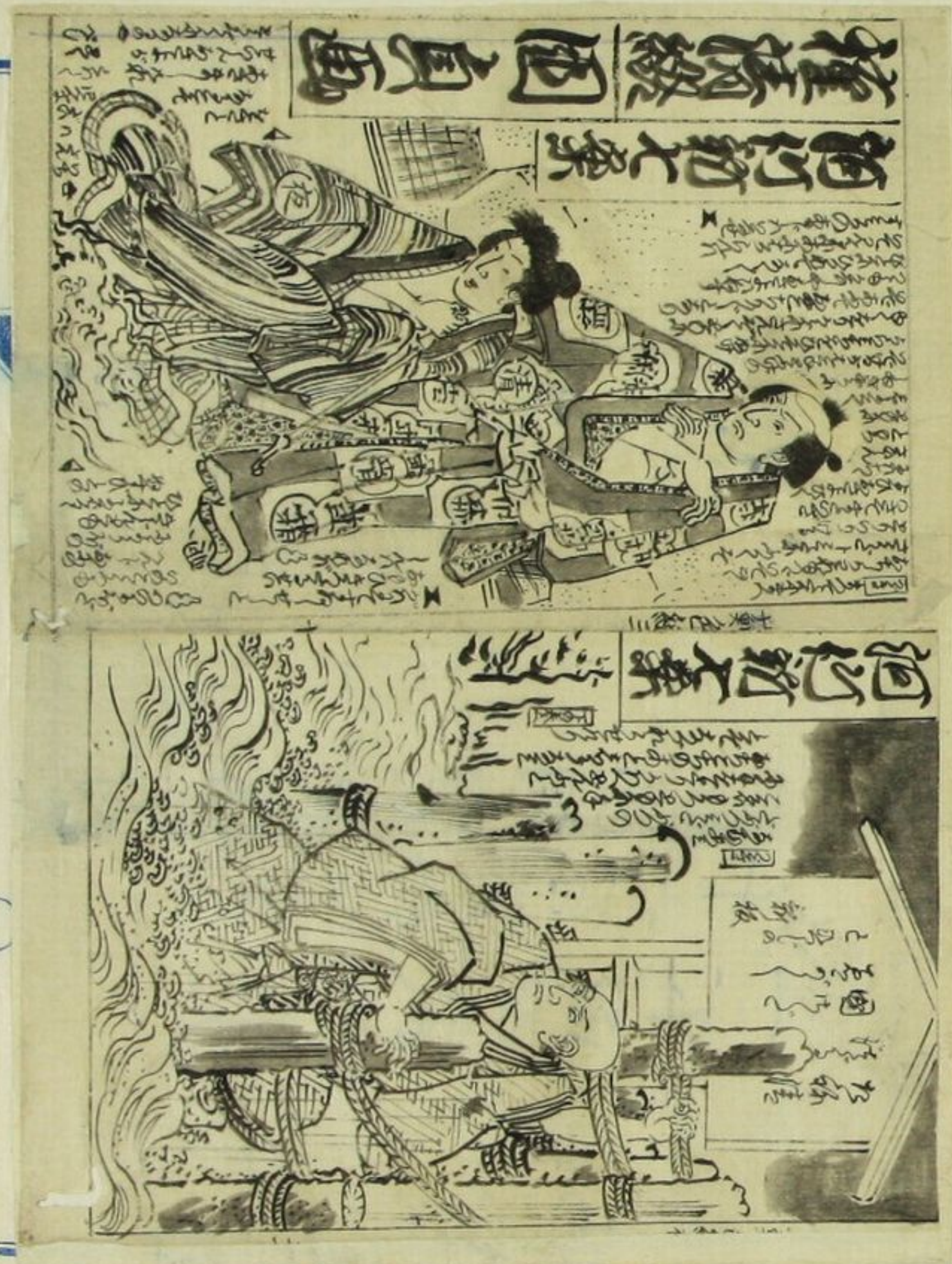


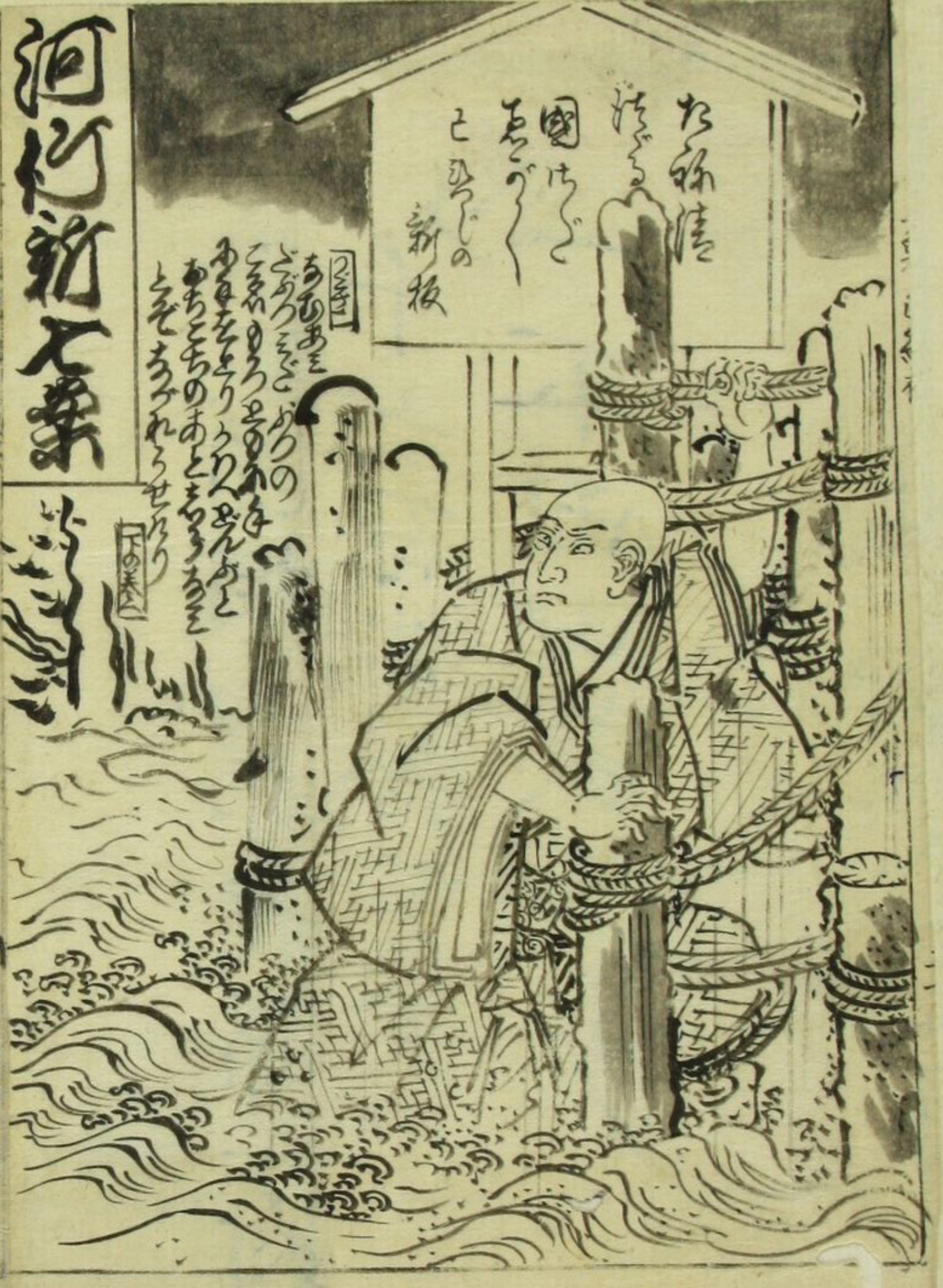
歌碑一片以吾之

樂翁公櫻山別墅所建也墅距城之西北一里
許文政癸未八月移封於勢之九華墅遂
廢以碑賜藤田忠包因移置之於度中
愛慕之至也碑無一名字蓋公有不測之慮
也嗚呼古之人恐其功名之湮沒刊石者豈
有之如晉之杜元凱勒碑一投涯水之底一
番峴山之巔彼慕功名亦太矣吾之

公乃不然也解政乃歸功於人在國乃憂及
士民聽刑政而有暇乃來墅歌詠觴酒以自娛
娛莫後不及士民者絕無功名但泄平之志此
歌碑耳欽思其昔日雖余為黃口之兒時
猶髣髴其芝眉况聽言其遺音流風
終不知涕泗縱橫也忠包求余記欲傳後世
余亦深恐之臣之業也因遺其固陋作記使
以勒石也

庚戌己未歲四月日九華森精撰并書





河仙船七葉

新板

下巻

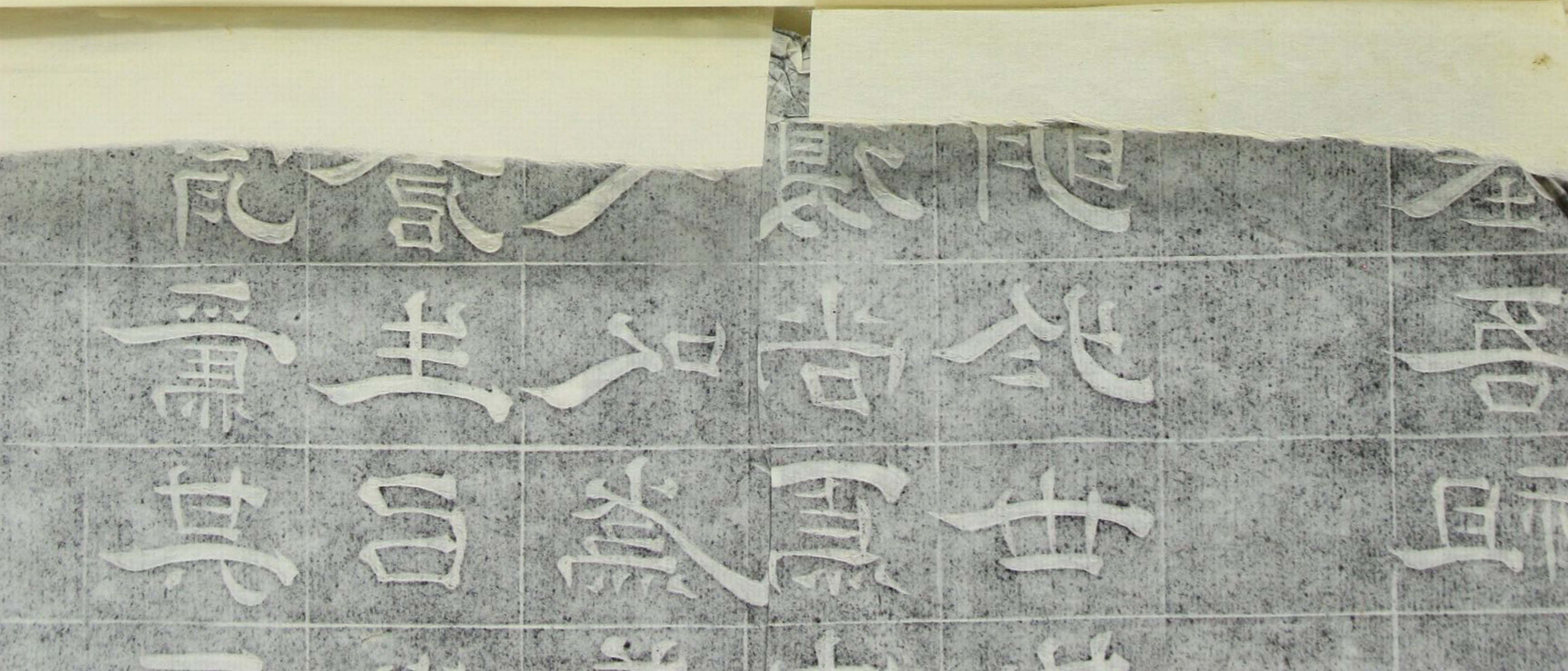
河仙船七葉

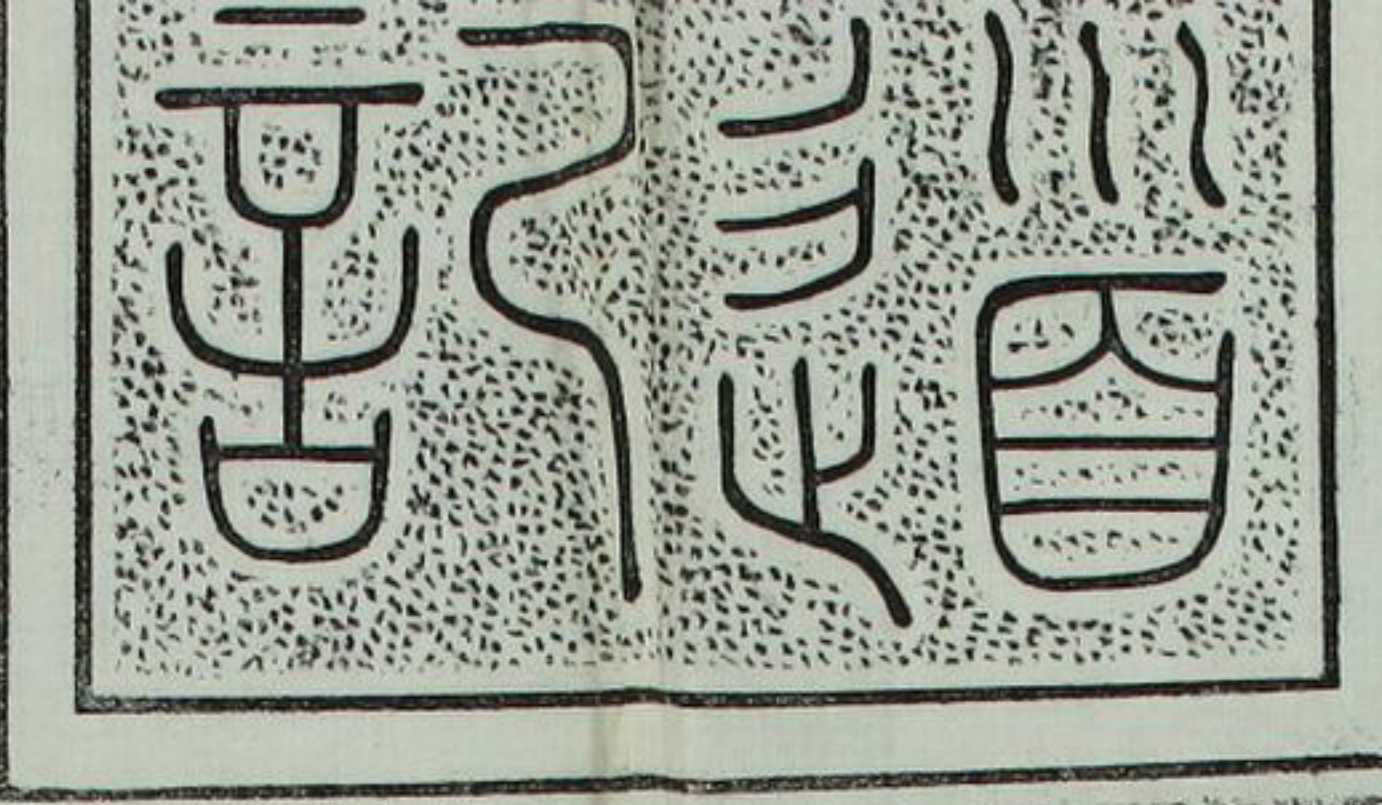


河仙船七葉

種清終面自画

種清終面自画





弘道館記

弘道者何人能弘道也道者何天地之

設也恭惟一古

神聖立極垂統天地位焉萬物育焉其所

寶社以史無窮國體已之尊嚴蒼生已之

聖子神孫告不胥自足樂取於人以爲美

皇猷於是斯道俞大俞明而無竭告焉由

皇仁陵夷禍亂相踵大道之不明於世也

東照宮撥亂反正尊

王攘夷允武允文以開太平上基吾祖

曰本武尊之爲人尊神道繼武備

屏於國家爾來百數十世承

所啟推弘斯道發揚

建御雷神者何以共亮天功於草昧

繇來也其營我子廟者何以唐虞三

所召益大且明不偶然也嗚呼我國

土之敦忠孝天二文武不岐學問事

報之國家無窮之思則豈徒

神皇在天之靈亦將降鑒焉設斯館以

天保九年歲次戊戌春三月齊昭撰

人能弘道也道者何天地之大經而生民不可須臾離
上古統天地位焉萬物育焉其所飢照臨六合統御寓內老
窮國體曰之尊嚴蒼生曰之安寧靈夷戎狄以之率服
不胥自足樂取於人以爲善乃若西土唐虞三代之治
道俞大俞明而無竭告焉冲世以降異端耶說誣民惑
亂相踵大道之不明於世也蓋亦久矣我
亂反正尊
之爲人尊神道繼武備
國家爾來百數十世承遺緒沐浴思澤既至今曰則
斯道發揚先德乎此則館之所飢爲設也抑夫祀
者何以其真天以於草昧留威靈於茲土欲原其始報
營我子廟者何以唐虞三代出道折衷於此欲欽其德
且明不偶然也嗚呼我國中士民殫矣匪解出人斯館有
孝天二文武不岐學問事業不殊其敬神崇儒養有
家無窮之思則豈徒祖宗之志弗墜
靈亦將降鑒焉設斯館以統其治教者誰權中納言
武次戊戌春三月齊昭撰文并書及篆額

生民不可頓與離者也弘道之館何為而

臨六合統御寓內者未嘗不由斯道之

變夷狄以之率服而

西土唐虞三代之治教資已贊

降異端耶說誣民惑去俗儒西學舍此從彼

人矣我

嘗受封於東土夙慕

思澤既至今曰則苟為臣子者豈可弗思

臥為設也抑夫祀

茲土欲原其始報其本使民知斯道之所

衷於此欲欽其德資其教使人知斯道之

效敬神崇儒藝有偏黨集衆思宣羣力已

志弗墜

者誰權中納言從三位源朝臣齊昭也

篆額

Fragment of a paper strip with Japanese text, likely a title or chapter heading, partially visible at the top of the page.



170 1 2 3 4 5 6 7 8 9 160 1 2 3 4 5 6 7 8 9 150 1 2 3 4 5 6 7 8 9 140 1 2 3 4 5 6 7 8 9 130 1 2 3 4 5 6 7 8 9 120 1 2 3 4 5 6 7 8 9 110 1 2 3 4 5 6 7 8 9

進年係拾壹等包去國城官寧草溪那明娘年係拾三之生那
包屋三嘉淑有安年係拾伍

第貳戶分河沿會雲年係拾叁年生不南場父良人日石祖良人日山曾祖良人汝於外祖良人車富池
妻松那日今年係拾陸戌年生主孫屋河大瑜父良人右性祖良人次先曾祖良人李昌外祖良人金
性右李金那亦係子居那

第參戶寡女成昌年係拾陸戌年生不昌寧父良人弟福祖良人妻生曾祖良人介另外祖方之女昌年
拾柒丁亥生子順宗年係拾壹年未生亦係子居那

第肆戶記官河銀旭年係拾柒丁丑生不晉卿父將仕郎得仁祖將仕郎應斗曾祖宣略將軍行童驍衛副
司果顯番外祖將仕郎張恭顯卒仁同妻金氏年係拾玖乙亥生籍金何父安遠戶長好鍾祖折重將軍
行童驍衛副護軍元重曾祖安遠戶長九昇外祖安遠戶長朴重桓子貴範年叁子丑生那再分
年係拾捌同那四子生那卜礼年係拾貳年一子生那與廿年係拾貳亦係子居那

第伍戶分河守太年係拾玖乙亥生不晉卿父折重童僅祖鄉吏受澄童祖安遠戶長順星外祖通政李碩
童不鉄城妻裴良年係拾伍己卯生不金何父系俊益輝祖學生弟當童祖通政以童外祖系趙仲奉
年咸安寧母李氏年係拾叁年生亦係子居那

第一百二十四號音朴旺伊

第陸戶祿那石娘年係拾叁年生密場父良人四子三那女之主縣屋鄉吏河得仁字子必三
年係拾甲申生亦係子居那

第貳戶貢生河奉汴年係拾肆年子生不晉卿父鄉吏應會祖鄉吏自崑童祖鄉吏得漢外祖碧沙道
察訪金弟鑑平金海妻鄭姓年係拾陸戌年生不草溪父通政永得祖通政斗雲童祖通政柱外祖系李
仅江下密場侍母金姓年係拾肆年子生不晉卿父折重將軍行童驍衛副護軍典番祖將仕郎海島童祖

第參戶將仕郎河老齡年係拾壹年生不晉卿父折重將軍行童驍衛副護軍典番祖將仕郎海島童祖
通德郎自崑外祖贈嘉義大夫漢城府左尹兼五衛都總府副總管李星必年亥卯妻黃氏年係拾肆年申生

原父幼學聖載祖學生赫漢曾祖學生信敏外祖學生柳霖平星甲子德宗年貳拾柒丁丑生子德信
信亮美已生年三月二日生於今牙年祥信貳卅莫助是一以生致云年祥信肆二以生致致元年參拾肆
性宗年貳拾貳貳子山致山亦已生於子之

第

四貢士河銀瑞年祥信捌丙辰生年番丹父鄉吏應參祖宣略將軍行龍驤衛副司果顯圖曾祖嘉善大夫同知中
樞府掌潤九外祖安遠長郭恭斌年亥風妻辛姓年祥信伍已未生年山父學生萬與祖學生昌善曾祖學生陞
立外祖學生成世道平昌寧子聖與年貳拾貳年亥子善與年拾捌丙戌生年子之

第

五戶付朴旺伊年信拾甲辰生年家場父良人白男祖良人弟正弟之介祖良人金生年亥妻松耶
連今年參拾貳戌生年主務河得義寧子用才年拾申生年子之

第一百二十五統音禹日卜

第

戶記官河鹿瑞年信拾甲寅生年番丹父鄉吏應參祖宣略將軍行龍驤衛副司果顯圖曾祖嘉善大
夫同知中樞府事潤九外祖安遠長郭恭斌年亥風妻朴姓故子記官有恒年參拾貳年亥子之

第

三戶安遠長河得義年伍後甲寅生年番丹父鄉吏應參祖宣略將軍行龍驤衛副司果顯圖曾祖嘉善大
夫同知中樞府事潤九外祖勵節尉守訓鍊院判官甘就和本昌原妻楊氏年伍後甲寅生年本家

湯父學生守億祖學生舜曾祖學生振西外祖學生孫芳龍本廣州侍父應奎年柒拾貳戌子生侍母甘氏年柒拾捌
丙戌生年子初東年參拾甲戌生年祥金氏年參拾貳年亥生年亥今一以生及順奉年伍拾柒

同卅二以生連心年祥伍三以生及用音年祥貳貳等二時辰咸陽水連年參拾柒同卅二以生及用才
年捌二以生及用節年參拾柒卅三以生及三伊年貳拾柒年守乃二以生及德才年貳拾伍年連心一以生及德奉

年拾柒等庚子戶之相半

第

三戶幼學孔道賢年柒拾貳年己生本昌原父學生恭依祖學生命昌曾祖學生崇祿外祖學生趙進連本咸安妻
氏年伍拾肆己酉生籍金海父學生行崇祖學生自元曾祖訓鍊奉事善永外祖學生月信章本坡平子始終年
族正戌生及馬堂金年祥伍等庚子戶之相半

今度小除責院
 竹本諸所寺院
 未成其外百姓
 屋敷よりある
 乃ち此木は
 中村の若達より
 米穀ありて
 急夜下中
 之の

五十六年

高七月

張道通

張道通

一筆之破筆也
公方標色法極難能
或法於世是晚於文
口云矣而勸學堂
就家中法也中
另使札者日本曾以
此紙

乃集勢方備

十月九日

卷之八

五

堀田公法方紙

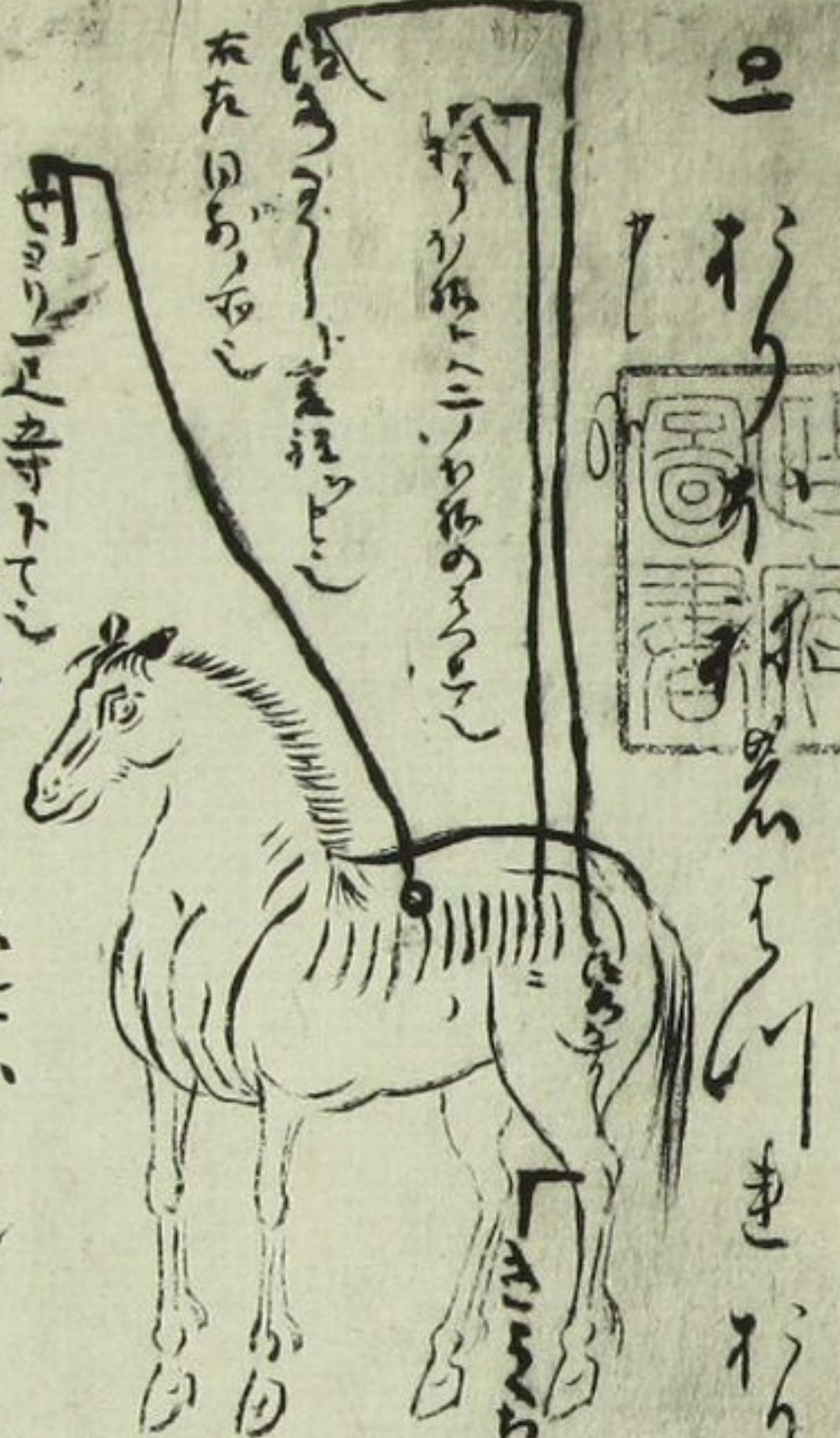
今并

所獲利樂悉迴向 菩提實際衆生界
首楞嚴義疏注經卷第十二

昨直熟思今生慙尤不可勝計知是勝切
罪障何以消除因茲證開此
真詮之板以拔積業之根所冀上報四恩
下資三有同出妄想昏域共入
楞嚴覺場
唐應二禪季春中泐武藏寺高師直敬誌

百六十八の巻目

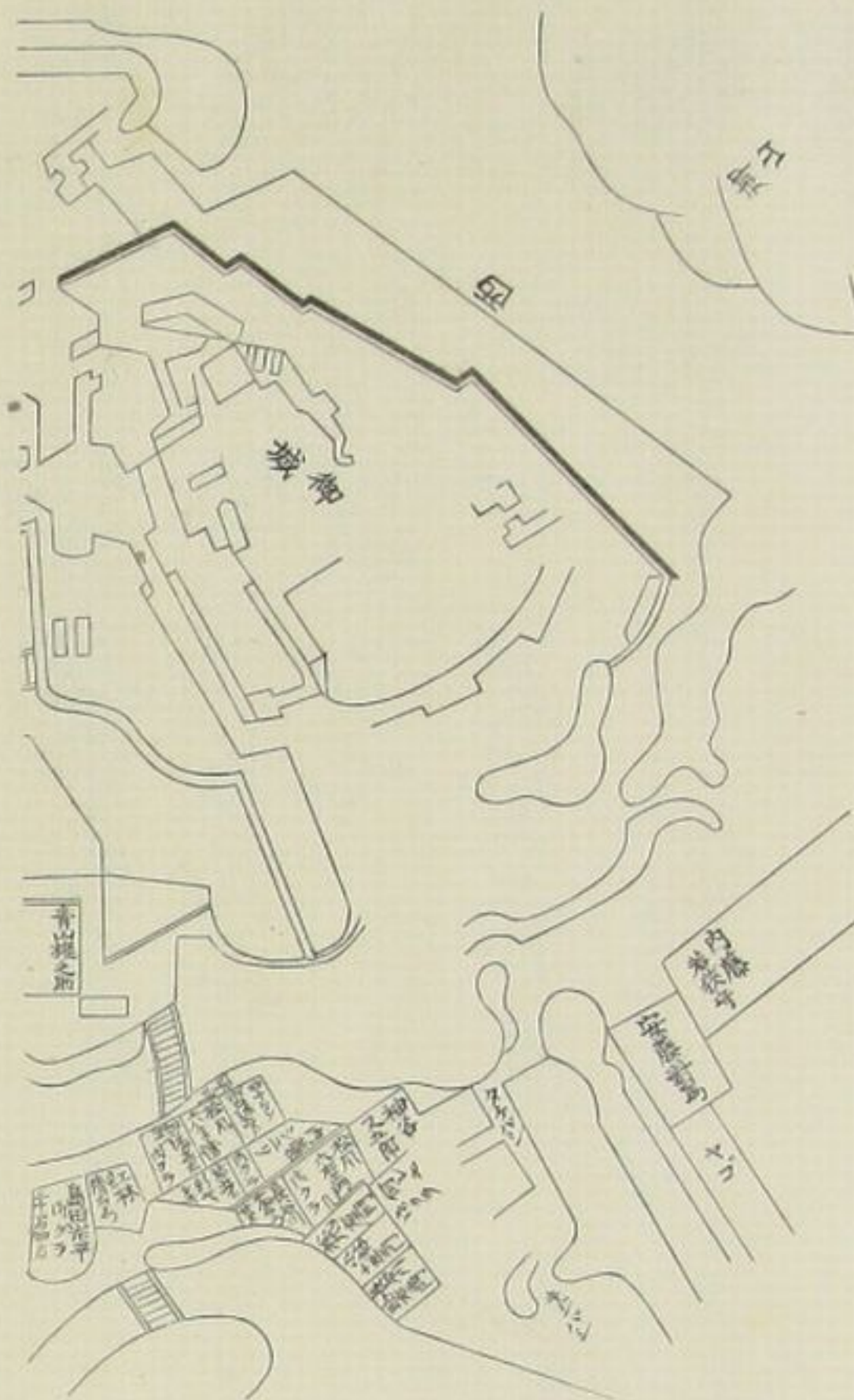
淺草文庫



二 すすはつ...
二 ちん...
二 ちん...
二 ちん...

ふさ...
ふさ...
ふさ...
ふさ...

慶長年間江戸圖



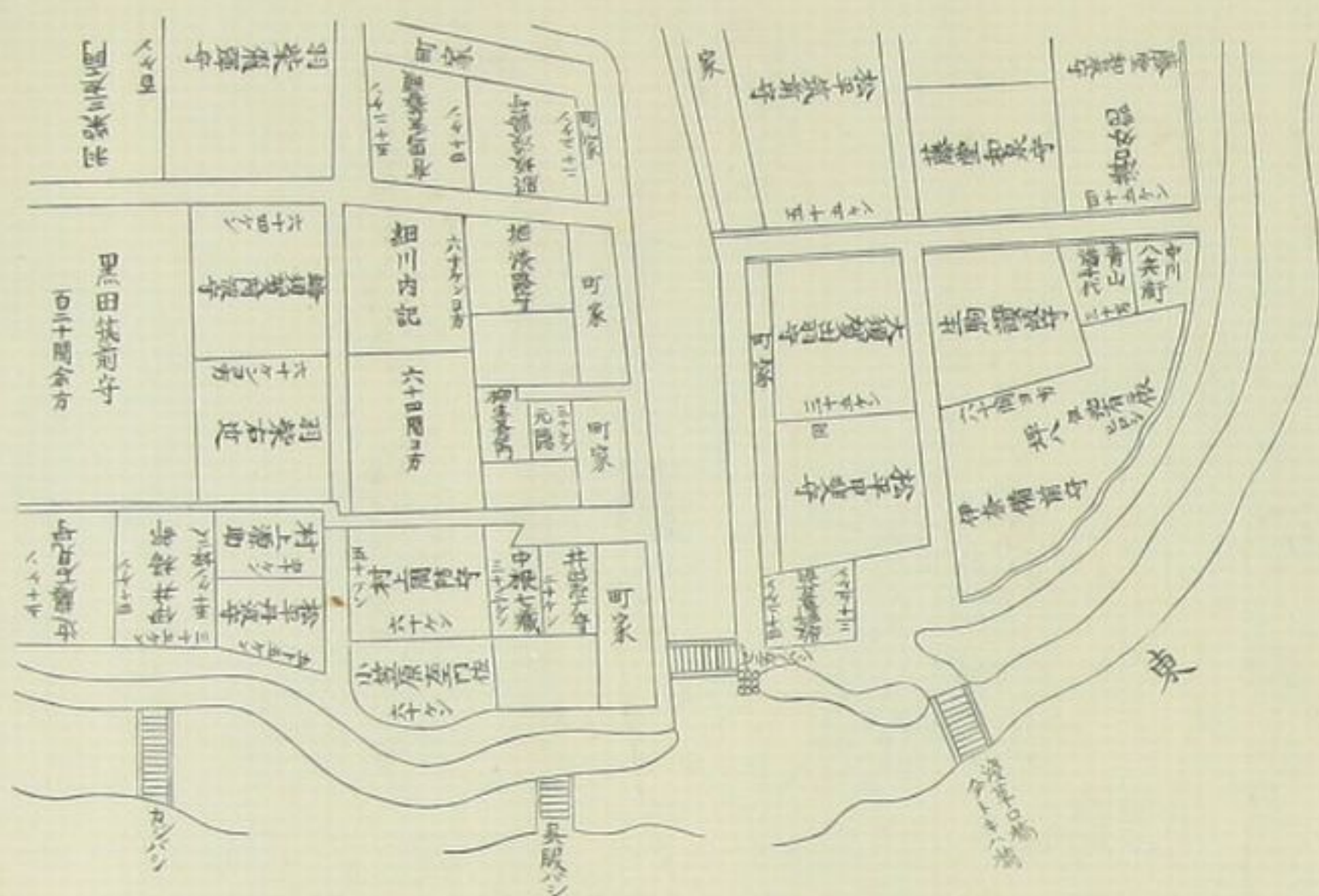
江戸
麴五吉



なにかきき
任分季奇
観音で
耳をわさ
やて時智
兵庫
あさきふき本
山東京傳出店



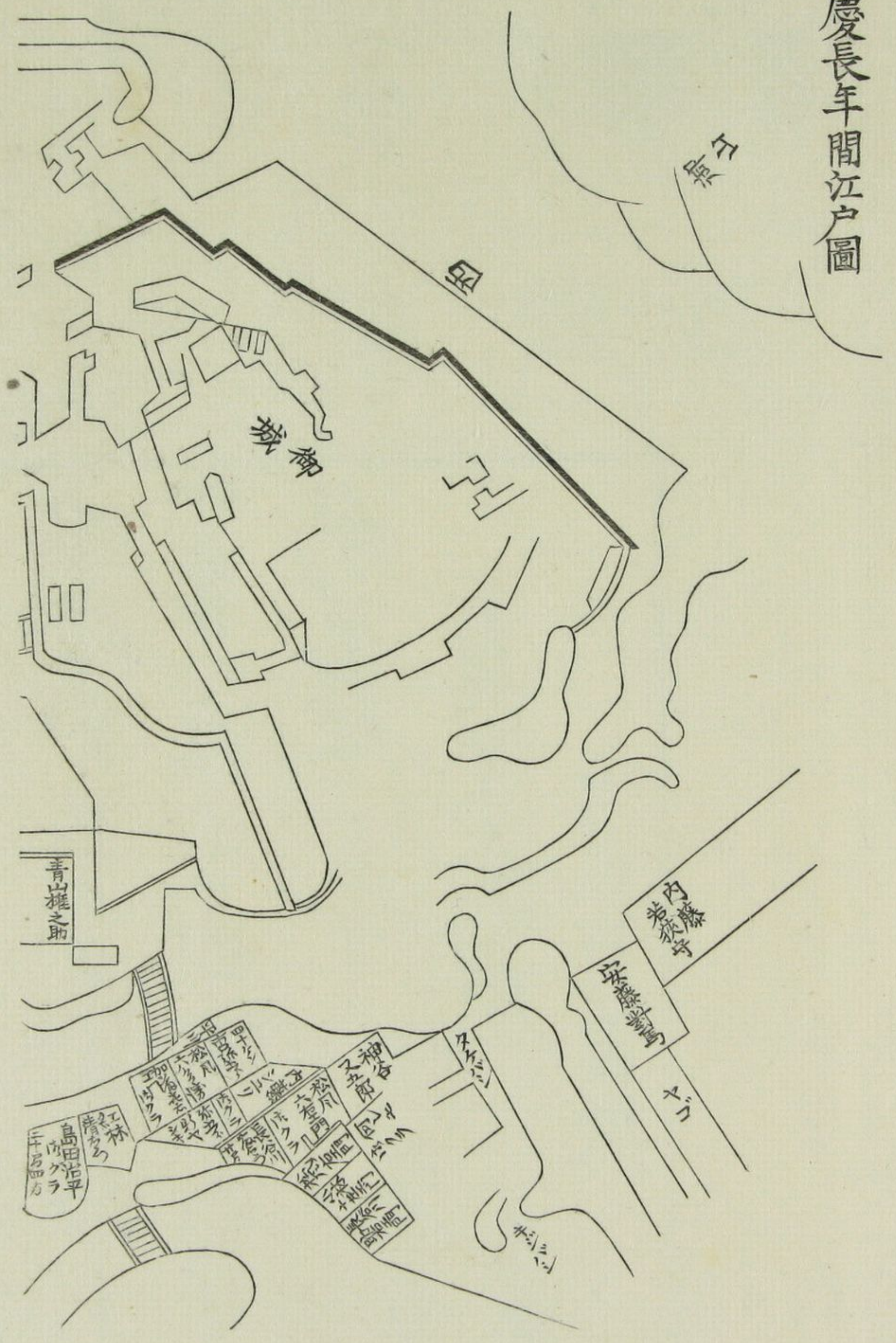
俵川太丈
市村竹之魚
生諸大古



一男帝
國牙西

慶長年間江戸圖

慶長年間江戸圖



江戸

伊井左近大夫
酒井左門
石川門
島田平
島田平
島田平

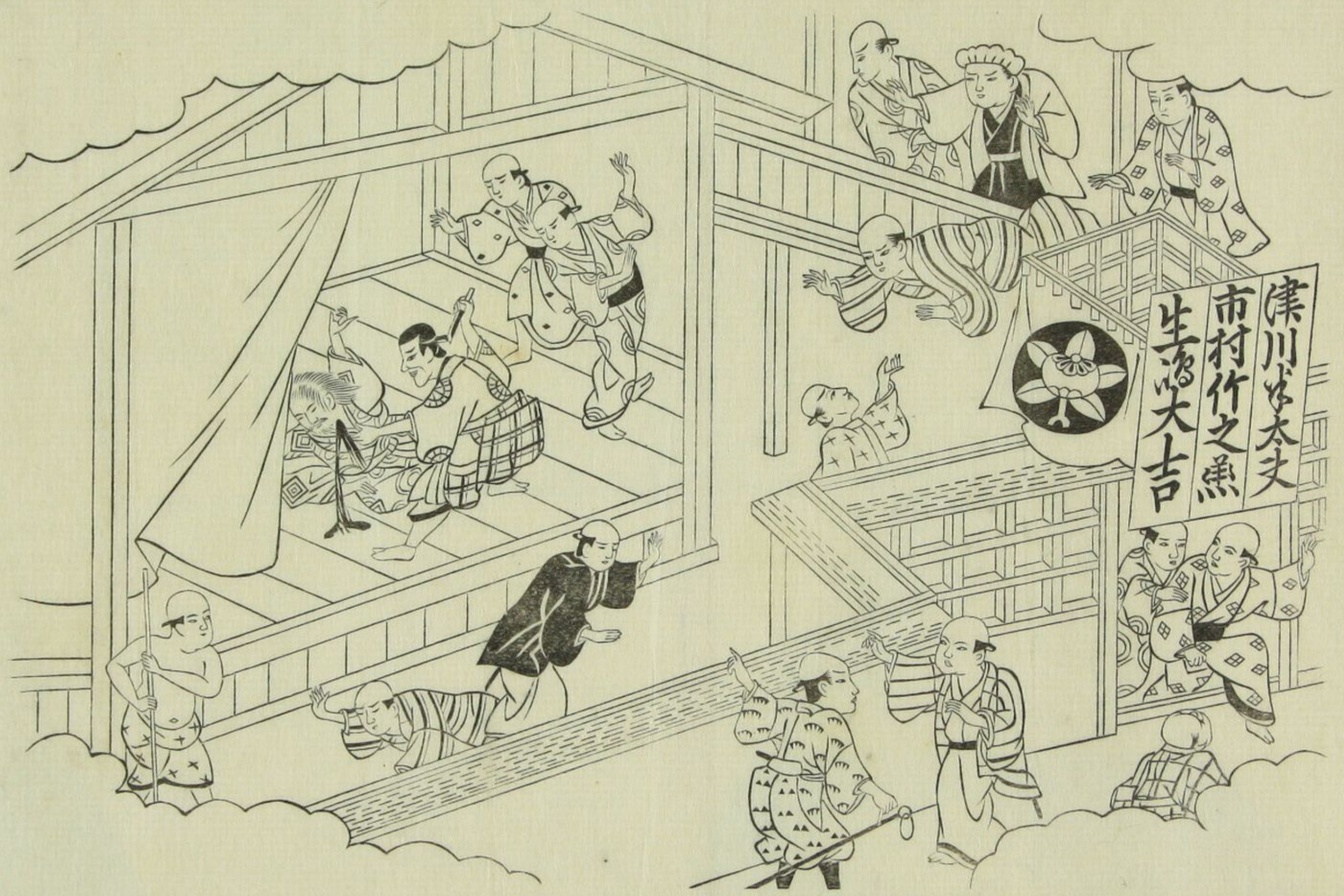




戸ヲ齋ヲ五ノ士ノ

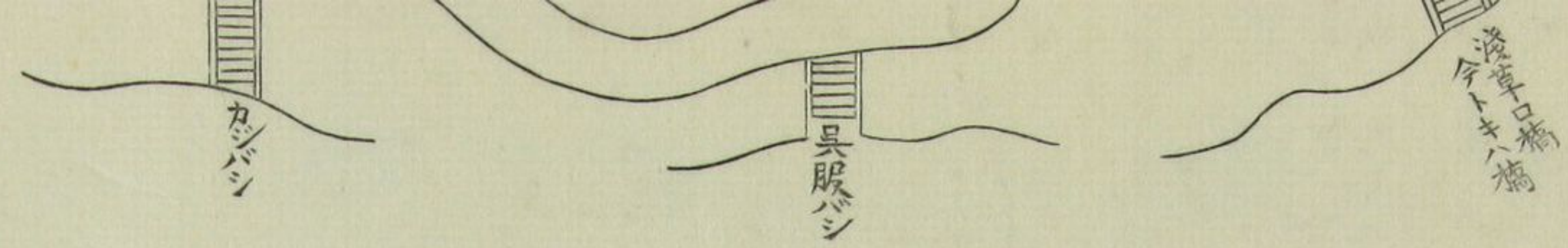
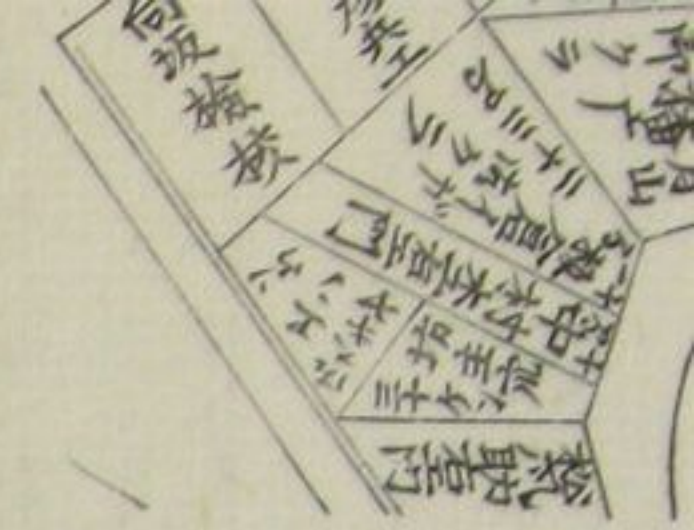


青山樓之助
島田平
内ケラ
千石四万



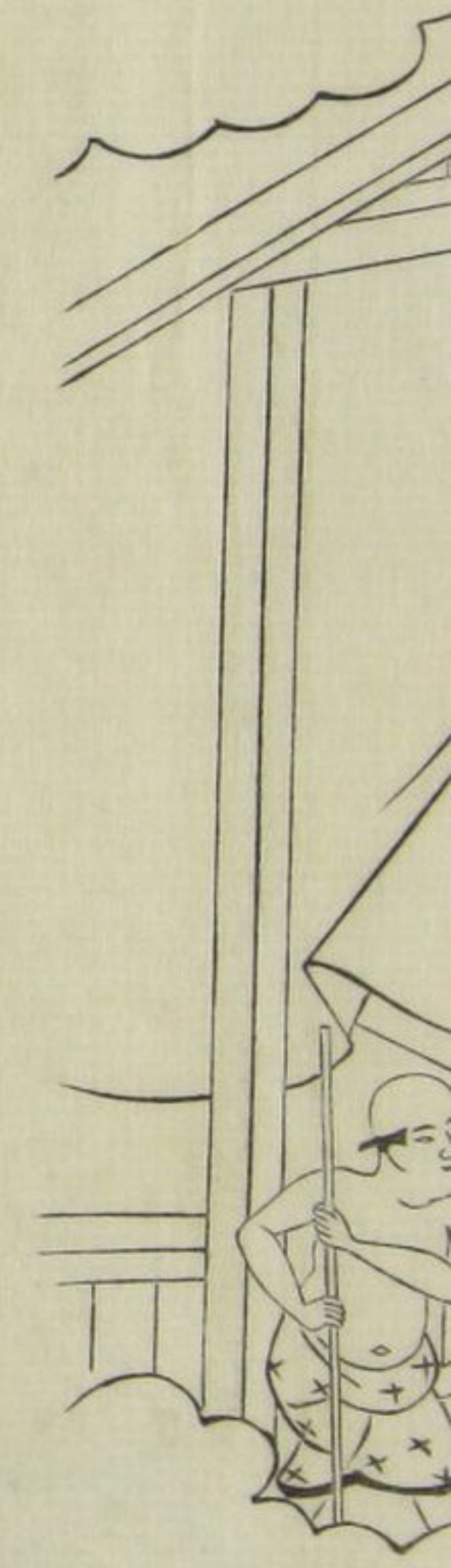
あさくさあき本
其角
やて時智
山東京傳出店

伊奈能藏
青山圖書
三十公同半



俳優公目市川團十郎
 於浪華島丙寅客舍死
 嘉永七年八月六日
 天王寺村一心寺葬行年
 三十三歲法名淨延信士

一勇齋
 國芳再



五使傳



五侯傳見



公平或執行

物恒

[illegible]

右世中名更重傳く可か
 一子一息而安まうく
 行是也

負孝貞歲

大傳馬三町目

うねる

正月吉辰

新板

五使傳



五使侍見



公平志執行

物恒



11 北条



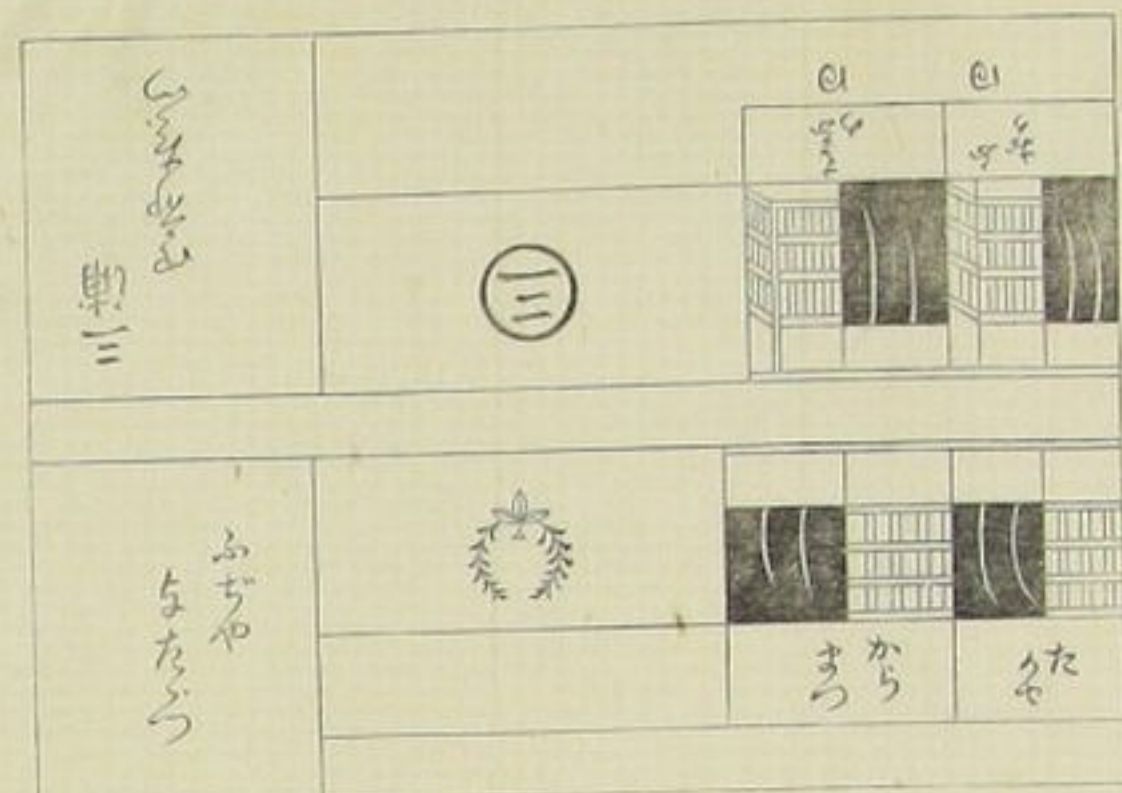
7 十五

國貞



1 山東

香蝶樓
國貞画



12 八



9 九



八式



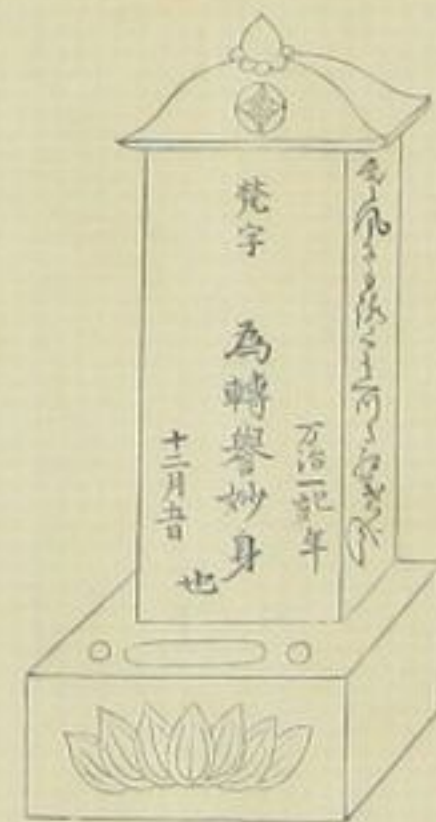
13 十三



10 十



6 六



高尾

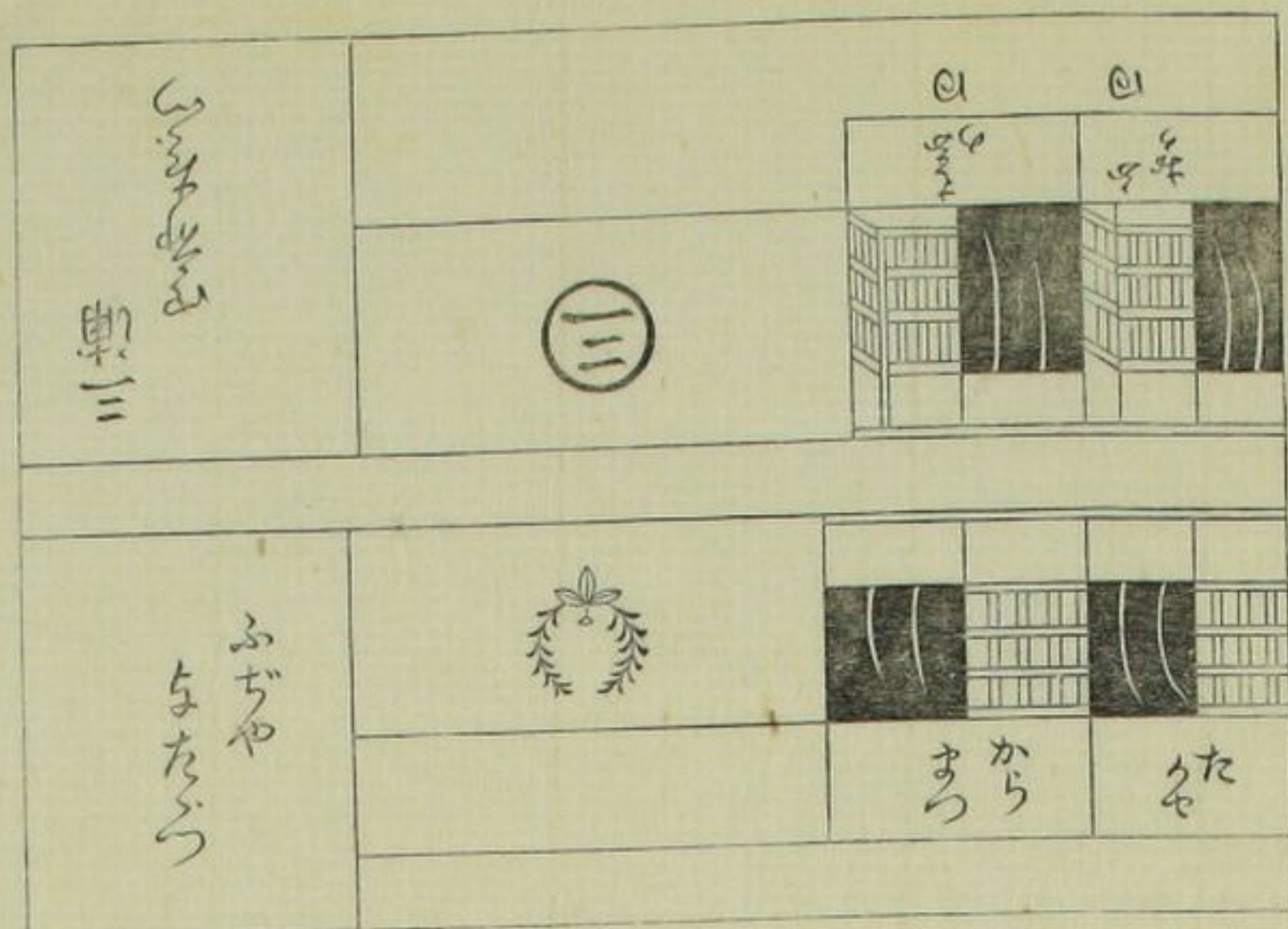


高尾

香蝶樓
國貞画



1 山東東條



24

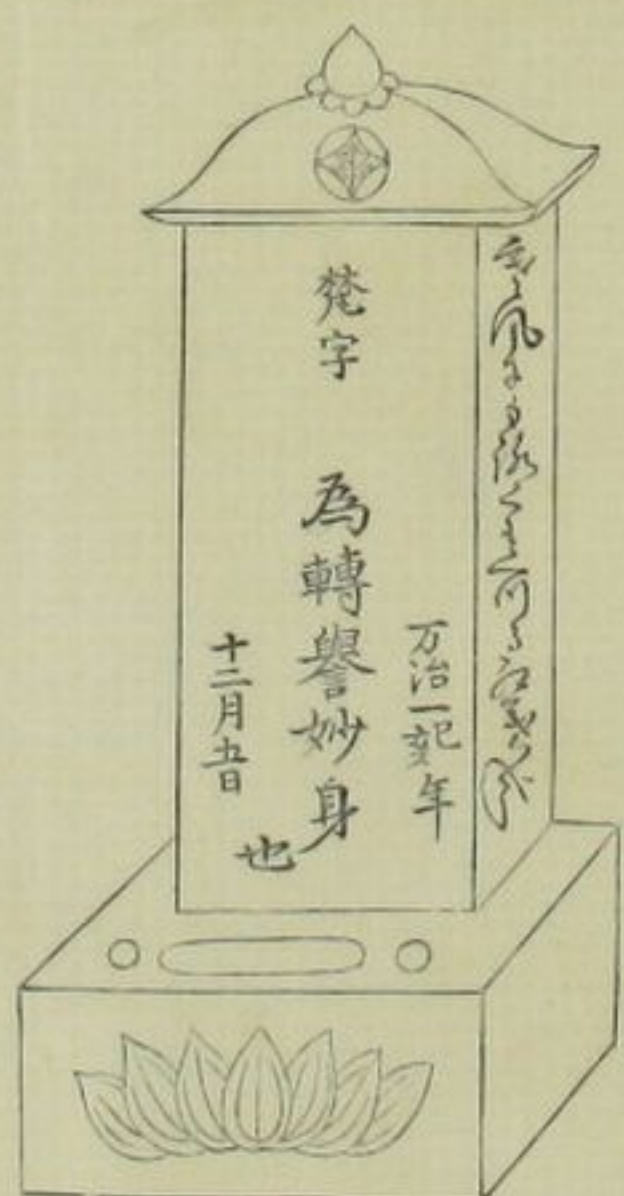
2 式部三馬



2



6 曲中馬琴

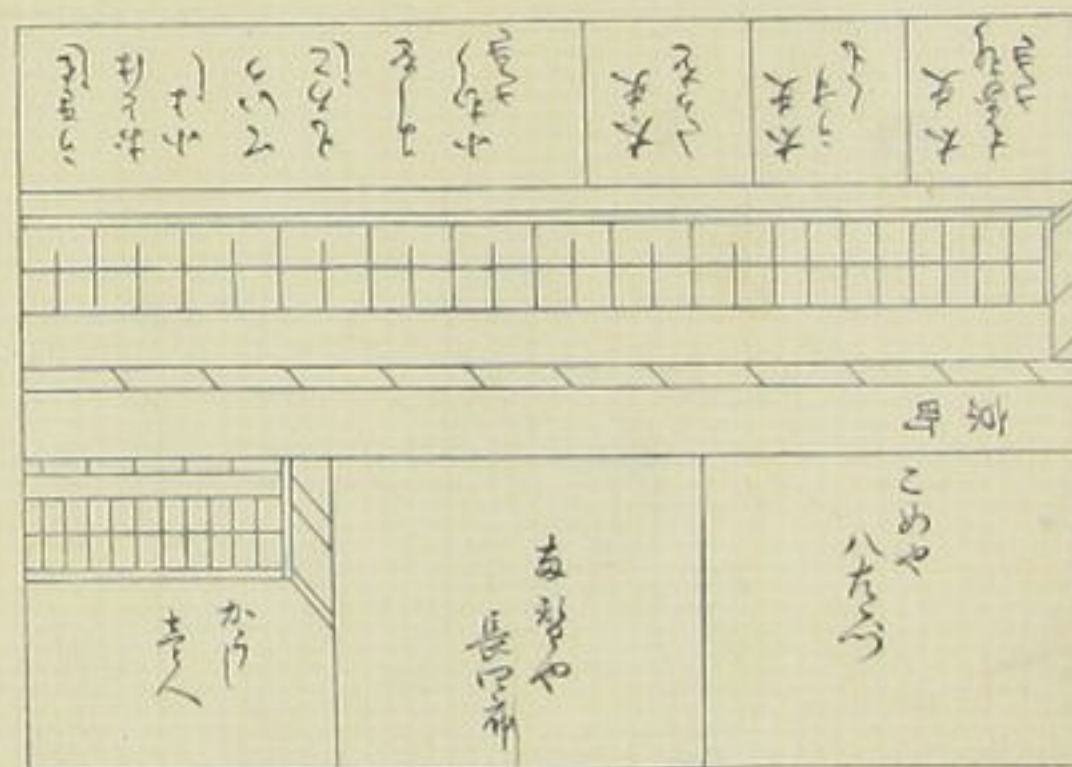
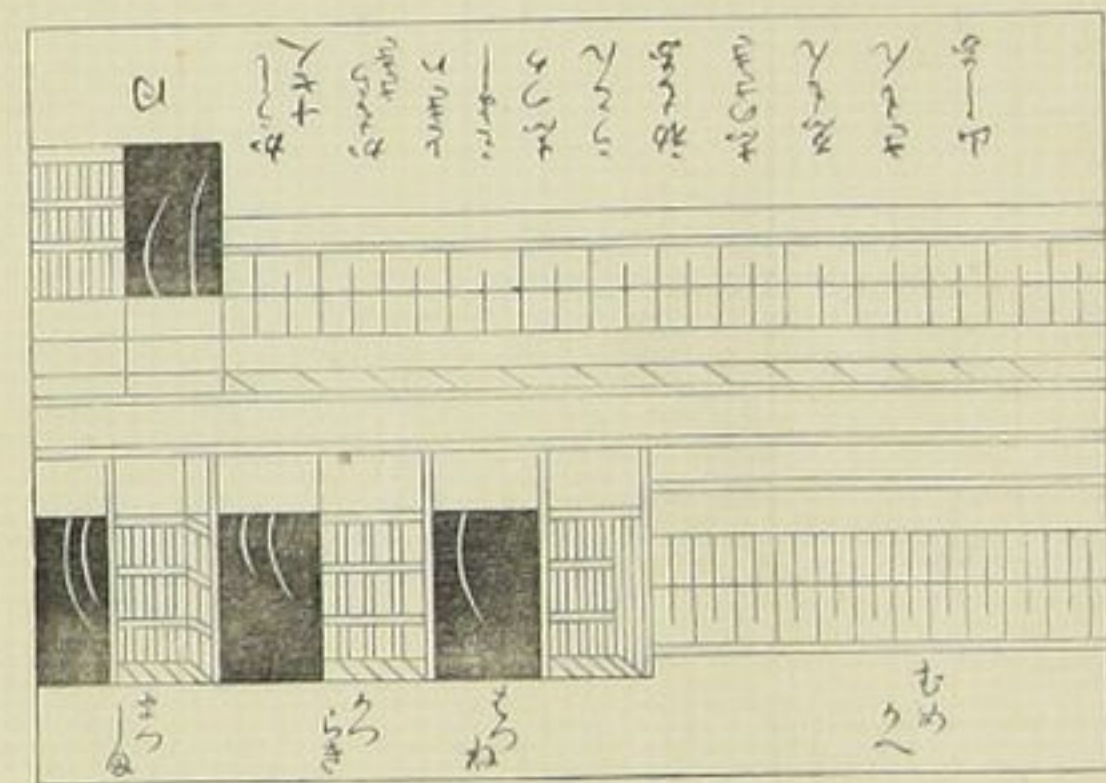
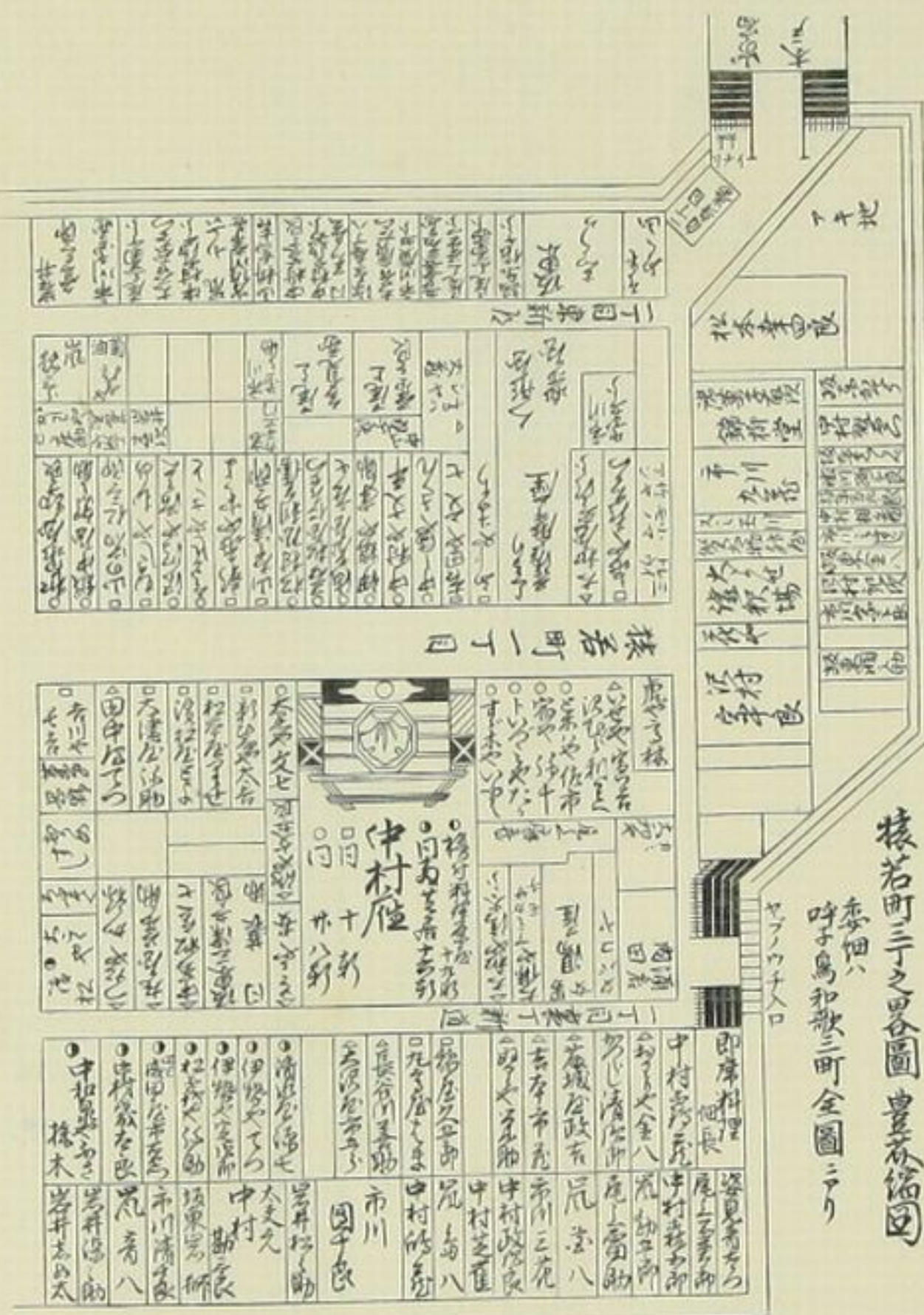
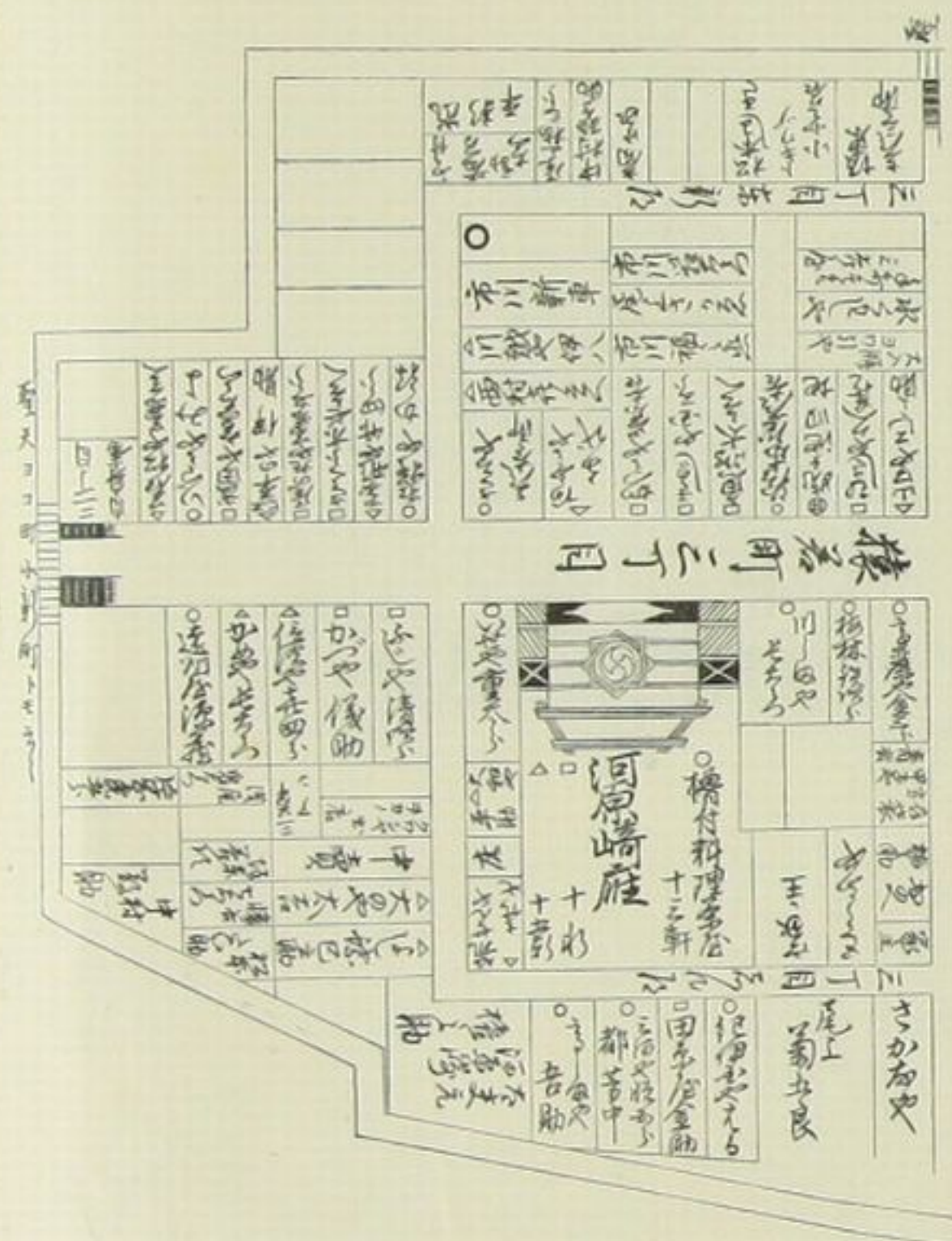


高尾考

高尾考



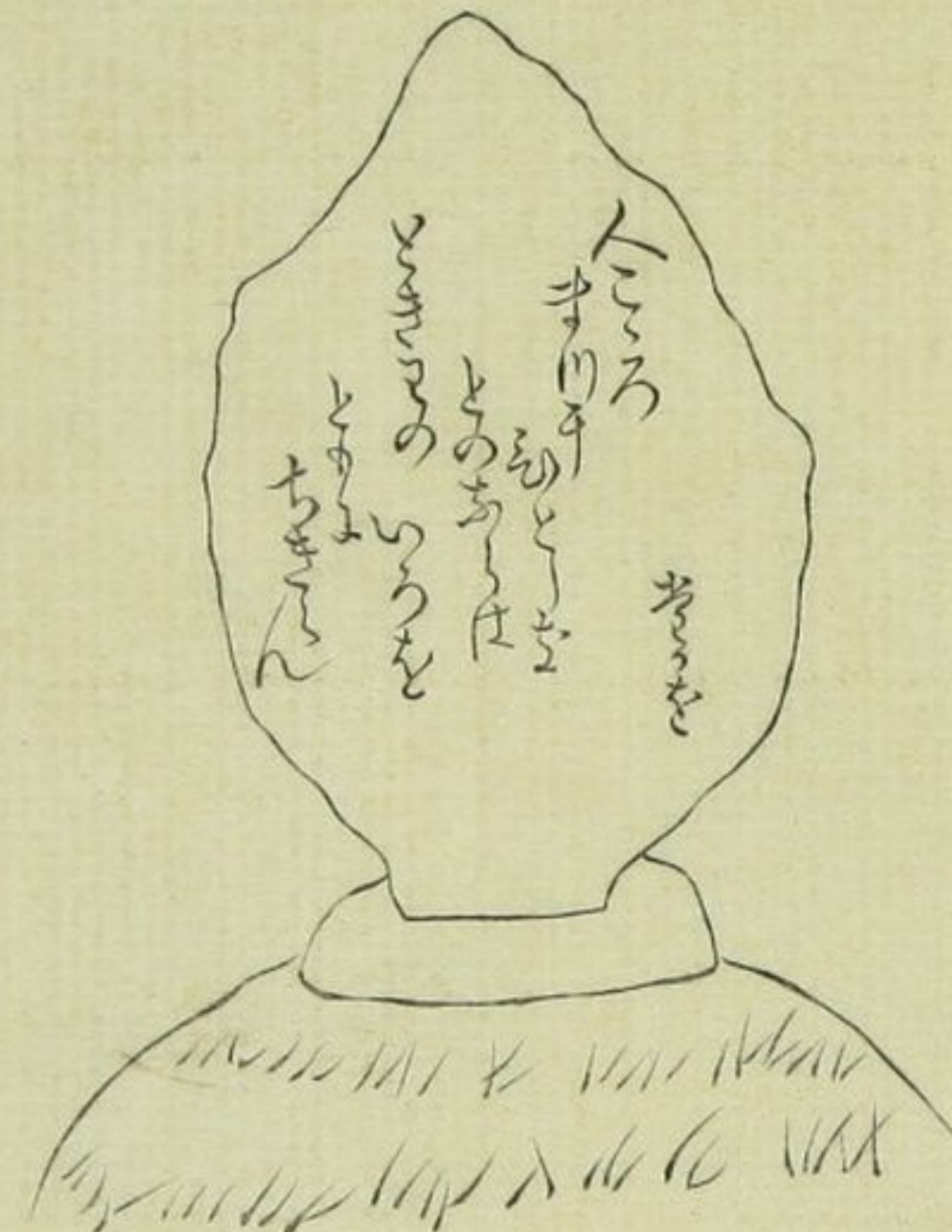
右世中名を更に出傳へて中名
一宗一息を安んずる一板
なり也
貞享貳歲
大傳馬三町目
正月吉辰
新板



50



51



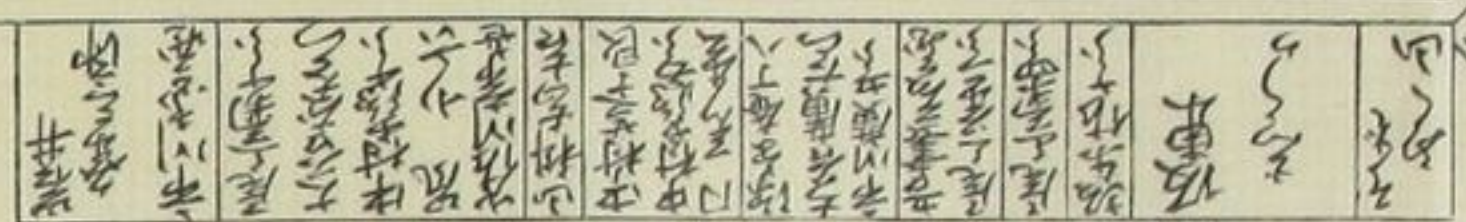
22

<p> </p>	<p> </p>
----------	----------

<p> </p>	<p> </p>
----------	----------

要細ハ
呼子鳥和歌三冊全圖ニアリ

呼子鳥和歌三冊全圖ニヤリ



二丁同東新乃

[illegible][illegible][illegible]

丁目新道

[illegible]

<p>○唐田屋定吉 ○かきあし(三)</p>	<p>○桑村定吉 ○柳屋ます ○つたやぶ吉</p>	<p>○梅本吉茂</p>	<p>人形結城座</p>	<p>○若狭谷文吉 ○津島やぶ吉 ○中野屋定吉 ○さく(三)</p>	<p>○佐々木市 ○川崎やぶ吉 ○熊谷やぶ吉</p>	<p>○丹波屋吉 ○坂本くめ</p>
<p>かきあし</p>	<p>かきあし かきあし かきあし</p>	<p>かきあし</p>	<p>かきあし</p>	<p>かきあし かきあし かきあし</p>	<p>かきあし かきあし かきあし</p>	<p>かきあし かきあし かきあし</p>

大支元	市村 羽衣子	庵と松助 <small>ふり付 差する物</small>	中村 歌右三	関三十郎 松平次 園就助 飯寺太夫 <small>久保田鶴子 花形もと 木村修九 沢田忠助</small>	落川女官 三梅捨舎 二丁目 自息番 六十ナリ
-----	-----------	-------------------------------------	-----------	---	------------------------------------

天町入口

乙丁同东新辰

[illegible]

<p>川一四也 七五五</p>	<p>○平藤公家下 ○松林院</p>
<p>△ □</p>	<p>○橋付料理亭 十二軒</p>
<p>王五</p>	<p>○平藤公家下 ○松林院</p>

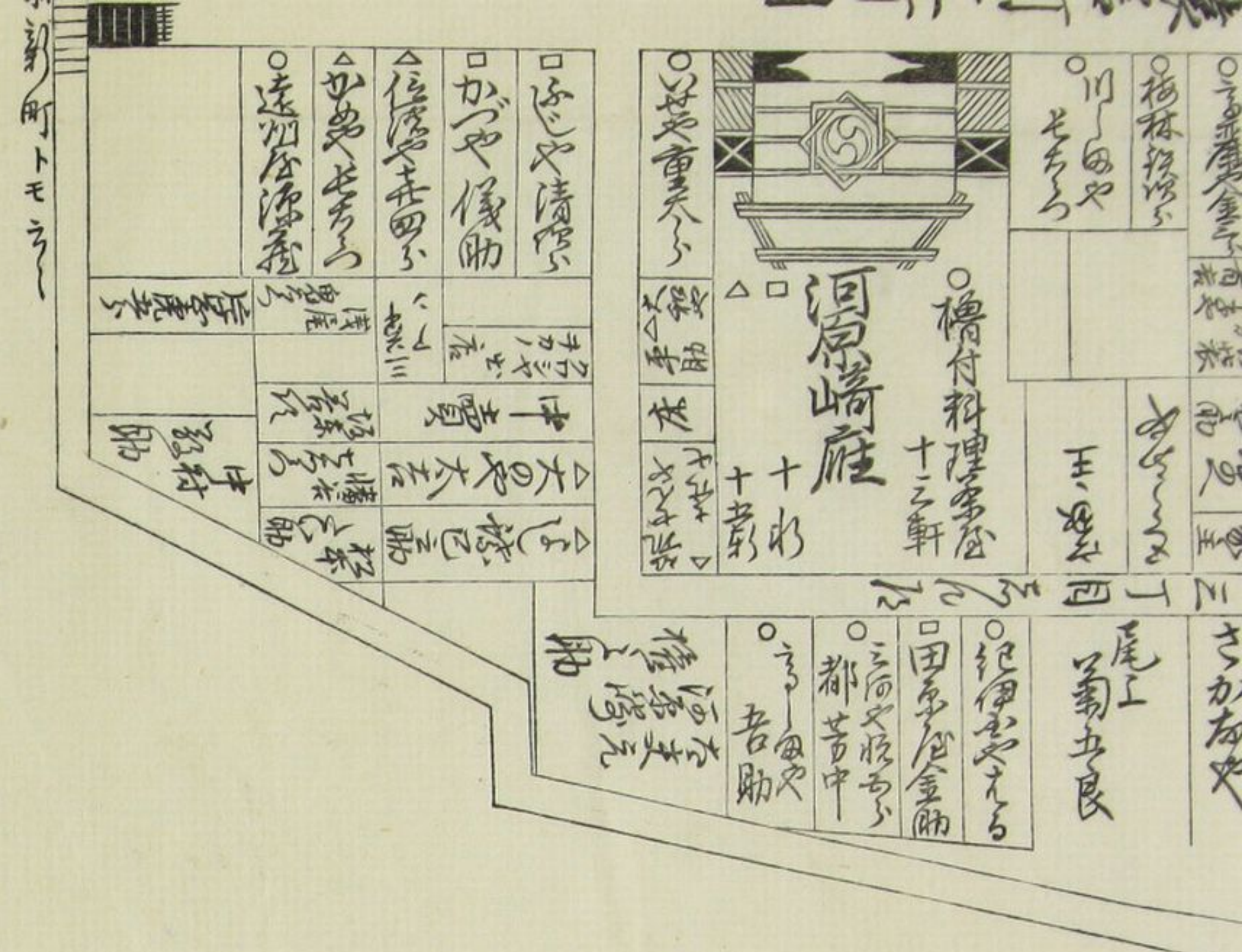
さか前也
尾上
菊丸良
○伊勢ふさ
田中重助
○之向中
都吉中
○之向中
吾助
西村元
橋本元
肥

一、因本局於本年
 八月間，在
 一、因本局於本年
 八月間，在
 一、因本局於本年
 八月間，在

[illegible]

聖天ヨコ町小新町トモウ

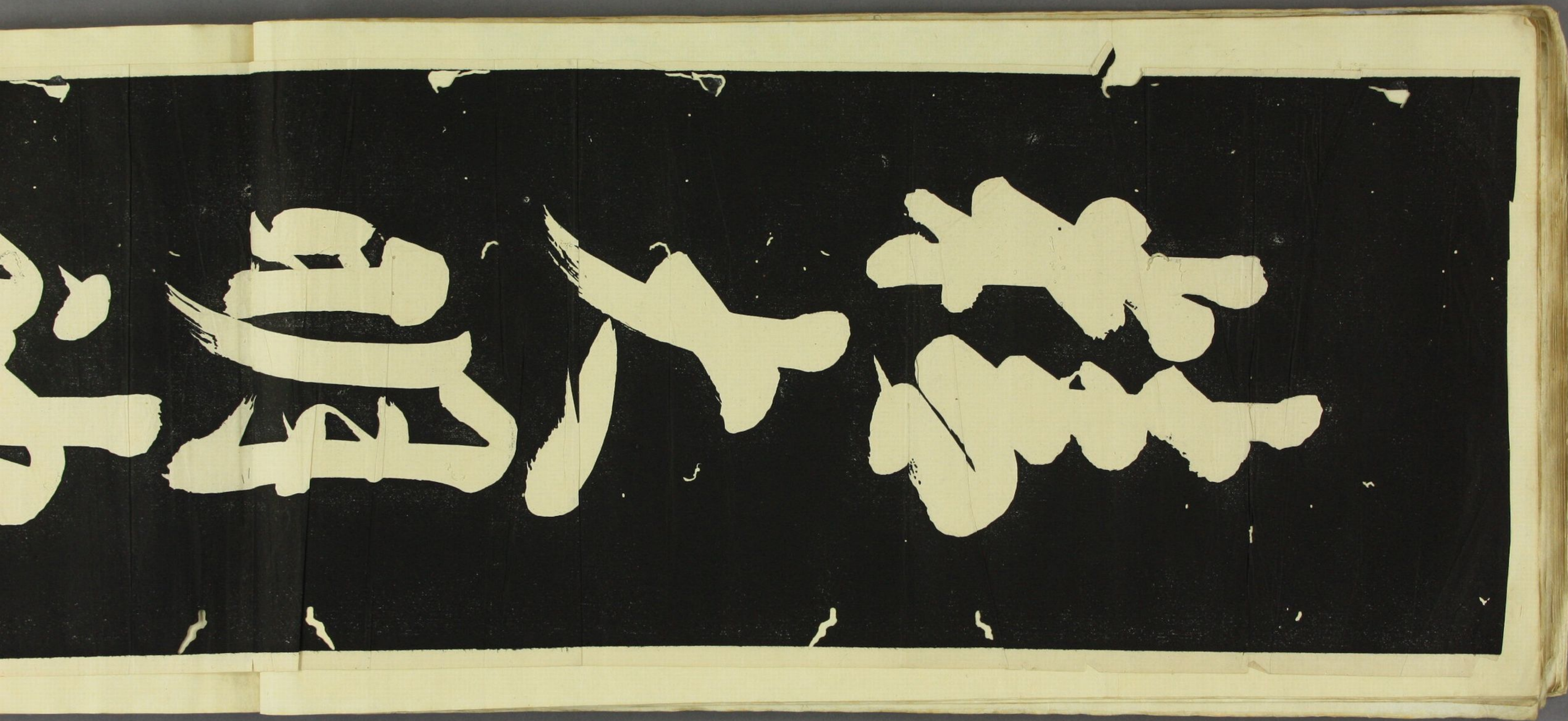
[illegible]



●法隆寺釋迦像光背の銘文

大和國法隆寺金堂に安置せられたる釋迦像は、昔、上宮(聖德)太子の不豫に際し、王后竝に群臣等、痛く愁傷のあまり、發願して、推古天皇の三十一年即ち今より一千三百年前太子の薨去後に造られたるもの。而してその佛像の光背に刻せられたる銘文の主意は上宮太子の不豫に就き王后、王子等が羣臣と深懷愁毒、ひたすら平癒延壽を祈れることを記せるものなるが、その刻文の用筆の圓勻にして純熟なる、又その書體の寫經式臭味を殆んど全く脱卻し去りて而も雅健の點を失はざる誠に書道界の一典範として推獎するに値せるものと云つ可し。尙その年代の歴史的考證に就て問題となれる冒頭「法興元卅一年」の讀方に關しては別に田口米舫氏の研究論文あれば就て見らるべし。(後藤朝太郎)





明師

先達之所由來也
從一任難事也
精大明神之一海
進文德之海
以書此入海之
五月十三日
雅直

余嘗閱東書堂帖及攷叙石刻宛然想見周府臨池盛事今覽此幅益益王真蹟姿態妍秀尤有家範溝君其宜寶之

東江源辨題

弘賢白、亦も其の利を以て國憲とす。櫻痴は
利を以て益世王世に益する王とす。トモヨリ國人ニアラズ、蓋
蓋王澤ハ厚燁、勿論ト云ふ、文潑南と稱ス
蓋端主ノ子意宗ノ強ナリ、亦以て蓋王ノ
周府ト別ナルヲウシサレ一免ニ供スといひ得ニ
此二種地震震テさう然不考々々ニ震々ノ名
アル所也、此を見上サルあり、後餘又別人が
しるす事ラス。三ノ蓋王ノ印ハ傳々落タルモノ
ツヤラス。

アキカレハニツ、
 秋を思ふ妹、
 ナテシロサキニケル
 流

家持兄 御上願儀方々也

○秋山雨落芳華盡須臾
分^{ナリ}ぬ^{ナリ}秋^{ナリ}花^{ナリ}也^{ナリ} 少^{ナリ}時^{ナリ}見^{ナリ}

下

二
左廿
或
廿
張

武議

金澤文庫

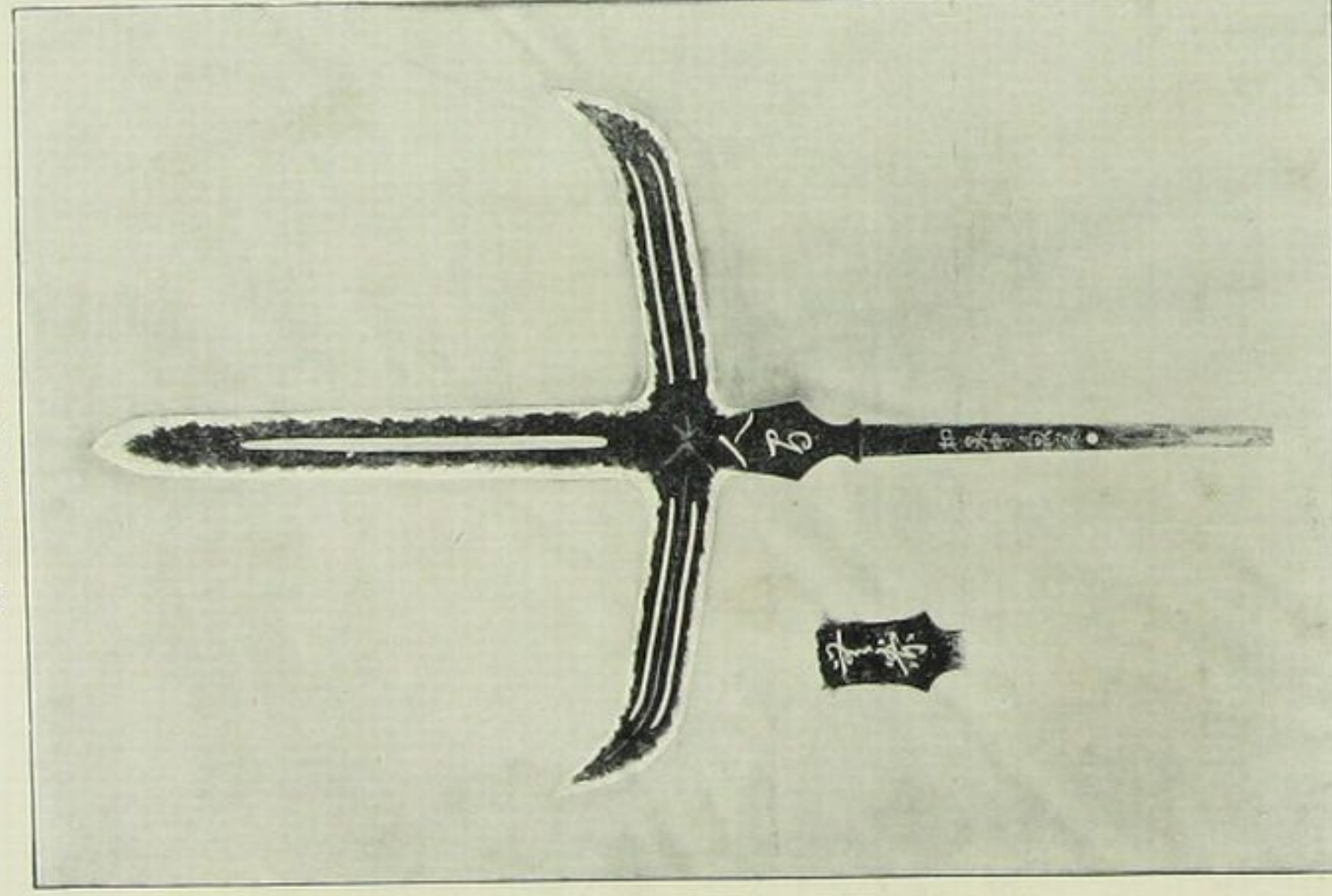
凡兵不攻無過之城不殺無罪之人夫
殺人之父兄利人之貨財臣妾人之子
女此皆盜也故兵者所以誅暴亂禁不
義也兵之所加者農不離其田業賈不
離其肆宅士大夫不離其官府由其武
議在於一人故兵不血刃而天下親焉

建治二年八月六日

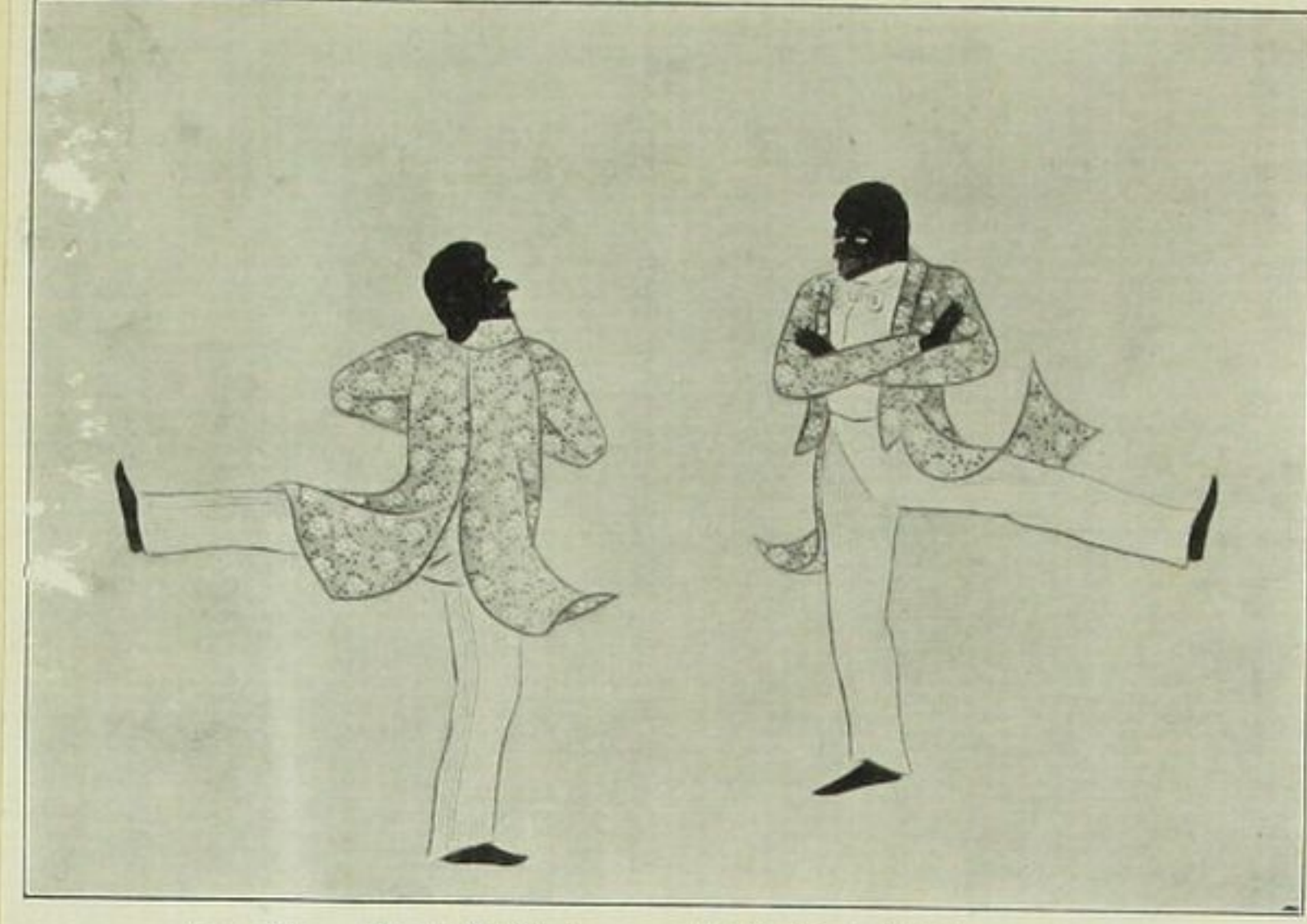
政連賜存しと願時也

越前利史

3 4 5 6 7 8 9 **120** 1 2 3 4 5 6 7 8 9 **130** 1 2 3 4 5 6 7 8 9 **140** 1 2 3 4 5 6 7 8 9 **150** 1 2 3 4 5 6 7 8 9 **160** 1 2 3 4 5 6 7 8 9 **170** 1 2 3 4 5 6 7 8 9



(三 其) 米國水師提督へ答應之圖



(二 其) 米國水師提督へ答應之圖

小南
與清
為善
福如
片

[illegible]

柳家差遣にやうにせしめり。なすづきや
 と仰せしは、武名除山伏の因縁とせん
 のふうのそとゆいな。まあもかんじも
 慶長はうひいふくうくもかん
 くふふふのほふふふふふふふふふ
 しやうふふふふふふふふふふふふ
 かしきやあふふふふふふふふふ
 とすは山伏のあふふふふふふふ
 たいふふふふふふふふふふふふ

まゝの兒といふなり。幼童のナニ七歳比ぶるはを
 るかりや。小噺食はゆるしとけさもきよしなれな
 る。九郎初巻の北国藩のをり。久我の姫屋を
 山伏の兒の鞍まきほいする。所ぐのくはに餘
 とるもの。腰よりくづて切り。また細く切なり。さ
 くちあはげ。花は角細くゆり。とある。おね
 外、のつらめ。信長の女。思ひこむ。おねの世をさくらわかれ
 さらう。藤原の上り。も。喝采の聲。う。向野院。
 おねの世。三井。信長七卷。布。判官。北国。なる。の。あり。おね。

[illegible]

かきつるる姿を男のどきどきするまゝに
 口を口をうすくまやま物さういふん
 けいけいあまもいふべんでかなんせあまは
 ぐんぐんけいけいあまの腹はよけいけい
 あまもいふまゝいふべいありあまは
 あまもいふまゝいふべいありあまは
 かきつるる姿を男のどきどきするまゝに
 口を口をうすくまやま物さういふん
 けいけいあまもいふべんでかなんせあまは
 ぐんぐんけいけいあまの腹はよけいけい
 あまもいふまゝいふべいありあまは
 あまもいふまゝいふべいありあまは

飾はるゝみそわやしも引えわて
 うい山吹一まねかあやの流少枕袴は
 黄の帷子と上をききくる白き大は駄
 文織の直垂とよきものあやの腰巾着
 んづてかきくる袴の揃りよくかききくる
 笠とよきものあやの柄の刀とうねる金
 一とよきものあやの揃りよくかききくる
 のやうでしともしきくる絆帯錦の袴は
 上は帯のききくる袴は

しやいぶはらひやでかぶたや
おしきやちやうえらんづもか
しやは山伏のあきあらいで
たもふとさく^{サウジ}つてもあき
えん時は
まのてのいよばをなう
もあきえん

かきけらるゝ姿を男のこゝろに思ふもいへ
この日のやうにこゝろやまねるうゝいふん
はきけらるゝもいふいけんでかなせぬいふ
くさやけさぶさぶんの世にやういふ
さむもいへるこゝろにありふるいふ
おこさるゝとくとけふもいふ
かいやうにさるゝいふとくさといふ
をぬき清水をたぐさるゝいふ
よあることいふ腰にさるゝ情けいふ
こゝろにさるゝいふ

房^{ウス}げきやうと、房^{ウス}ちあひるほと、
 飾^{ザク}はるふとふと、
 うい^{ヒト}吹^{ヒト}一^{ヒト}なねか、あやの、
 黄^{ワウ}の、
 文^{モン}の、
 んづ、
 笠^{カサ}と、
 一^{ヒト}うま、
 のやう、
 上^{ウエ}の、

此に掲げたるは余の契丹女真西夏文字考に云へる國字碑郎君行記及び居庸關に刻せる文字なり是は先年宋の本雜誌に載すべき書なりしが印刷の都合によりて本誌の頭首に冠することゝなりぬ國字碑及び郎君行記は金石萃編に據り居庸關の碑銘はラドロフ氏のアルテルタイメル・デル・モンゴライに取る、又彼考に云へる宴臺訪碑は契丹女真文字につきて支那人の考證せるものなれば并せて爰に其全文を寫すことゝなしぬ

白鳥庫吉識

宴臺訪碑

宴臺在曹門外七里本宋時迎春遊宴之所今其後堤有廟有碑字不可識劉子敬同年名師陸山西進士時聘博雅好古聞而往訪碑面刻明宣德時修廟記碑陰用筆如楷而難識別因命工洗掃以歸既字攷證惟翁樹培古泉彙攷中載有金都統耶君修乾陵記每字以兩三字合成有如琴譜又一碑疑係其陰字體稍異伏焉日月升光等字近是己丑秋攜以相質曰先生姓完顏大金之裔也識此否對曰某不識女

閼鄉卜居

地理志陝州閼鄉縣去州四十七里唐屬魏州

吳融

六載抽毫侍禁蘭

翰林承旨

可堪衰病決然歸五陵年

少如相問

陽茂陵安陵

阿對泉頭一布衣自註向對是楊伯起家童

嘗引泉灌蔬

抽毫按筆也魏畧殿中侍御史替葉書

泉至今在之閼過以記不依法按吳融昭宗時廷累侍

侍御史之臣不得妄入宮中

門閤有禁非

韓偓

尤溪道中

尤溪縣在

南劍州

水自潺湲日自斜

李周翰曰潺湲湲湲

盡無雞犬有鳴鵲千村萬落

如寒食不見人

烟空見花

時泉州軍過後人家盡空致堯

已上共二十四首

丹陽送常參軍

贈

職林有錄事六曹諸府及嚴維大司馬大將軍等參軍

明應甲寅之秋新板畢工矣先具之舊刻之在京師者散失于丁亥之亂以故捐貲刊行焉置板於萬年廣德云 葉巢子敬誌

此板流傳有年玉泉南有於乞阿佐井野宗禎贖以置之於家塾也故斤捐之幸以待方未矣

いづるゝきやうす
いづるゝきやうす
いづるゝきやうす
いづるゝきやうす
いづるゝきやうす
いづるゝきやうす
いづるゝきやうす
いづるゝきやうす
いづるゝきやうす
いづるゝきやうす

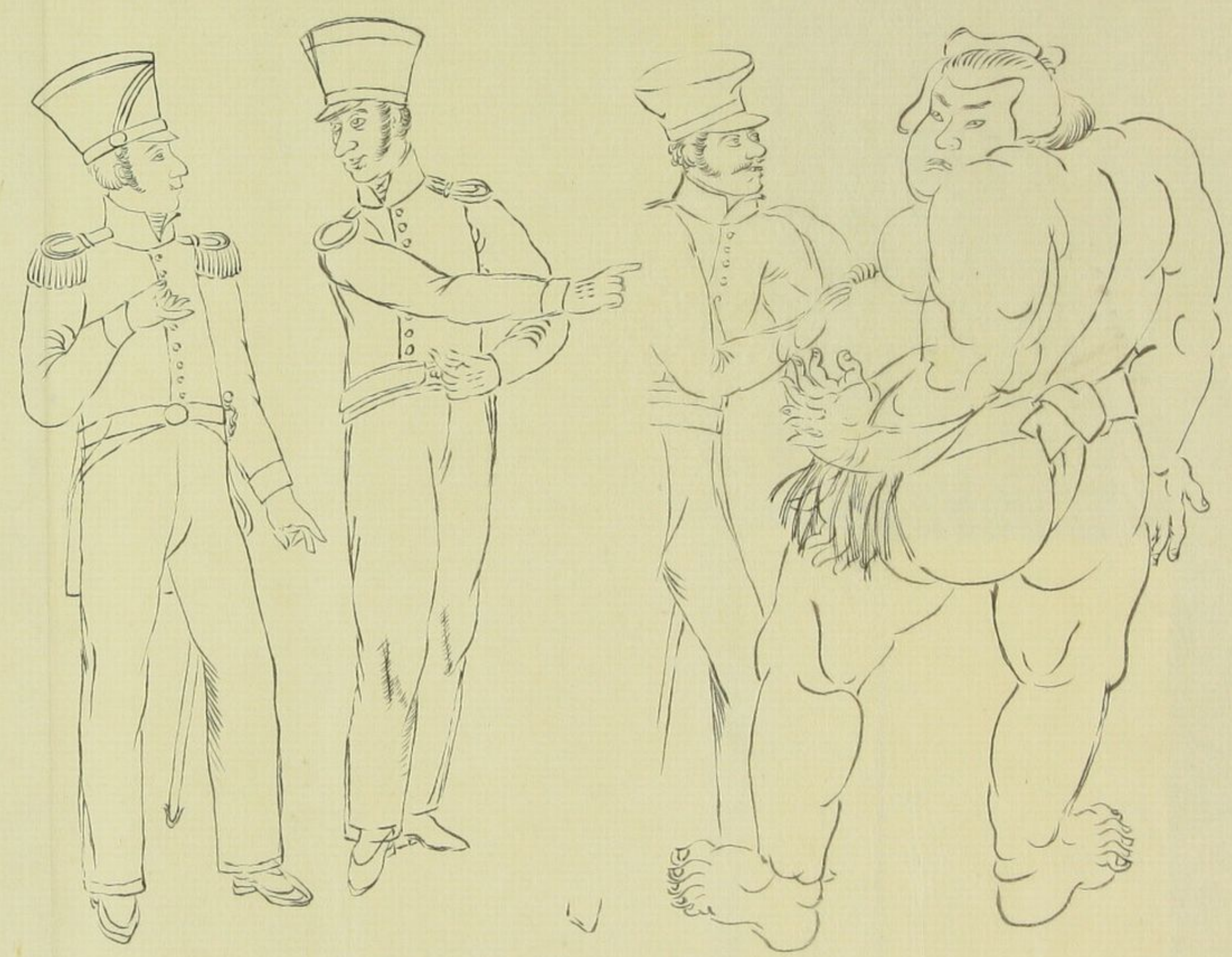
●西行法師眞蹟住吉歌合

此の住吉歌合は、西宮歌合（大治三年八月廿九日於廣田社頭講之）南宮歌合（同年九月廿一日於門妙社合之）と三度關聯したるものなれば、もと一卷なりしものの中より、分割せられたるべし。此の歌合に「同九月廿八日參社頭合之」とあるは、即ち大治三年の事にて、「題同前」とあるは、西宮、南宮兩度の歌合の題と同じき也。本文は群書類從第百八十四卷に收められたり。世に西行法師の眞蹟と稱する歌合數卷ありて、大別すれば三種となるべし。一は本卷の書風。二は御子左忠家卿の書風に

似たるもの。三は同俊忠卿の書風に似たるものなり。三者互に出入して、或は西行となり、或は忠家、忠俊となりて、其の名は變ずれども、三者各特殊の妙ありて、輕重す可からず。筆者の何人たるを問はず、各之を尊重して可也。この住吉歌合と連續したりしものとおぼしき西宮、南宮兩度の歌合は、御子左忠家卿の眞蹟となりて、他に在りと云ふ。又永久三年十月の内大臣家（法性寺關白忠通公）歌合、元永元年十月同家歌合と、全く連續の一卷たりしものを、二卷に分ちて、甲は畠山牛庵の極にて、西行法師眞蹟と定めて、現に某氏の家に在り。乙は俊忠卿眞蹟として、三井高保氏の家に藏せり。斯の如く西行と忠家、俊忠との鑑定、互に出入せし事は、既に畠山牛庵時代よりの事なる可し。さりながら此の住吉歌合は、筆力殊に雄健にして、かの忠家、俊忠の眞蹟と信すべきものに比すれば、一種の變化を認むべき筆法ありて、法師眞蹟月輪切と稱するもの、即ち有名なる藻鹽草帖中に收められたる宮川歌合の書風に酷似せり。されば是等を以て、法師眞蹟中の逸品と稱するも過當にあらざるべし。なほ此の歌合を摹刻せるものに二種あり。一は寛政頃藤原茂利が白字本に刻して尙古法帖中に收めし者、一は享和二年に京都書林竹苞樓等が墨字本に刻めし者なり。刻本は既に二種あれど、摹勒精巧ならざるをもて、皆其の眞を失へり。今この寫眞版と對照せば、毫釐千里の差あるを知るに足らん。（大口周魚）

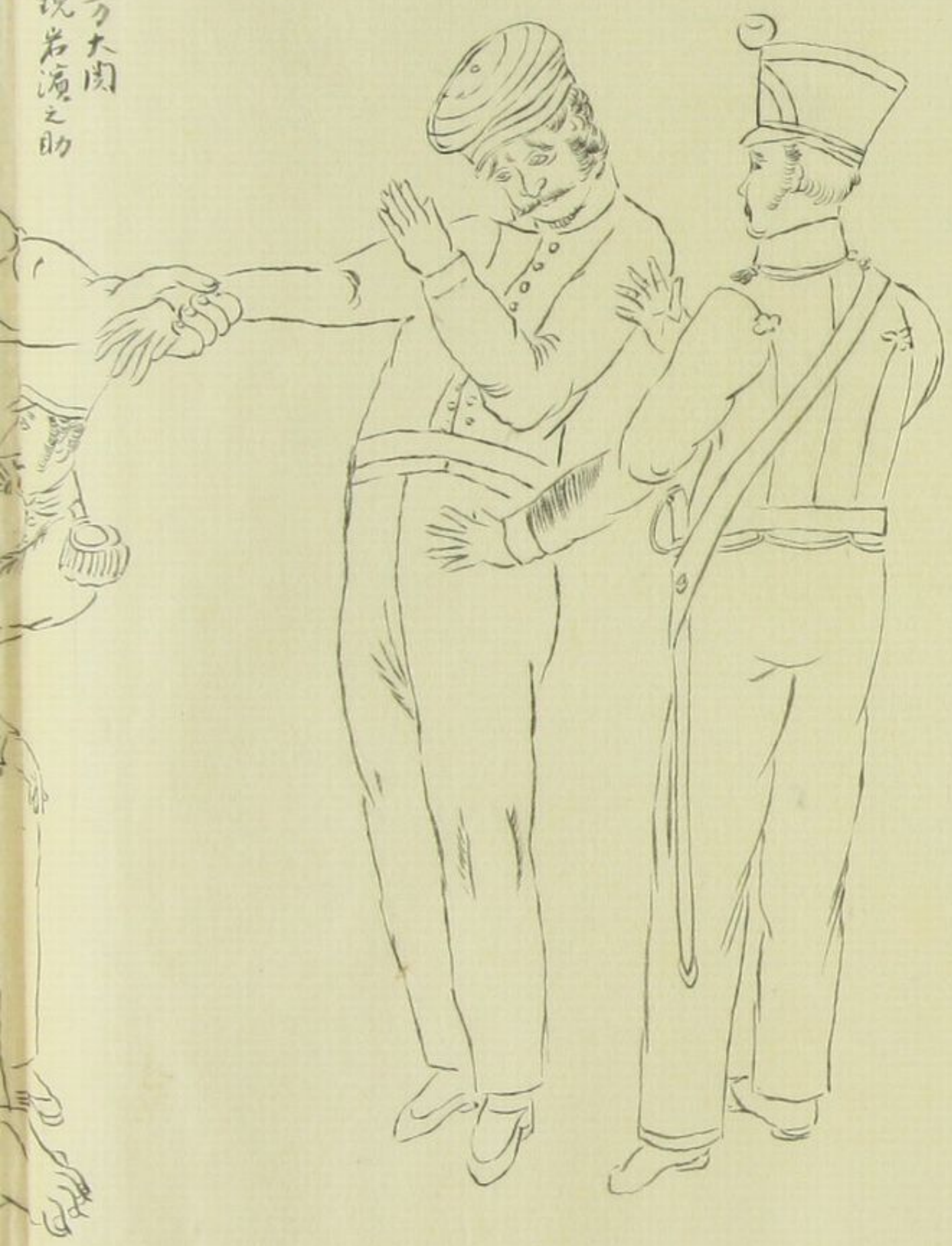
二月二十五日
 五斗儀二百儀兵船系組
 惣人数二五下之印日本
 力士共六名解之英人共五
 怖之因

東方大園
 小柳市市吉有像



其二

西方大園
 鏡岩源之助



英人塚之し
 大ノ方頭ノ方建
 小ノ方足ノ方建
 左向ノ合セテ是建
 松板ノ板成木ヲ
 上里ニテハ
 文字ニテハ
 一文字ニテハ
 一文字ニテハ

小ノ方
 高サ一尺五寸
 中一尺四寸
 厚一寸二分

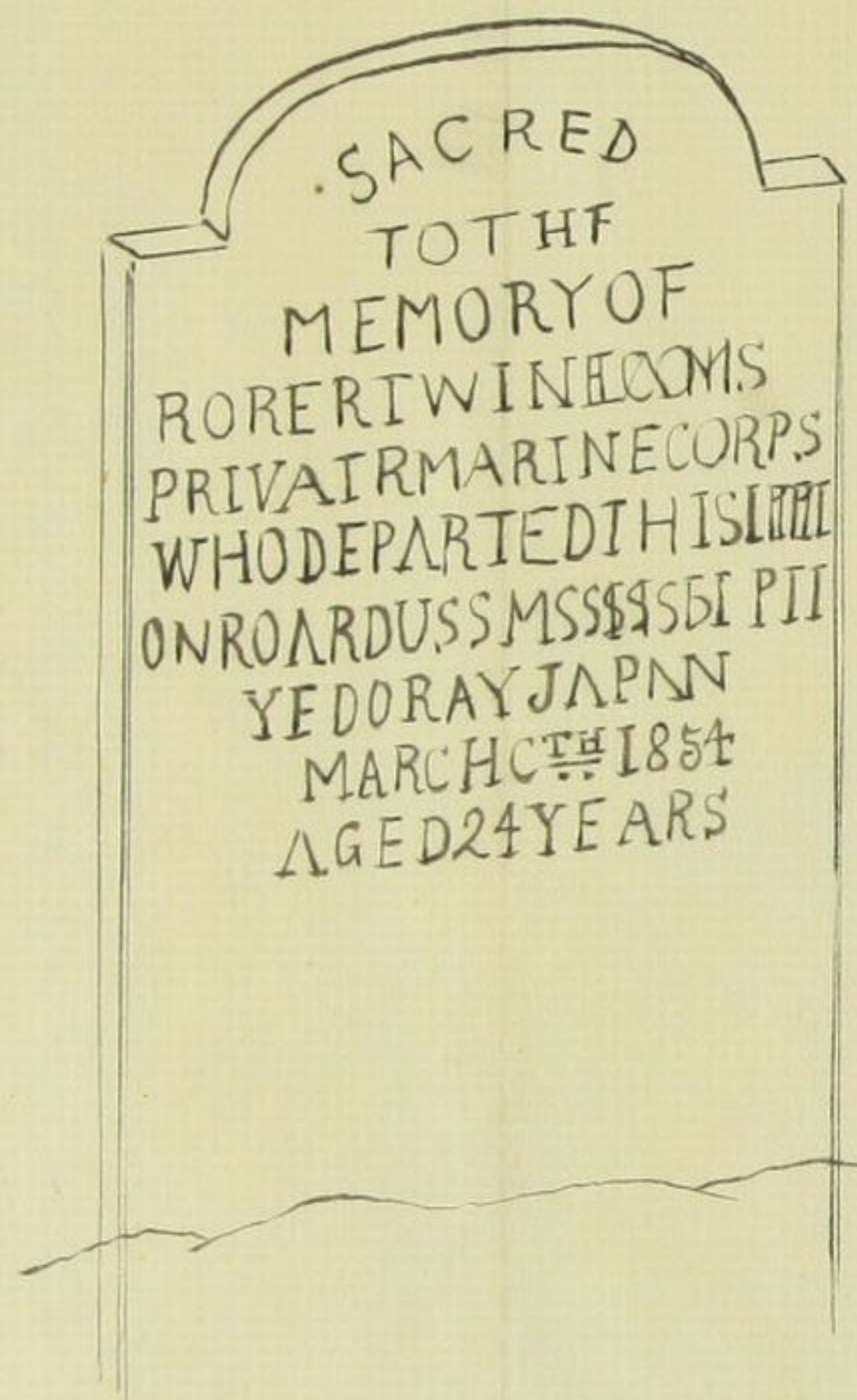


西方大関
 鏡岩源之助



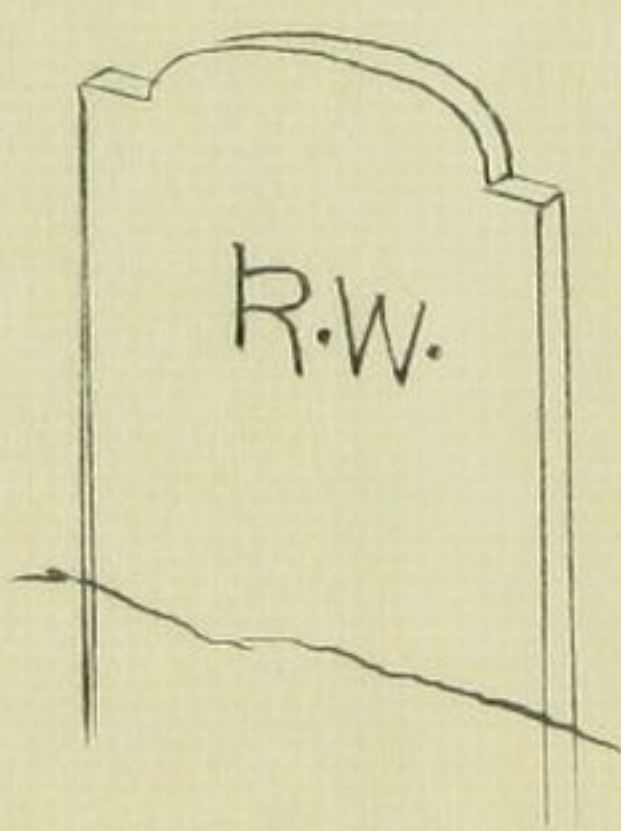
其二





大の方
中
厚
一尺二寸五分
一尺二寸六分
一尺七寸七分

大の方マツ
日本江戸内海ノ此處航海ノ末
水軍別隊ノ兵士ノ井ルリアムス
ノ標記ノ祭祀
千八百五十四年三月六日
行年三十五歳
日本二月廿日



英人塚之記
大の方頭ノ方王連
小の方足ノ方王連
左向ノ方王連
松板ノ板成木ヲ
上黒ニテ海ノ
文字ノ形ヲ認有
イモ地黒

小の方
中
厚
一尺二寸五分
一尺四寸五分
一尺二寸五分



鏡岩源之助



此稿の表紙に在りて記載し可なり
 明治三十二年十月撰字
 佐山芳太郎所有
 於伊豆國君澤魚國海軍人達新設工之圖
 (城名詳見) 安政三年五月船政大臣の御一筆

三月二十日午時、訃報。李鴻章の負傷は右眼の下方にして直ちに旅館に入りて治療す伊東（已代治并上、中田直ちに見舞す其他訪問絡繹たり。兇行者小山録之助の年齢は二十一歳にして木綿縦縞の袷其下に紀州練の襯衣とツボン下と着す。狙撃の場所は外濱町二十番地江村仁太郎方の前なり。

め来れりと答へたれど
も其は群馬縣邑樂郡
大島村大皮北大島四十

り在馬關代議士新聞記
者各聯合して見舞物を
送る。

狙撃の場所外濱町二
十番地江村仁太郎方の
前なり。

狂漢小山と捕へたるは
阿部憲兵新莊巡查なり
遠山豫審判事原田檢事
直ちに現場に臨檢す。
李鴻章は自若たり。

其十三 狂漢の取調

李鴻章訪問

(三月二十四日午後十時開始)

兇行者今當地警察にて
豫審判事檢事立會取調

へ中

伊藤陸奥兩大臣伊東翰
長井上書記官中田秘書
官使節の旅館と見舞へ

當地滞在古莊高田柏田
肥塚岡崎河野代議士及

び各新聞通信記者等連
名にて使節に慰問書を

送れり

使節は時期に由れば船
に引取るならん

李鴻章負傷により石黒
佐藤の兩氏唯今馬關に
行く

其十五 侍從差遣

(三月二十五日午前八時四十三分開始)

李使節遭難の事昨夕天

聴に達するや兩陛下は

深く宸襟をなやまされ

畏くも御慰問のため中

村侍從武官を馬關に差

し遣さる旨を仰せ出さ

れ中村慰問使は今朝六

時字品を發せり

其十六 同上(別報)

(三月二十五日午前七時四十分開始)

兩陛下李鴻章慰問とし

て中村侍從武官を今朝

馬關に派遣されたり

浅野梅亭七折卷本二枚



成富秋九月初梅周愈

不羞先國

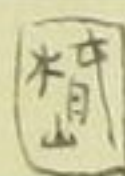
秋容清猶

有寒花

晚節

奈玉秋月亭并

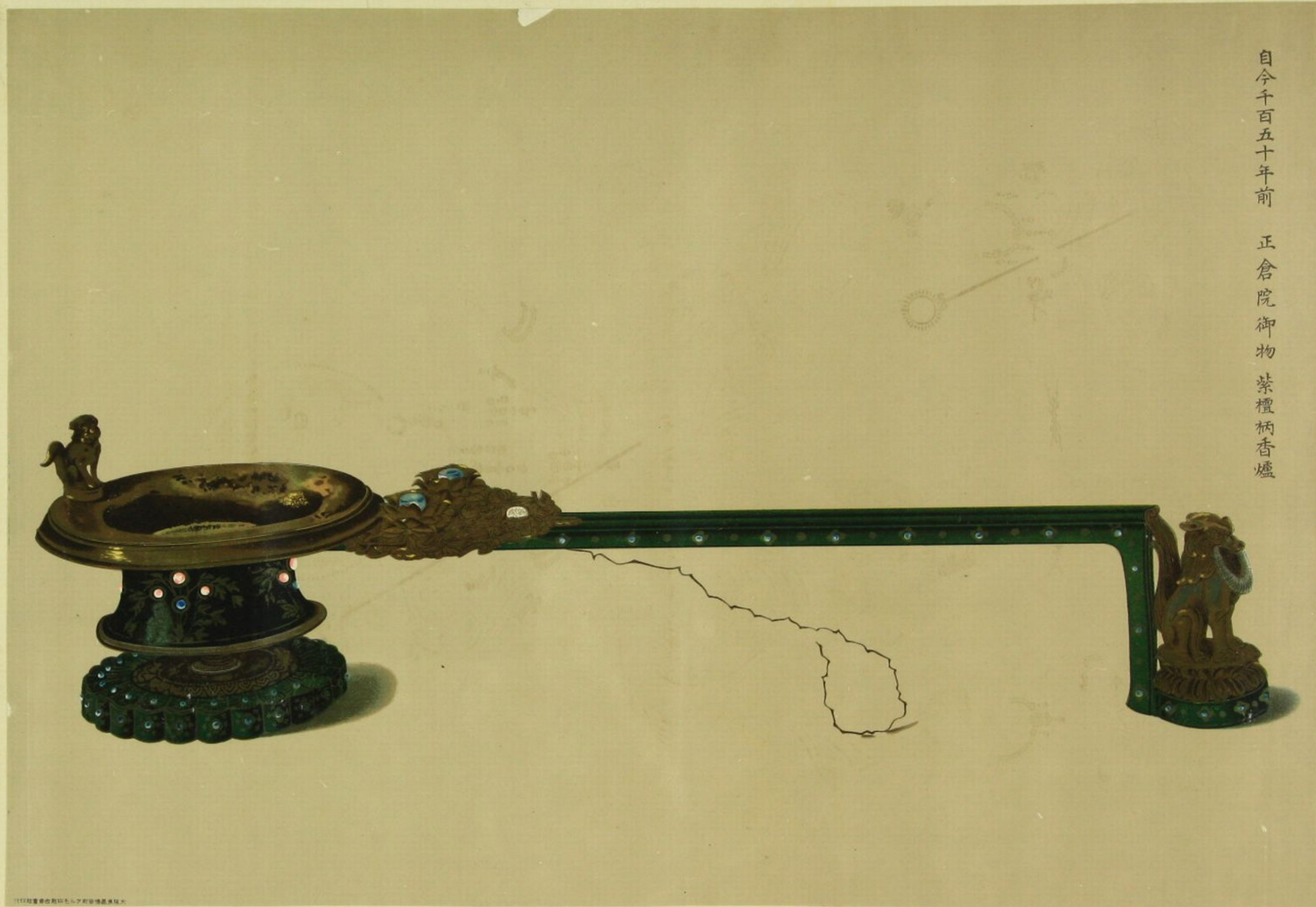
鈺生





自今一千九百零一年前會理僧都筆 琉璃天像

自今千百五十年前
正倉院御物
紫檀柄香爐



自今七百五十年前住吉慶恩筆 平治物語繪卷



1733 羅賓遜的郵船在太平洋的洋面中



香
案

[illegible]

校

とあそびたての巻

もふのふむのふむふむ

はるのふむふむふむふむ

はるのふむふむふむふむ

はるのふむふむふむふむ

はるのふむふむふむふむ

はるのふむふむふむふむ

はるのふむふむふむふむ

はるのふむふむふむふむ

はるのふむふむふむふむ

はるのふむふむふむふむ

はるのふむふむふむふむ

はるのふむふむふむふむ

はるのふむふむふむふむ

はるのふむふむふむふむ

はるのふむふむふむふむ

はるのふむふむふむふむ

はるのふむふむふむふむ

●紀貫之筆高野切

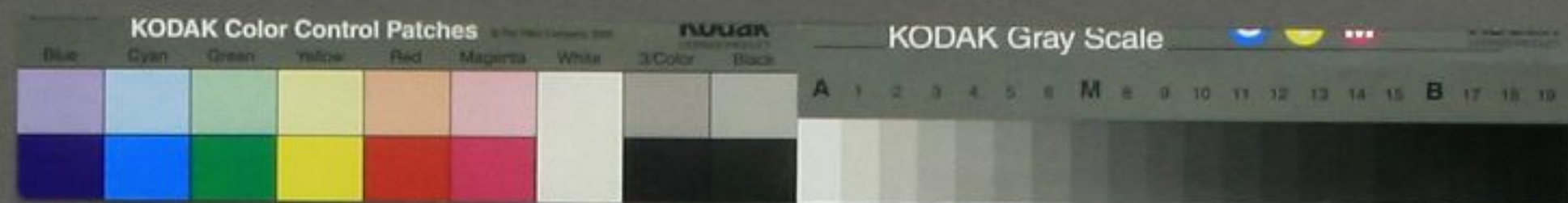
高野切とは、元、紀州高野山にありて、古今集廿巻の、完さしめたりしなり。いつの世にか、散佚して、今は、高野には、いづの寺院にも、一片たりなく、悉く、諸家の所蔵品と、なれりしものなれども、もと出づる所の、巻八は、毛羽公藏、巻廿は、山内侯藏、以上三巻の三なり。巻一、二、三、九、十八、十九の六巻は、はやく切斷せられて、わづかに、その残片の、或は手紙に押され、或は掛物になされ、或は切斷せられて、多々あるとして、世に示してやさる。その他は、いかになりしか、焼失せしものにて、この料紙は、いづれの巻も、皆、雲母を貼き散し、同一の紙なれども、筆者に就て考ふるに、三人の手になれるを認め得べし。即、巻一、巻九、巻廿は一人、又、巻二、巻三、巻五、巻八は一人、巻十八、巻十九は一人なり。かくの如くなれば、貫之の筆なりと云ふ事に付ては、何れなれと定めがたけれど、はやくより、古筆家にては、しか定め置きしものにあれば、今は筆者の誰なること、論をなます。その、何人の筆なりとし、妄のうつくしき、筆の力のすぐれたる、品の出づるものなし。この、井上侯の所蔵にかゝるものは、現存せる古筆中に、この上に歌のともなはば、特に珍重すべき名品なりとす。(田中親光)

うさぎのうさぎはうさぎ
うさぎのうさぎはうさぎ
うさぎのうさぎはうさぎ
うさぎのうさぎはうさぎ
うさぎのうさぎはうさぎ

●紀貫之筆高野切

高野切とは、元、紀州高野山にありて、古今集廿卷の、完きものなりしを、いつの世にか、散佚して、今は、高野には、いづこの寺院にも、一片だになく、悉く、諸家の所藏品と、なれりしものなれども、もと出し處の名をとりて、かく、稱ふるものなり、その内、完き巻は、巻五は原富太郎氏藏、巻八は毛利公藏、巻廿は山内侯藏、以上三卷の三なり、巻一、二、三、九、十八、十九の六巻は、はやく切斷せられて、わづかに、その殘片の、或は手鑑に押され、或は掛物になされ、或は巻物になされなどして、世にもはやさる、その他はいかになりしにか、焼失せしものも、多々あるべし、幸に一片だに見出すことあらば、この道の爲めに慶ぶべき也、さて、この料紙は、いづれの巻も、皆、雲母を蒔き散し、同一の紙なれども、筆者に就て考ふるに、三人の手になれるを認め得べし、即、巻一、巻九、巻廿は一人、又、巻二、巻三、巻五、巻八は一人、巻十八、巻十九は一人なり、かくの如くなれば、貫之の筆なりと云ふ事に付ては、何れをそれと定めがたけれど、はやくより、古筆家にては、しか定め置きしものにしあれば、今は筆者の誰なることの、論をなさず、その、何人の筆なりとも、姿のうつくしき、筆の力のすぐれたる、品のあがれるなど、すべて假名文字の、要を備へたるものは、現存せる古筆中に、この上に出づるものなし、この、井上侯の所藏にかゝるものは、巻一の内にて、貫之の名高き歌のところなれば、特に珍重すべき名品なりとす。(田中親美)





竹可畫而不見

寫於有竹書屋南窗下
竹塢



與可畫竹見

見
林

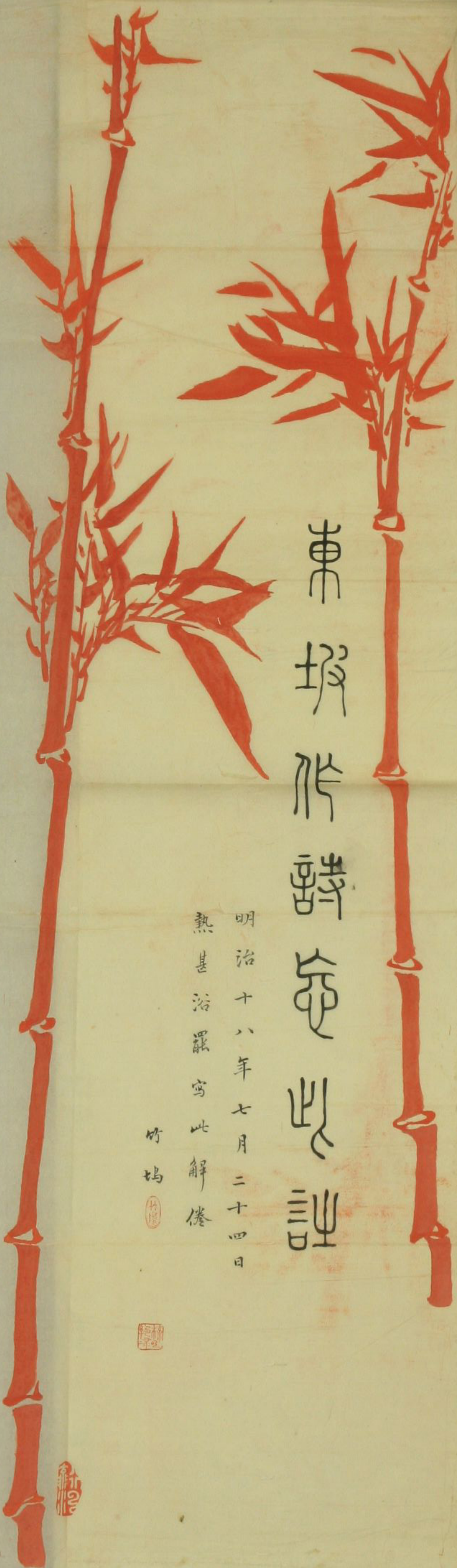
寫於有竹書屋南窗下
竹塢



東坡作詩心記

明治十八年七月二十四日
熱甚浴罷寫此解倦

竹塢



東坡



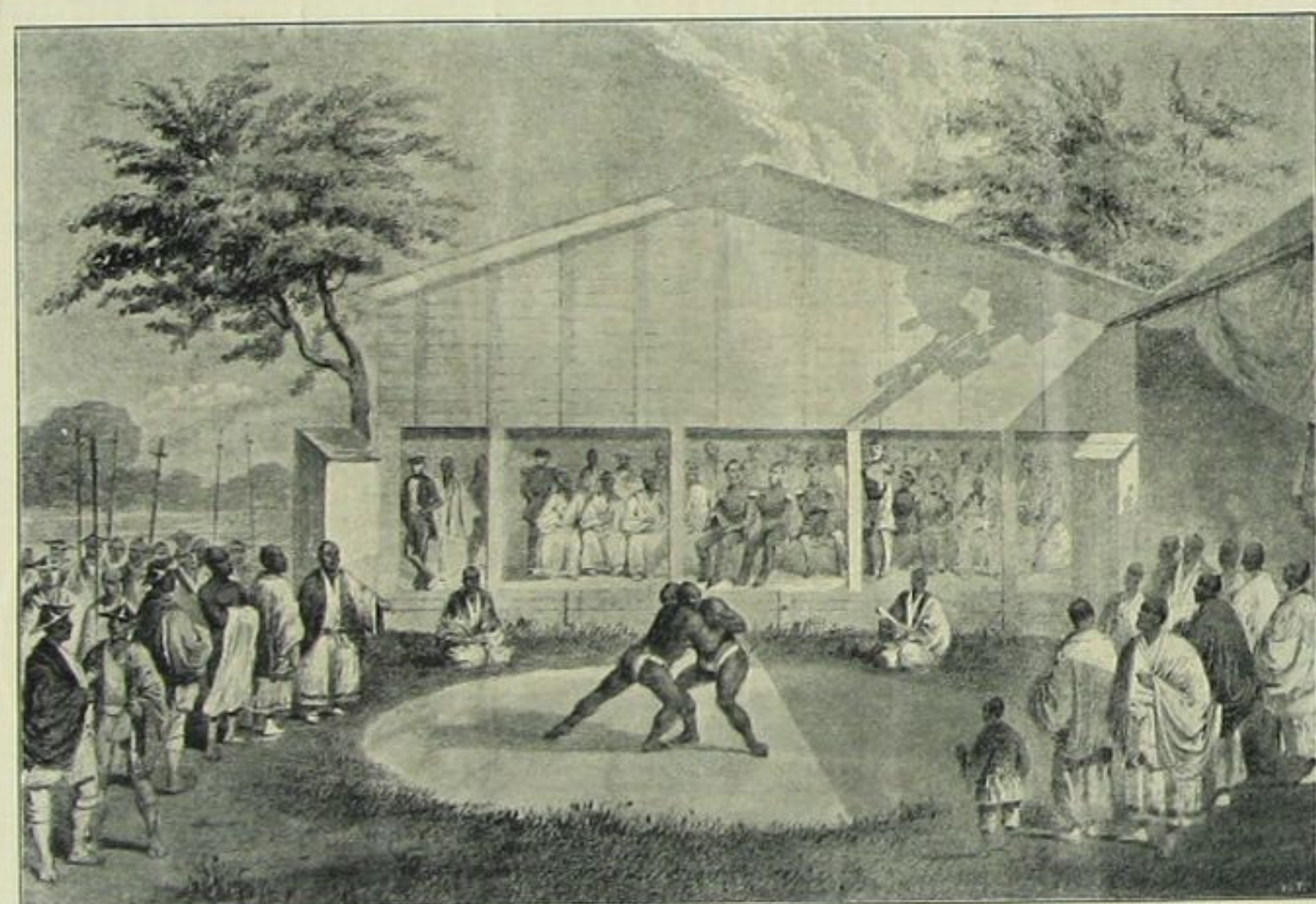
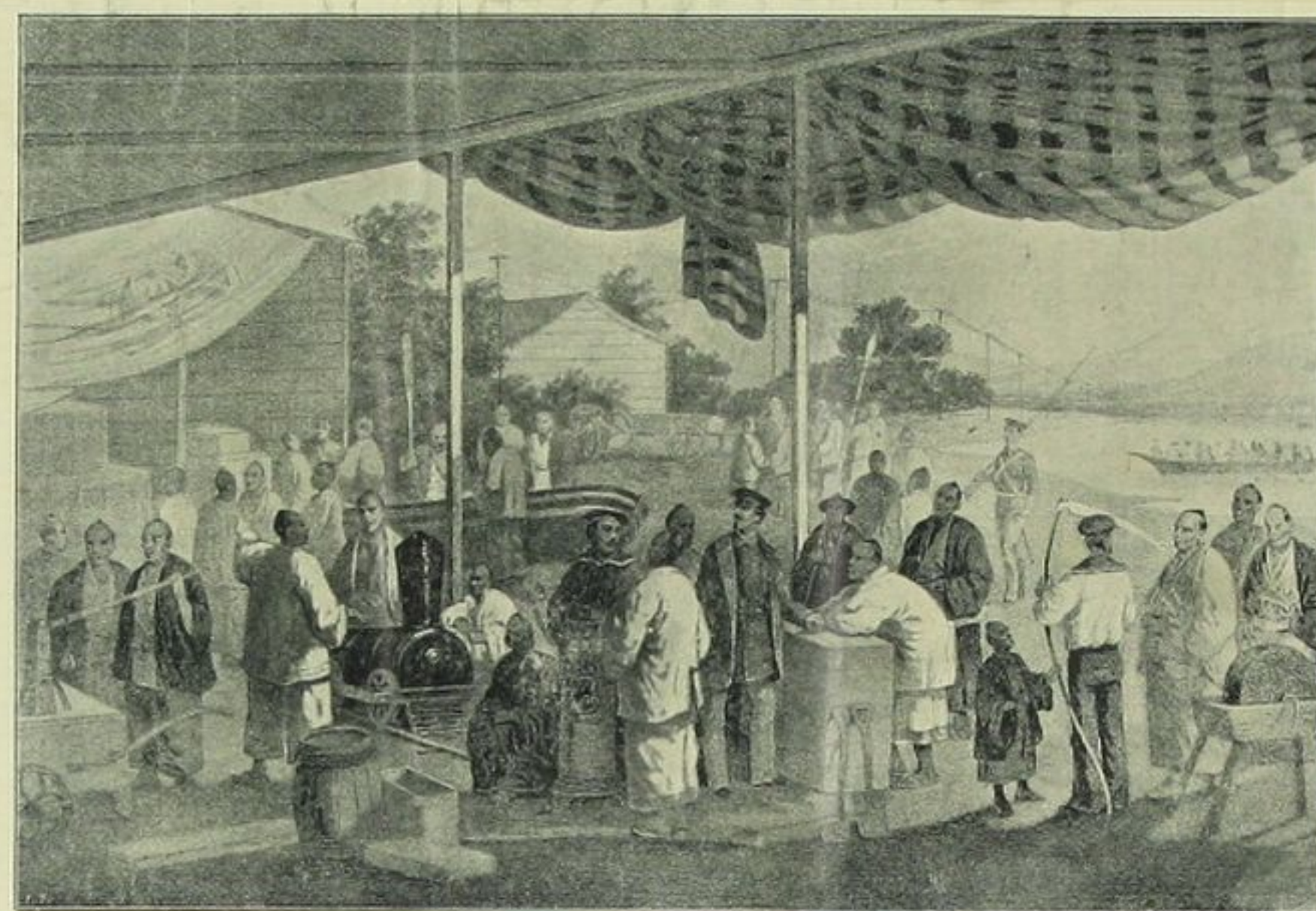
坡作詩命此評

明治十八年七月二十四日

熱甚浴罷寫此解倦

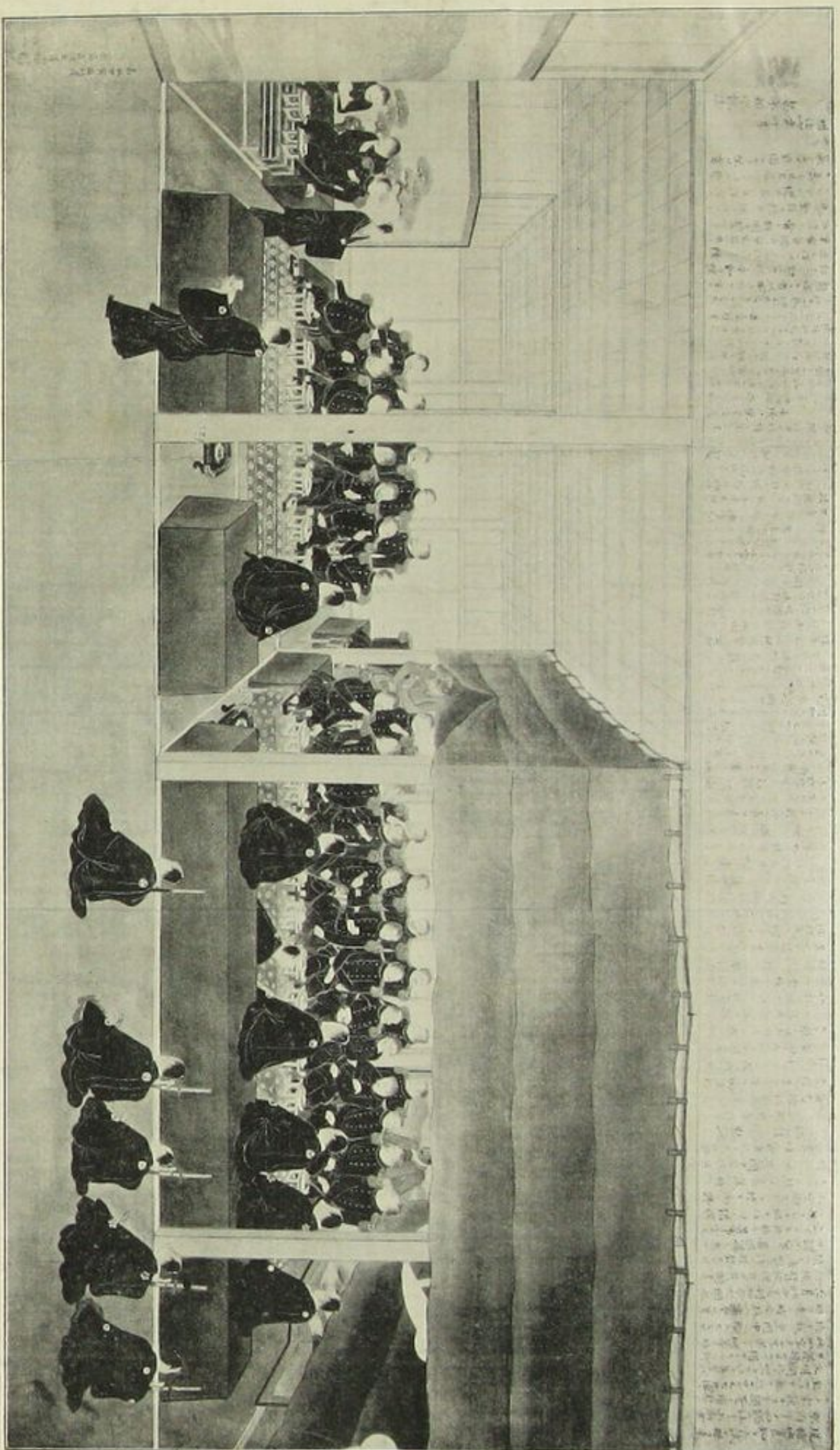
竹塢





[illegible]

十一月廿四日の新聞紙上に掲げたる左の說に對し
新聞「太陽」の記者は其第廿四號に於て、支那の輸入の可成に偉大に減額の榮とせられたるを謂ふ、然れども其言と所一を認むべきをさし知句せむ、記者が此の支那の輸入を圖るを愛國必きと者と論じたるは、一種の狂言とみなれたるの無理なりぬ、試に記者に問はる記者は其國に生産し得る物に對て他國に輸入し得る物に對て國際間の分配と實行したるもの違ふと承、記者自らも論を國家經濟の正より見て是を價值するものには非ざる、且又綿糸の輸入と其輸入の防止とは一故に關係する内地の棉花を使用せしむるは同一の結果を與へては、是れ何等の差を有さず、而して其國の棉花を他國に賣て買入るが如く



全川一重印行

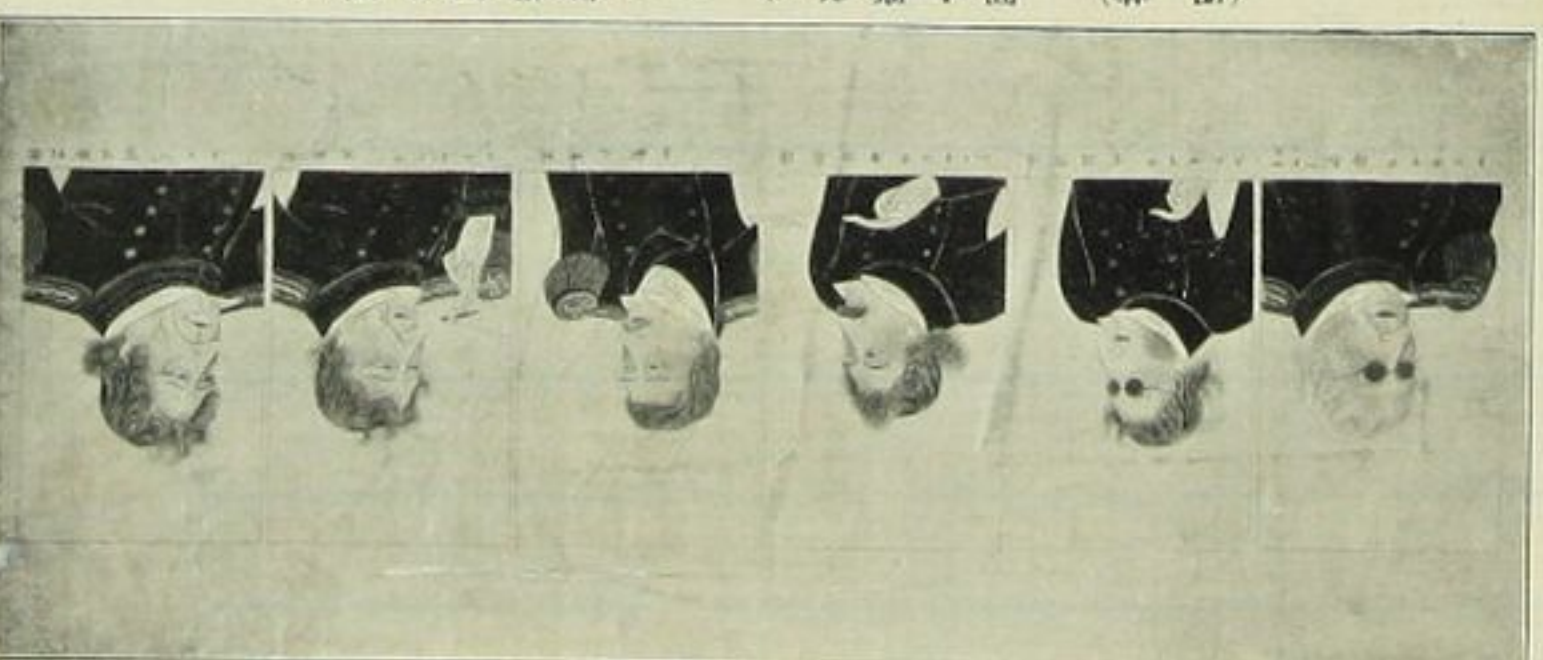
米國使節水師提督ルノ應之圖

和蘭留學生



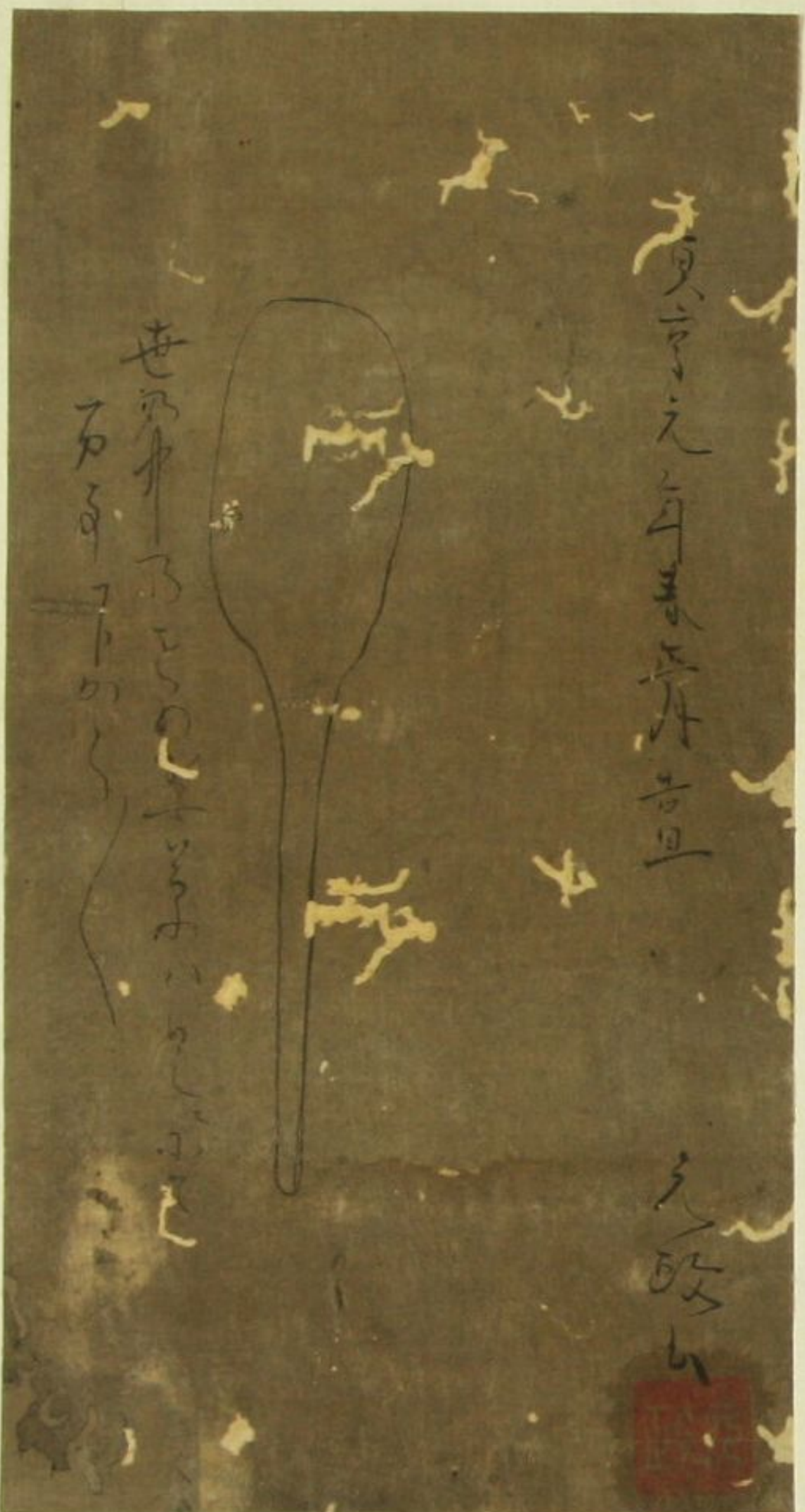
(伊東氏所藏)

伊東玄伯
林澤本左衛門
榎本参次郎
肥田渡五郎
布施銓吉郎
赤松大三郎
山田重一郎
西岡助



(四其) 米國使節水師提督ルノ應之圖

三ノ一重印行



大般若波羅蜜經卷第一

大

大唐三藏聖教序 太宗文皇帝製

蓋聞二儀有像顯覆載以含生四時
無形潛寒暑以化物是以窺天鑑地
庸愚皆識其端明陰洞陽覽括罕窮
其數然而天地苞乎陰陽而易識者
以其有像也陰陽處乎天地而難窮
者以其無形也故知像顯可徵雖愚
不惑形潛莫覩在智猶迷況乎佛道
崇虛乘幽控寂弘濟萬品典御十方
舉靈應而無上抑神力而無下大之
則弥於宇宙細之則攝於毫釐無滅
無生歷千劫而不古若隱若顯運百
福而長今妙道凝玄遵之莫知其際
法流湛寂挹之莫測其源故知蠢蠢
凡愚區區庸鄙投其盲趣能無疑惑
者哉然則大教之興基乎西土騰漢
庭而皎夢照東域而流慈昔者分形
分跡之時言未馳而成化當常現常
之世民仰德而知道及乎晦影歸真
遷儀越世金容掩色不鏡三千之光
麗象開圖空端四八之相於是微言

廣被拯含類於三塗遺訓遐宣導群
生於十地然而真教難仰莫能一其
旨歸曲學易遵邪正於焉紛紜所以
空有之論或習俗而是非大小之乘
乍公時而隆替有玄奘法師者法門
之領袖也幼懷貞敏早悟三空之心
長契神情先苞四忍之行松風水月
未足比其清華仙露明珠詎能方其
朗潤故以智通無累神測未形超六
塵而迥出隻千古而無對凝心內境
悲正法之陵遲栖慮玄門慨深文之
訛譌思欲分條捫理廣彼前聞截偽
續真開茲後學是以翹心淨土往遊
西域乘危遠邁杖策孤征積雪晨飛
途間失地驚砂夕起空外迷天萬里
山川撥煙霞而進影百重寒暑躡霜
雨而前蹤誠重勞輕求深願達周遊
西宇十有七年窮歷道邦詢求正教
雙林八水味道食風鹿苑鷲峯瞻奇
仰異承至言於先聖受真教於上賢
探蹟妙門精窮奧業一乘五律之道
馳驟於心田八藏三篋之文波濤於
口海爰自所歷之國惣將三藏要文

凡六百五十七部譯布中夏宣揚勝業引慈雲於西極注法雨於東陲聖教歟而復全蒼生罪而還福濕火宅之乾焰共拔迷途朗愛水之昏波同臻彼岸是知惡因業墜善以緣升升墜之端惟人所託譬夫桂生高嶺雲露方得洊其花蓮出淥波飛塵不能汙其葉非蓮性自潔而桂質本貞良由所附者高則微物不能累所憑者淨則濁類不能沾夫以卉木無知猶資善而成善況乎人倫有識不緣慶而求慶方冀茲經流施將日月而無窮斯福遐敷與乾坤而永大

大唐皇帝述

聖記

在春宮日製

夫顯揚正教非智無以廣其文崇闡微言非賢莫能定其旨蓋真如聖教者諸法之玄宗衆經之軌躅也綜括宏遠奧旨遐深極空有之精微體生滅之機要辭茂道曠尋之者不究其源文顯義幽履之者莫測其際故知聖慈所被業無善而不臻妙化所敷緣無惡而不剪開法網之綱紀弘六度之正教拯群有之塗炭啓三藏之

秘扃是以名無翼而長飛道無根而
永固道名流慶歷遂古而鎮常赴感
應身經塵劫而不朽晨鍾夕梵交二
音於鷲峯慧日法流轉雙輪於鹿苑
排空寶蓋接計雲而共飛莊野春林
與天花而合彩伏惟

皇帝陛下

上玄資福垂拱而治

八荒德被黔黎歟衽而朝萬國恩加
朽骨石室歸貝葉之文澤及昆蟲金
匱流梵說之偈遂使阿耨達水通神
甸之八川耆闍崛山接嵩華之翠嶺
竊以法性凝寂靡歸心而不通智地
玄奧感懇誠而遂顯豈謂重昏之夜
燭慧炬之光火宅之朝降法雨之澤
於是百川異流同會於海萬區分義
惣成乎實豈與湯武校其優劣堯舜
比其聖德者哉玄奘法師者夙懷聰
令立志夷簡神清韶齒之年體拔浮
華之世凝情定室匿迹幽巖栖息三
禪巡遊十地超六塵之境獨步迦維
會一乘之旨隨機化物以中華之無
質尋印度之真文遠涉恒河終期滿
字頻登雪嶺更獲半珠問道往還十

[illegible]

有七載備通釋典利物為心以貞觀
十九年二月六日奉

勅於弘福

寺翻譯聖教要文凡六百五十七部
引大海之法流洗塵勞而不竭傳智
燈之長焰皎幽闇而恒明自非久植
勝緣何以顯揚斯旨所謂法相常住
齊三光之明我皇福臻同二儀之固
伏見

御製衆經論序照古騰今理會金石
之聲文抱風雲之潤治輒以輕塵足
嶽墜露添流略舉大綱以為斯記

大般若經初會序

西明寺沙門玄則製

大般若經者乃希代之絕唱曠劫之
遐津光被人天括囊真俗誠入神之
奧府有國之靈鎮自非

聖德遠

覃括人孤出則方音罕貫圓教豈臻
所以

帝叙金照

皇述瓊振事邈千古理鏡三辰鬱矣
斯文備乎茲日然則部分二四昔徒
掌其半珠會兼十六今乃握其全寶
竊案諸會別起每比一部輒復本以
殊迹各申一序至如靈峯始集宏韻
首馳控蕩身源敷弘心要何者夫五

蘊為有情之封二我為有封之宅宅我而舉則渴焰之水方深封蘊以居則尋香之垓弥峻焉識夫我之所根者想想妄而我不存蘊之所繫者名假而蘊無託故即空之談啓亡言之理暢閱紛俗於非動置蠢徒於不生齊谷響於百名儔鏡姿於萬像筌宰失寄而後真宰獨融規准莫施而後冲規妙立慮塗千泯言術四窮使夫淺躁投機拘攣解桎梏司南之有在同拱北以知歸義既天悠辭仍海溢且為諸分之本又是前古未傳凡勒成四百卷八十五品矣或謂權之方土理宜裁譯竊應之日一言可蔽而雅頌之作聯章二字可題而涅槃之音積軸優柔闡緩其慈誨乎若譯而可削恐貽患於傷手今傳而必本庶無譏於溢言况搦扎之辰慨念增損而魂交之夕炯戒昭彰終始感貽具如別錄其有大心茂器久聞歷奉者自致不驚不怖爰諮爰度矣

盛名自遠
殊而譽
同聲相
皆思
之野
主齊
幸夫
災中
夫茲
致且
廣止
而音
之可
無
蘇而
景自

余自見二山人藏菊十幅
 臨之無事何所贊大言未能
 得甘神
 秋及後處





感忠銘

蔚然深秀在板白河東者結城氏墓也我望之而有時感焉元亨建武間士
氣衰天下機心現利避害固屬親老志利害之懷發而義欲率天下而
與之不卒而竟以殞身無備東列士民如散
南朝之天君猶念其力也一時忠烈補公之外無能繼而而全吾民鮮知其為
州人莫以興于餘風內山重濠家後進下捐財為子勸銘表而出之
主壽助葬葬三日大字以刻上方法呼二子之忠魂數世後得此傳播其
哭食受於地下吉葬之與有榮也銘曰
明乎此山雄石嶺之廣風雷動倒夜還源蹟不刊輝映千年民莫自奪圖
誌生賢 文化四年秋九月 費顯典謹識 賀孝等謹書

羅漢人膝躬焉
東食



銘忠感

蔚然深秀在我自河東者結城氏壘也我
氣兼挾天下擾二視利避就獨宗廣親光
與之卒弗克以殞身然猶東川士民知
南朝之天者實亦其力也一時忠烈捕公之
州人妥以興于餘風內山重濃家於壚下
公嘉斯舉題賜三大字以刻上方嗚呼二
必舍樂於地下吾輩亦與有榮也銘曰
峭乎此山羅石巉二溪風肅然劍佩夜還
能生賢
文化四年秋九月
廣瀨

我白河東者結城戍堽也我望之而有所感焉元亨建武間士
擾二視利避能獨宗廣親光忠烈凜二憤發唱義欲率天下而
免以殞身然猶東川士武知戴

亦其力也一時忠烈捕公之外無能稱焉而今吾民鮮知其為
寸餘風肉山重濃深於壚下損財為子勒銘表而出之
賜三大字以刻上方鵬呼二子之忠魂數世後得此偉標焉其
一吾輩亦與有榮也銘曰

白嶠二溪風肅然劍佩夜還踪蹟不刊輝映千年民莫自棄國
又化四年秋九月

廣瀨典謹識

賀孝啓謹書

和
冊

墨

叶

知

羅

口

白河關蹟地煙波不
西有叢祠地隆然如
派爲鳥考之圖史詠
其爲遺址較然不疑
而如某處所徵迺建
碑者

寬政二十二年八月一日

白河城至從四位下行卷近衛權少將無越十

地煙波不
隆然
詠歌
又
徵
所
謂
白
河
遠
其
下
宿
村
較
然
不
疑
也
建
碑
形
老
農
之
言
此
兩
年
八
月
二
日

生後四位下行在進衛權少將兼越中守原朝臣藤原信實

南湖久為弃地穢第荒塞雖好山水者皆無顧之
公一相曰是堤斷圯而水添漏耳如浚以築以鞏
田肥民與衆泛舟可以娛太平無事也使吏目董役
魚功成數旬至於是段腐蒲爛穢沈汚流深者為壘
灣出而為島為洲山之高低圍繞者今又得水而映
天地造物之改闢來將駘驛以喜得異境也至其木
霜蒼然見之數十年後則其景物又何如耶而當其
公之賜則游將不識耶來也市原彷彿稠常松數紹謀
他之取復而使後游思焉
文元年秋八月十有一日
白河府德員廣瀨典

穢第荒塞雖好山水者皆無顧之
圯而水添漏耳如後以築之湖卽可復而
舟可以娛太平無事也使吏目董役貴雇以作植木蓄
於足鼓腐蒲爛穢沈汚流深者為潭淺者為渚曲而為
洲山之高低圍繞者今又得水而映帶焉人駭視之如
闕來將賂驛以喜得異境也蓋又木已老而水更濶風
十年後則其景物又何如耶而當其時孰復如昔出
不識所本也市原因稠常松數紹謀以勒碑於是紀湖
十有一目

白河府德員廣瀨典記并書

江蘇省立圖書館藏
 中國人圖
 江蘇省立圖書館藏
 中國人圖

湖雲岡霜信
斗已到雲楓
錦真不祗波
間一樣紅

私濤雲
青如數星抱湖斜峯
帶湖風日夜譁亦如
不坊如頭顱穩臥波
流聲浪前

方
張山錦
胡
十
王

嘉慶
聲似
疾馬時
往來山麓
潮南草色一峰勻開
廣嶺

樓中一字自出文
 詩以一字自出文
 晚來子秋上云
 所將此藥生邦君
 夫一字松八上

生旦 蘇州府志

錦園 蘇州府志

蘇州府志

鏡心 蘇州府志

士樂亭 蘇州府志

關湖 蘇州府志

蘇州府志

蘇州府志

蘇州府志

蘇州府志

蘇州府志

蘇州府志

千代松

蘇州府志

有明亭

蘇州府志

子世

天
地
人
三才

天
地
人
三才

天
地
人
三才

天
地
人
三才

天
地
人
三才

天
地
人
三才

天
地
人
三才

天
地
人
三才

天
地
人
三才

天
地
人
三才

天
地
人
三才

天
地
人
三才

天
地
人
三才

天
地
人
三才

天
地
人
三才

天
地
人
三才

天
地
人
三才

天
地
人
三才

天
地
人
三才

天
地
人
三才

天
地
人
三才

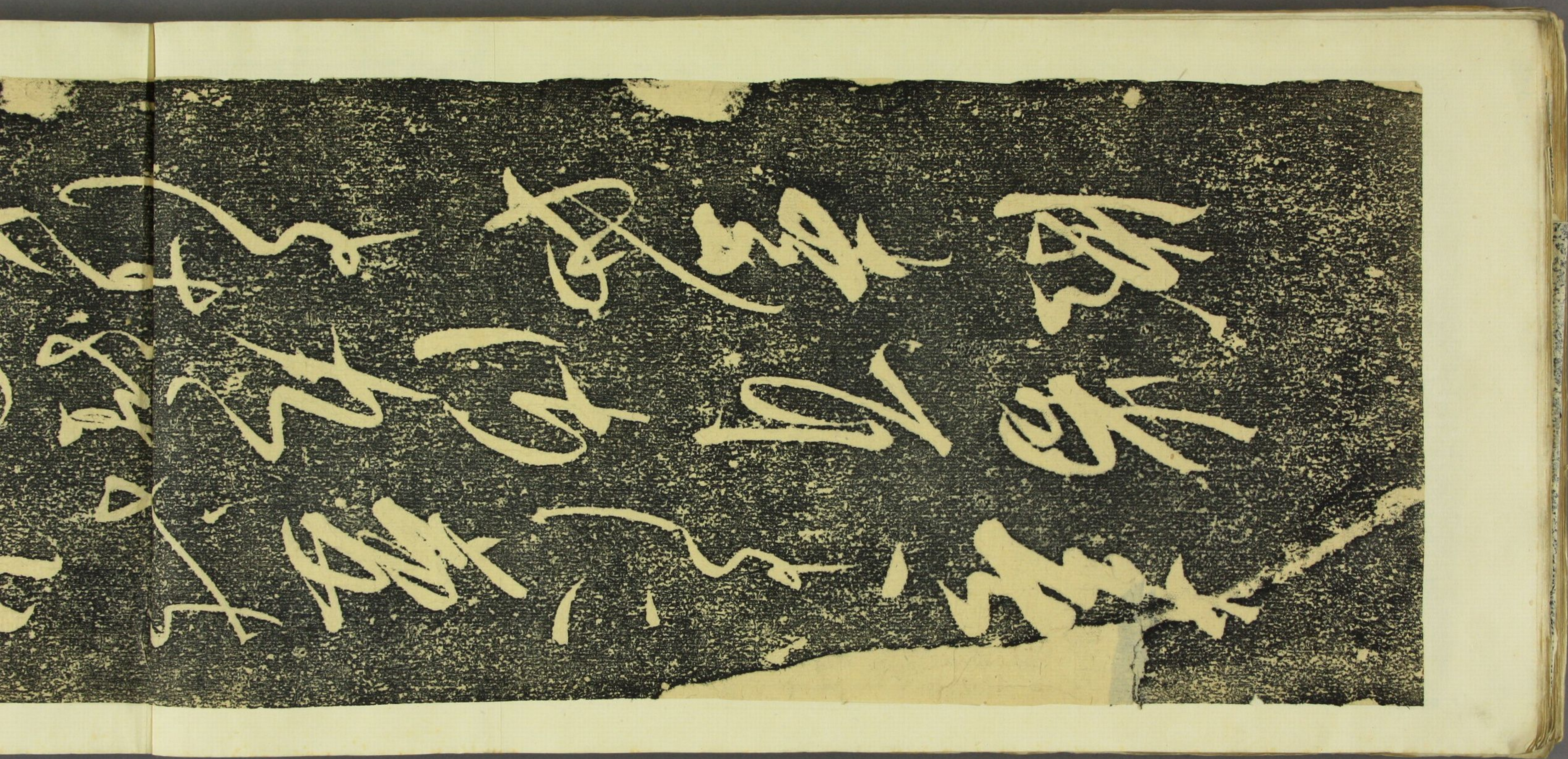
天
地
人
三才

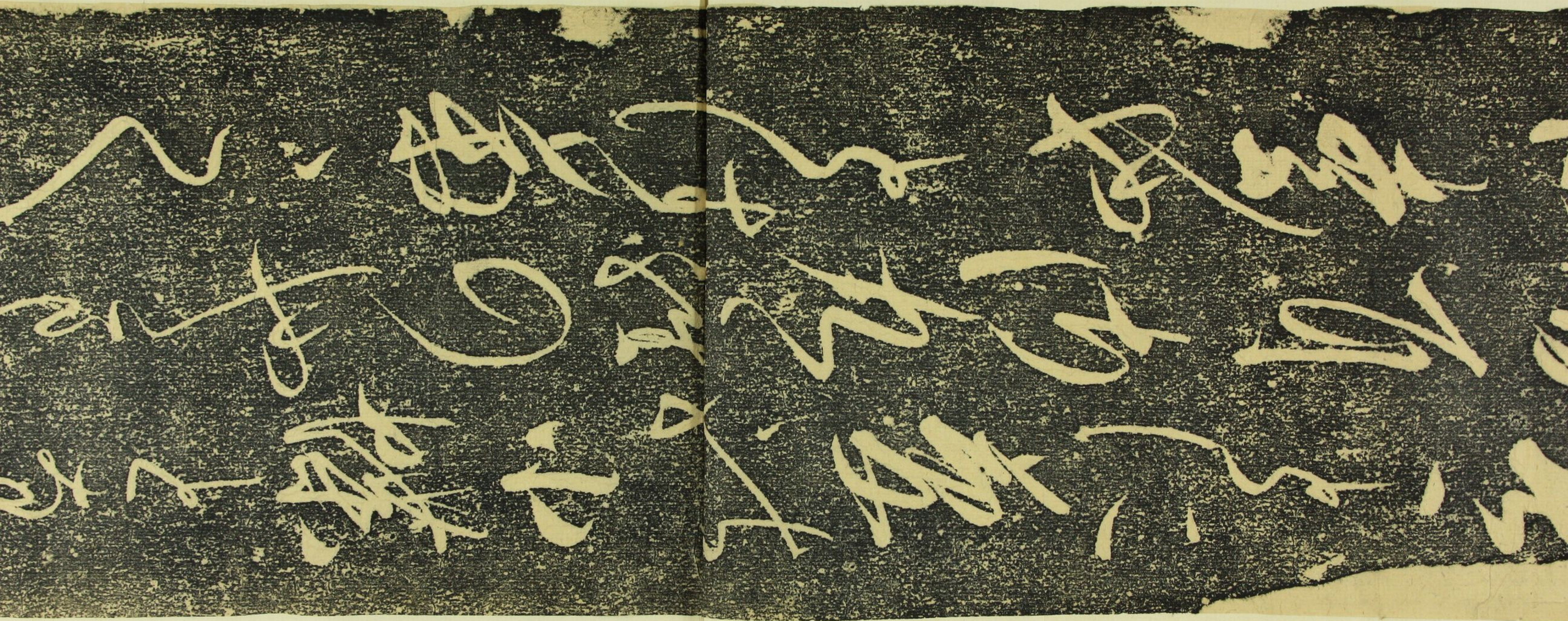
天
地
人
三才

天
地
人
三才



大 德 年 間





草書
卷之六
五

resters.

allest
as ever
swell.

The Sporting Mirror
Excited!

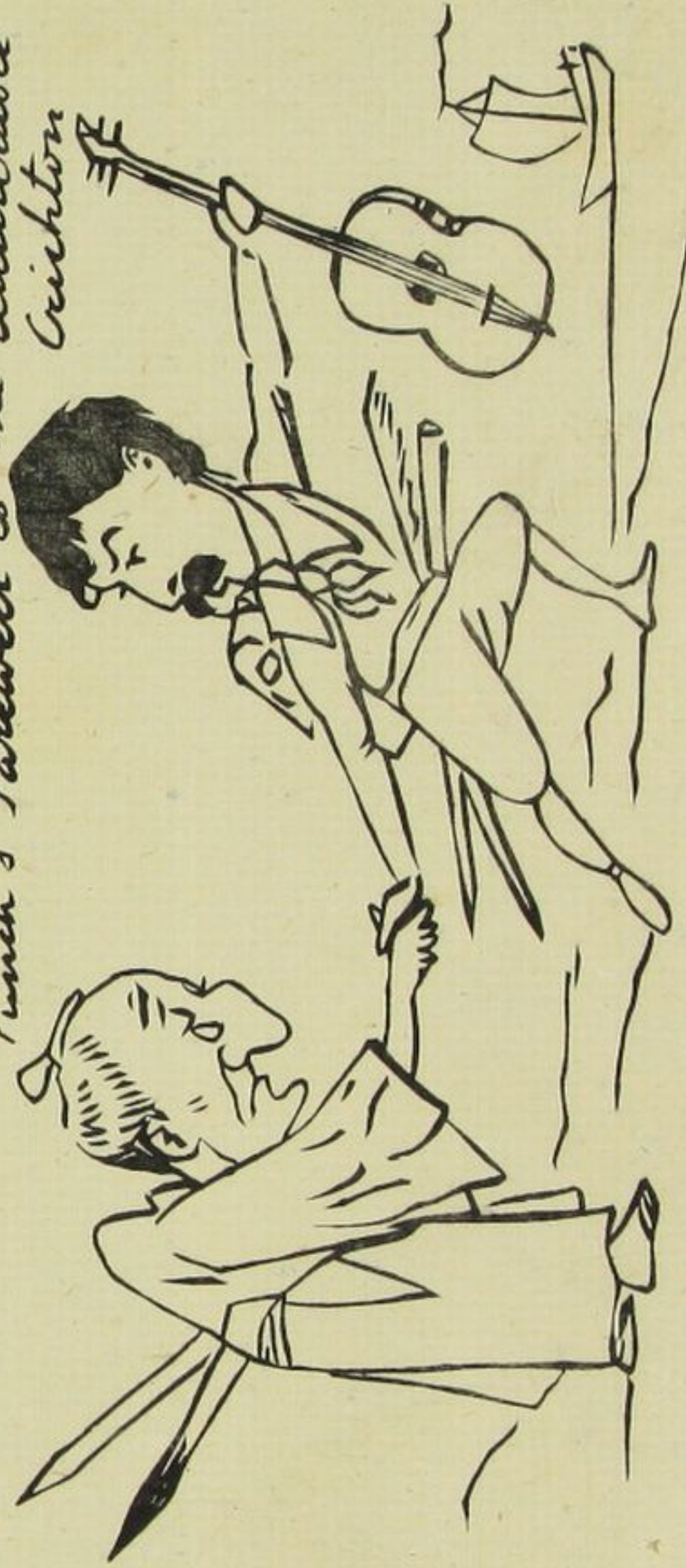


And they employed them as scavengers instead of taking their lives. Since then there have been no political assassinations in Laputa. Formerly they took off their heads and every ass—was venerated as a martyr after his death. Until lately 48 were worshipped in the capital of Laputa but since the destruction of their graves such incentives to glory no longer incited.

In England whenever a political event happens which has no political significance the "Times" is immediately suppressed. The other journals are warned not to say anything about anything.

We shall say nothing on the subject of Eau de Cologne for drains feeling sewer that it is no good to feed pigs with jam.

Punch's Farewell to the Admirable
Cricket





General Parade of Generals
 N. Jockey Club
 Spring meeting 1878



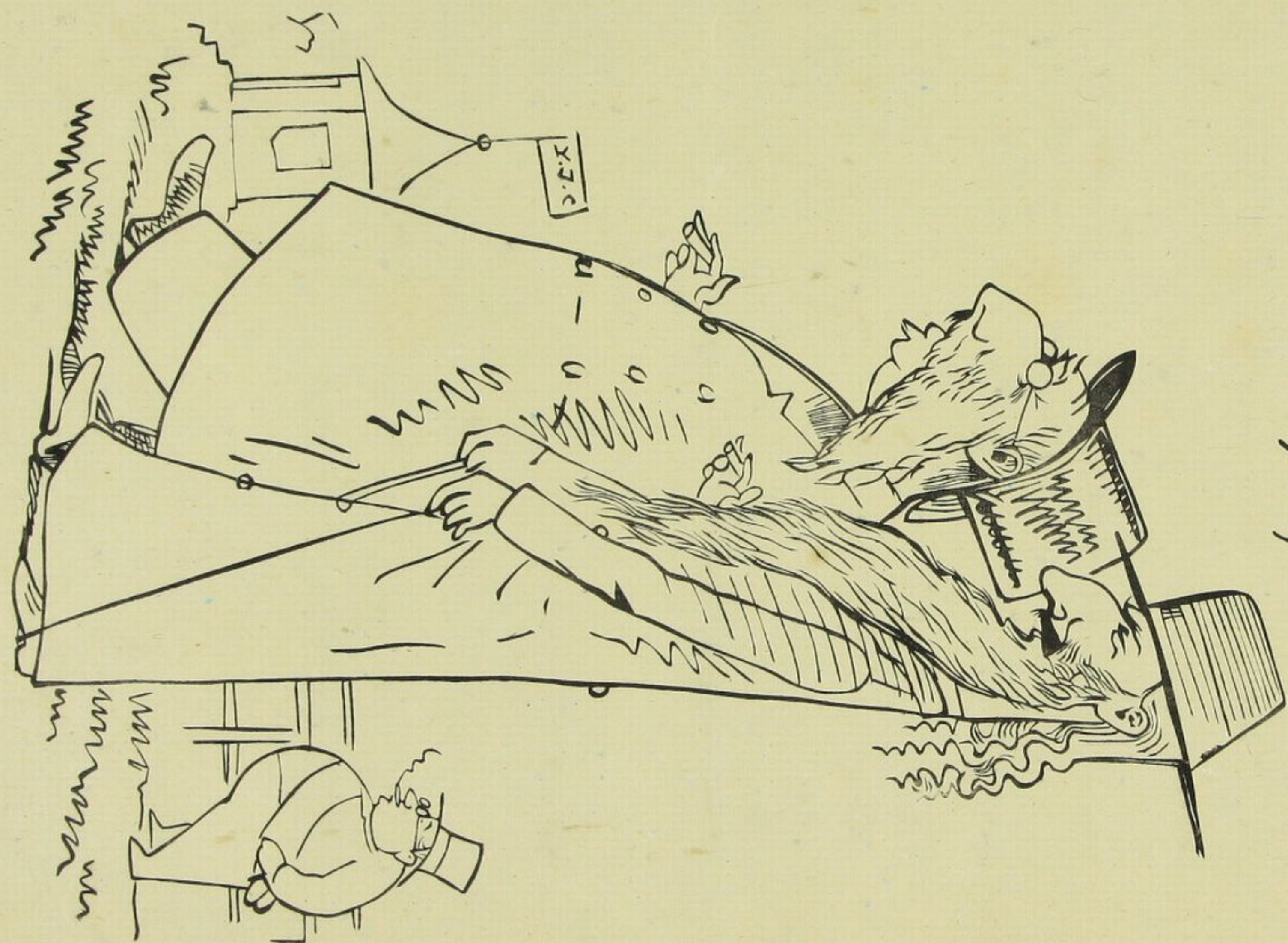
more racy sketches.

The swelliest
 Swell as ever
 was a swell.

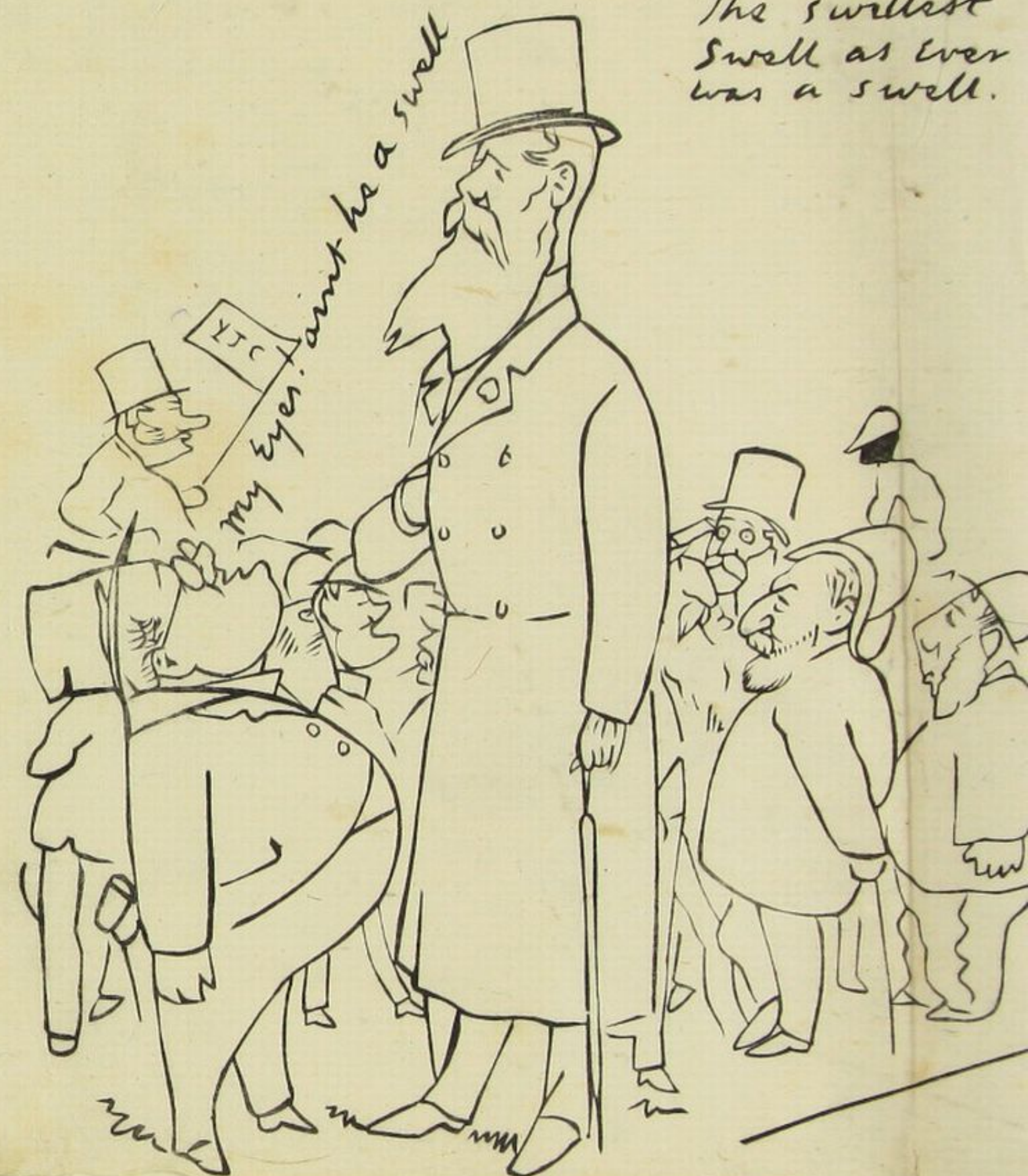
The Sportive Man
 Excited!



And they employed them as scavengers
 instead of taking their lives. Since then
 there have been no political ass - inations
 in Laputa. Formerly they took off their
 heads and every ass - was venerated as
 a martyr after his death. Until lately 48
 were worshipped in the capital of Laputa



General Parade of Generals
N. Jockey Club
Spring meeting 1878



more racy sk stess

The swiftest
Swell as ever
was a swell.

代々木式場車馬置場

注意。通路(交通遮断圖参照)

(一) 自動車馬車

- イ、四谷通ヨリ新宿三丁目左へ甲州街道新町三丁目左へ(式場北門へ)
- ロ、澁谷橋ヲ渡リ鐵道線路ヲ越エ澁谷廣尾町、長谷戸、日向ヲ經テ斜ニ右へ(西郷邸東側又ハ西側)大山街道ニ出テ右へ道玄坂ヲ下リ中澁谷町
- 九二八番地角左へ農科大學門前右へ順路式場西門へ
- ハ、陸軍大學校横ヨリ舊青山練兵場ニ入り霞ヶ岳、千駄ヶ谷ヲ經テ式場北門へ(南隣内奉送者空車)

(二) 人力車

- イ、四谷通ヨリ新宿三丁目左へ甲州街道新町三丁目左へ(式場北門へ)西人力車置場ニ就クモノ)
- ロ、廣尾通ヨリ澁谷川ニ沿ヒ稻荷橋ヲ渡リ右へ大山街道ヲ横切リ大向ニ出テ練兵場西境ニ沿ヒ式場西門へ(西人力車置場ニ就クモノ)
- ハ、青山南町六丁目新開道路ヨリ青山通ヲ横切リ大山邸前ニ出テ水無橋ヲ經テ式場東門へ(東人力車置場ニ就クモノ)
- ニ、舊青山練兵場ヨリ青山北町四丁目右へ原宿ヲ經テ水無橋ヨリ東門へ(南隣内奉送者空車、東人力車置場ニ就クモノ)



代々木式場車馬置場

注意。

通路(交通遮斷圖参照)

(一) 自動車馬車

イ、四谷通ヨリ新宿三丁目左へ甲州街道新町三丁目左へ式場北門へ

ロ、澁谷橋ヲ渡リ鐵道線路ヲ越エ澁谷廣尾町、長谷戸、日向ヲ經テ斜ニ右へ(西郷邸東側

九二八番地角左へ農科大學門前右へ順路式場西門へ

ハ、陸軍大學校横ヨリ舊青山練兵場ニ入り霞ヶ岳、千駄ヶ谷ヲ經テ式場北門へ(鹵簿内奉

(二) 人力車

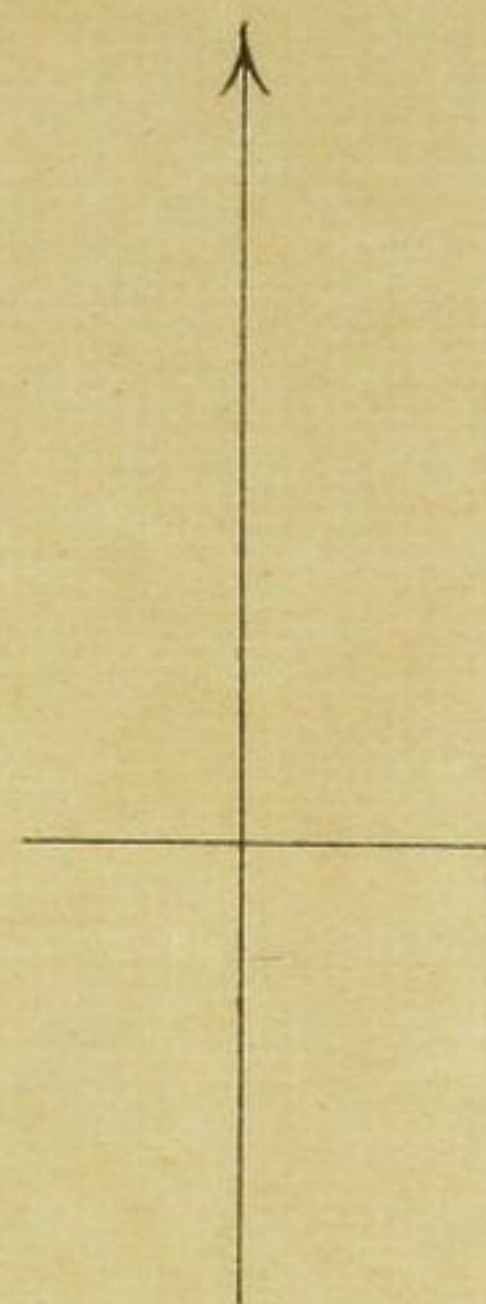
イ、四谷通ヨリ新宿三丁目左へ甲州街道新町三丁目左へ式場北門へ(西人力車置場ニ就ク

ロ、廣尾通ヨリ澁谷川ニ沿ヒ稻荷橋ヲ渡リ右へ大山街道ヲ横切リ大向ニ出テ練兵場西境

ハ、青山南町六丁目新開道路ヨリ青山通ヲ横切リ大山邸前ニ出テ水無橋ヲ經テ式場東門

ニ、舊青山練兵場ヨリ青山北町四丁目右へ原宿ヲ經テ水無橋ヨリ東門へ(鹵簿内奉送者空





西門
北門
東門
南門
西門
北門
東門
南門

入口

ほにはろい

18
19
20
21
22

入口

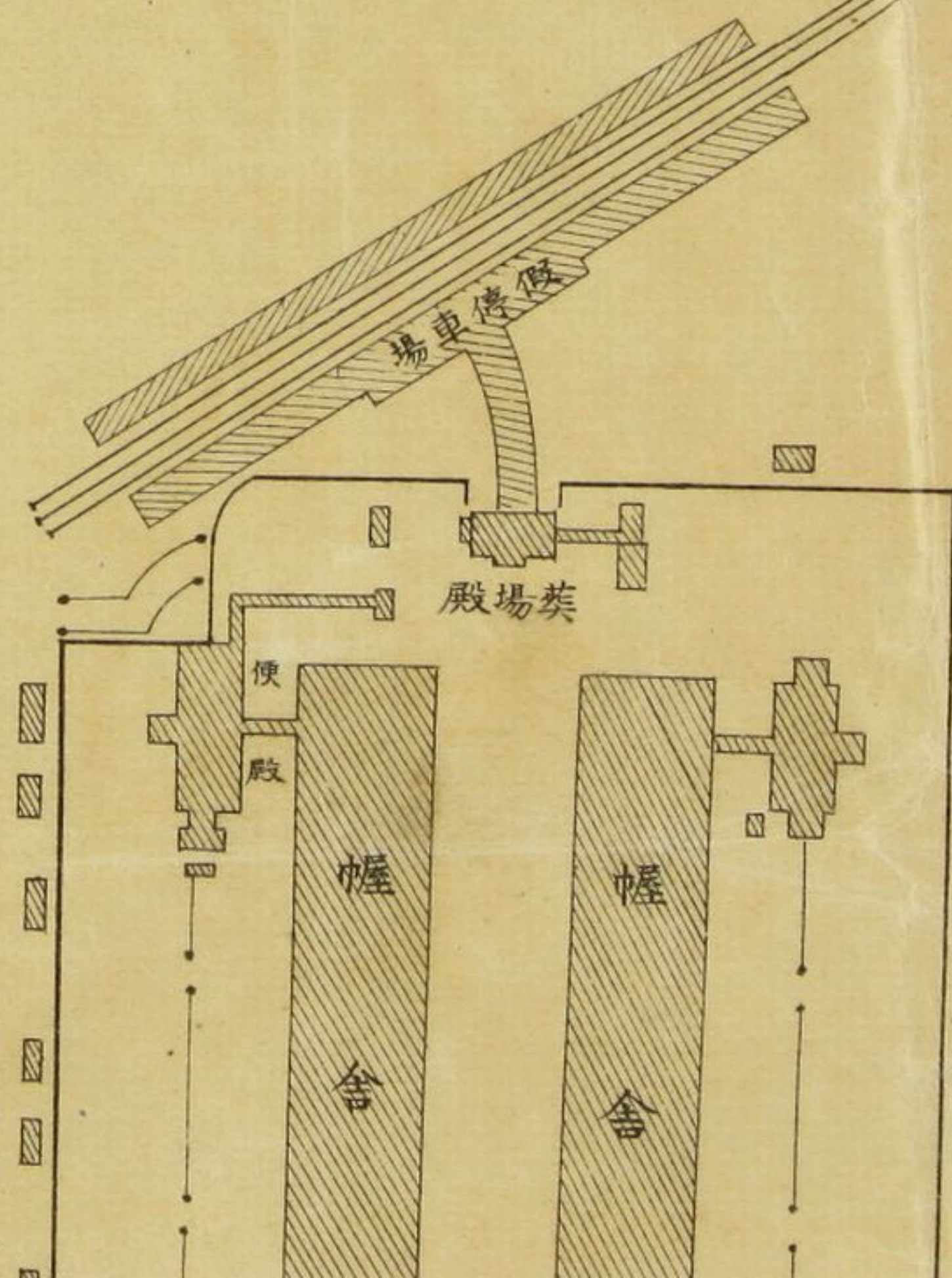
西人力車

（六十三自）
十六百馬

團交外及上以等一動
場置馬車

1	(人)
2	(馬)
3	(馬)

出口



1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	-----

北門へ

ヲ經テ斜ニ右へ(西郷邸東側又ハ西側)大山街道ニ出テ右へ道玄坂ヲ下リ中澁谷町

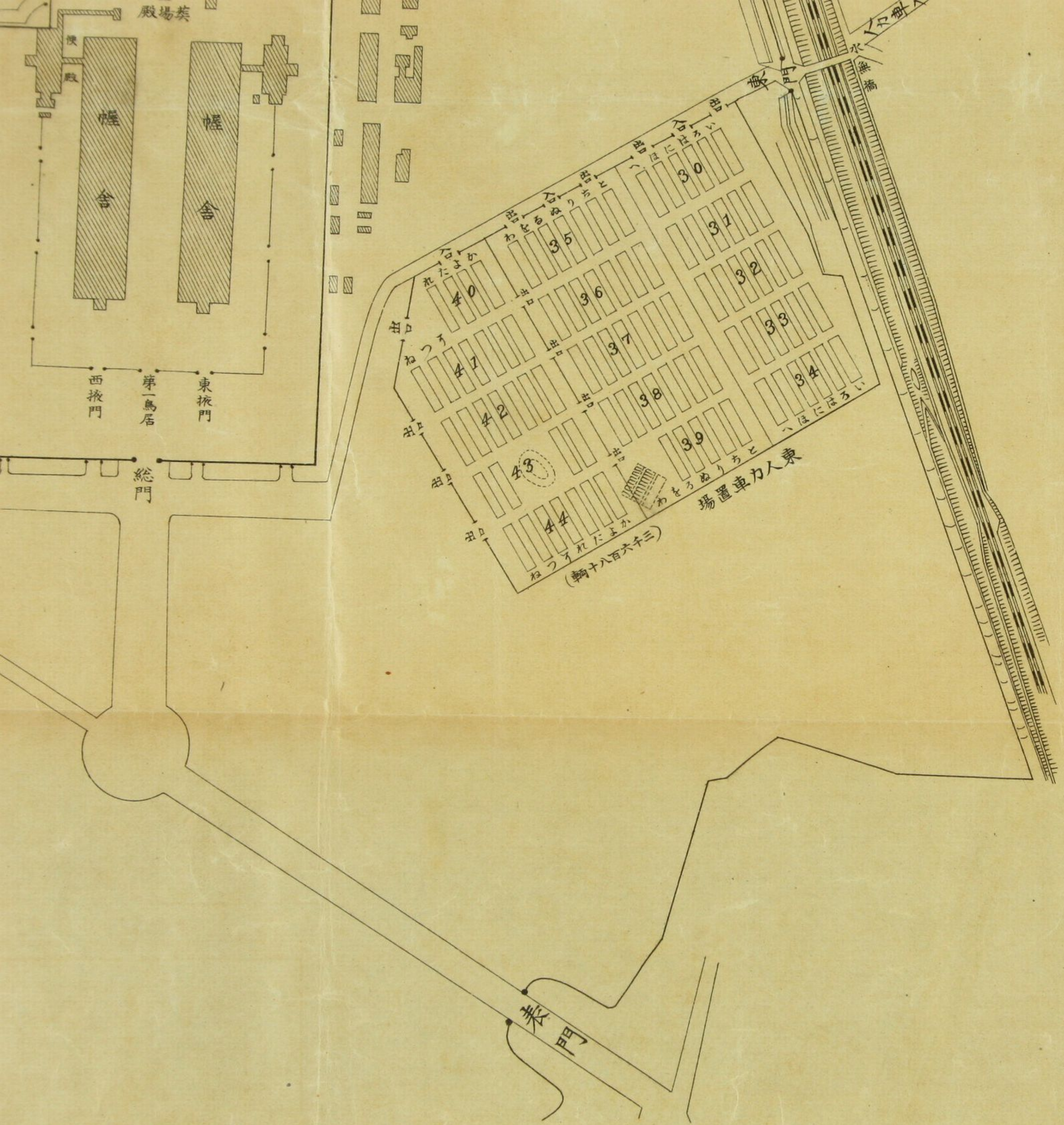
ヲ經テ式場北門へ(鹵簿内奉送者空車)

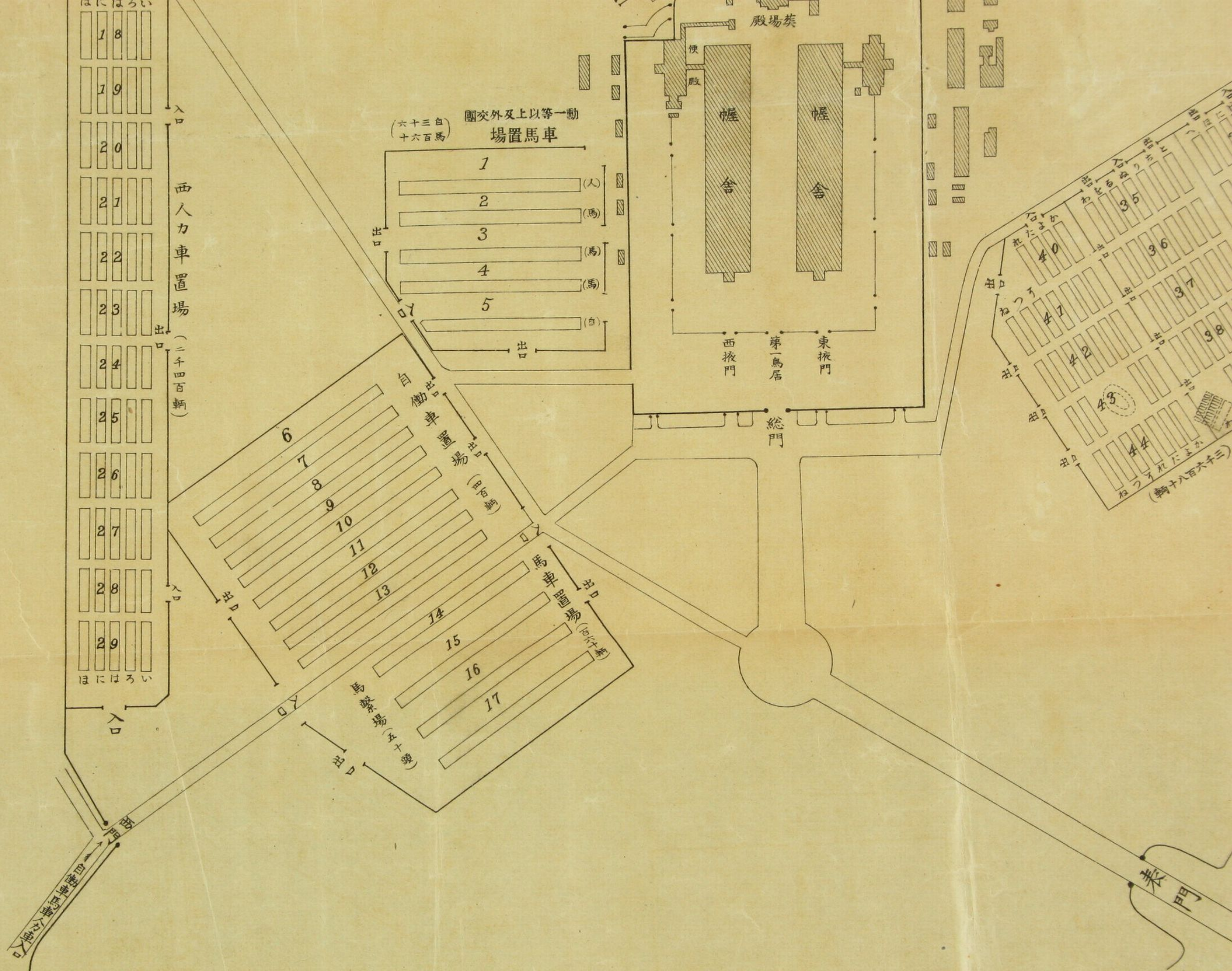
北門へ(西人力車置場ニ就クモノ)

切リ大向ニ出テ練兵場西境ニ沿ヒ式場西門へ(西人力車置場ニ就クモノ)

出テ水無橋ヲ經テ式場東門へ(東人力車置場ニ就クモノ)

ヨリ東門へ(鹵簿内奉送者空車)東人力車置場ニ就クモノ)







凡例

—— 交通通断線
- - - 交通通断延長線
... 馬車自動車道路

東京帝國大學農科大學





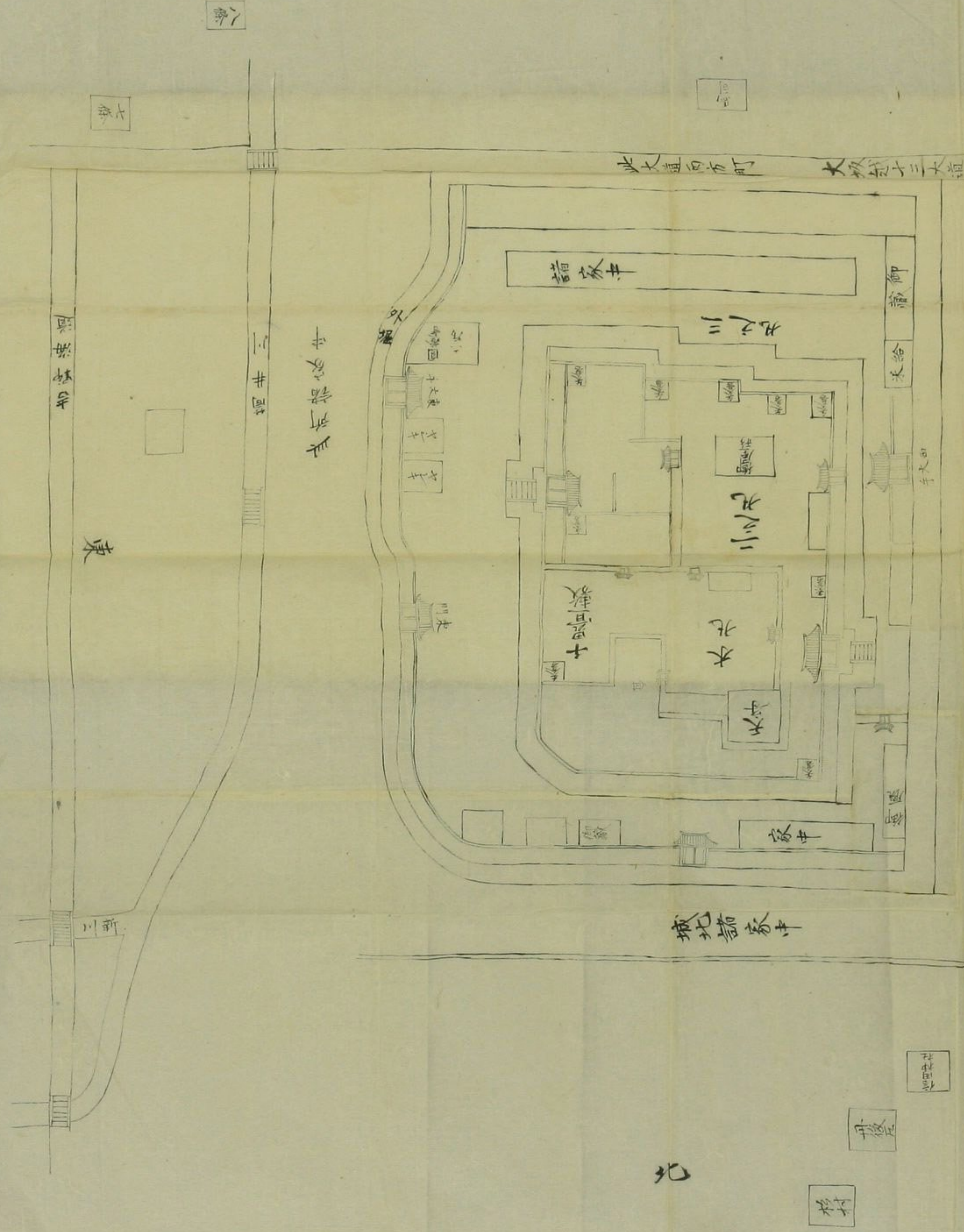
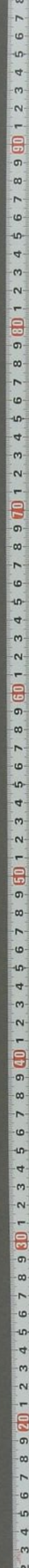
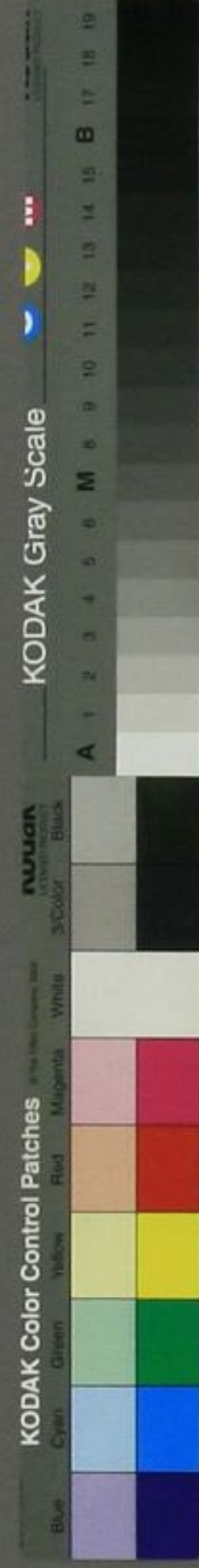


凡例

- 交通遮断線
- 交通遮断延長豫定線
- 馬車自働車通路
- 人力車通路



東京帝國大學農科大學



筒井城之圖

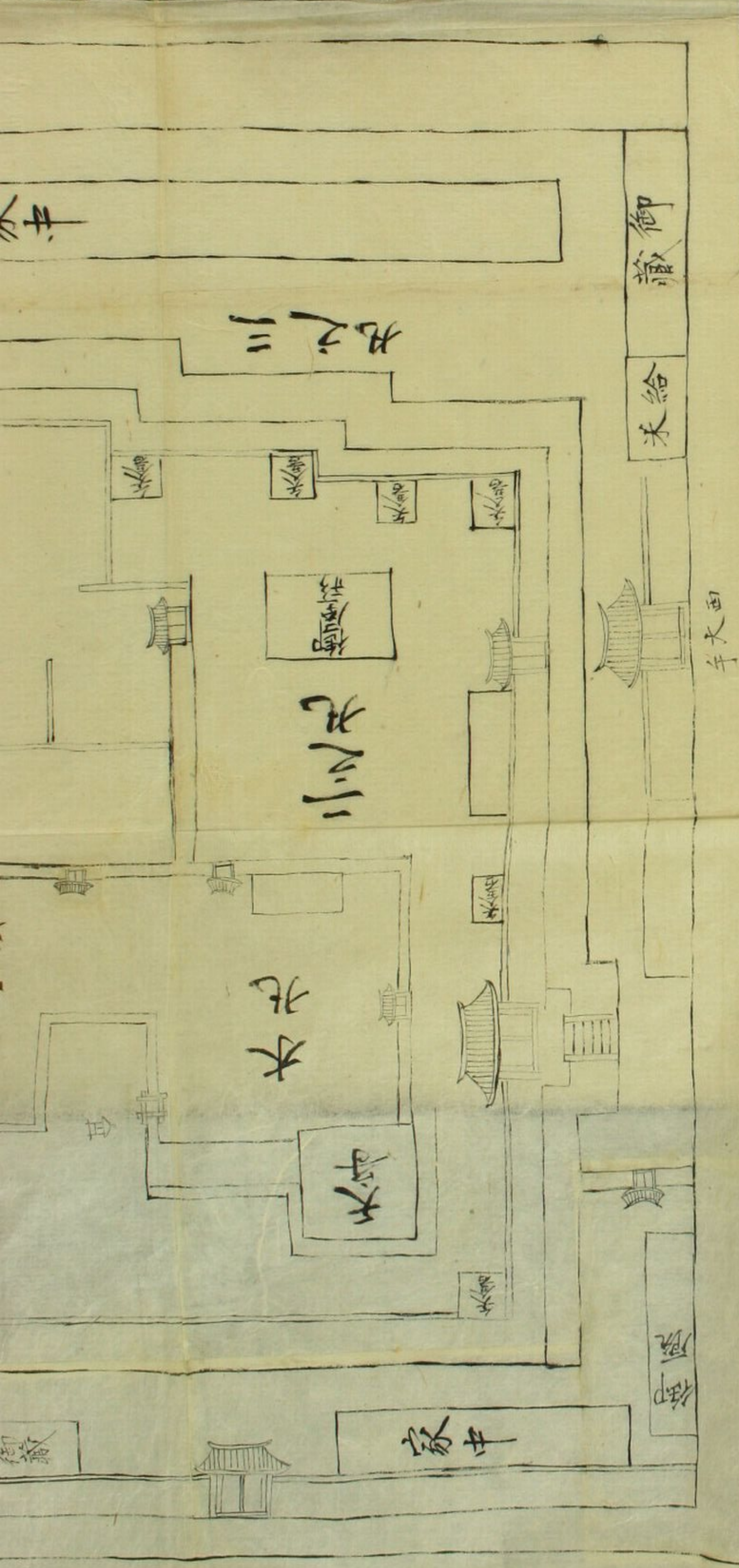
木九 東西拾九間半
南北貳拾九間半
坪數貳千拾八坪三分三重
堀長四百七間一尺八分五厘
幅上口拾五間 一拾間延
二之九 東西百五十四間
南北四十六間半
坪數一千七百廿三坪三分五厘
屋形坪數十二拾五坪
同玄關東向
二之九 東西九十九間半
南北貳拾間
坪數一千貳拾二坪三分八厘
郭四丁數拾八十二拾三間
惣旗四丁數五拾七拾三間
宣敷名目并竹間并宜在御願能事
獻之



城

此大道兩方町

大坂越十二大道



城北諸家中

筒井
西村

西

筒井城之圖

木丸 東西拾九間半
 南北貳拾九間半
 坪數貳千拾八坪三分三厘
 堀長四百七間一尺八分五分
 幅上口拾五間 下拾間近
 二之丸 東西百五十四間
 南北百六十一間半
 坪數貳千七百七三坪三分五厘

屋形坪數千三拾五坪
 同玄關東向

一、東西九十九間半

南

此大運河

諸家

國

文庫

子

子

門東

子

藏

御藏

城北

中

井筒

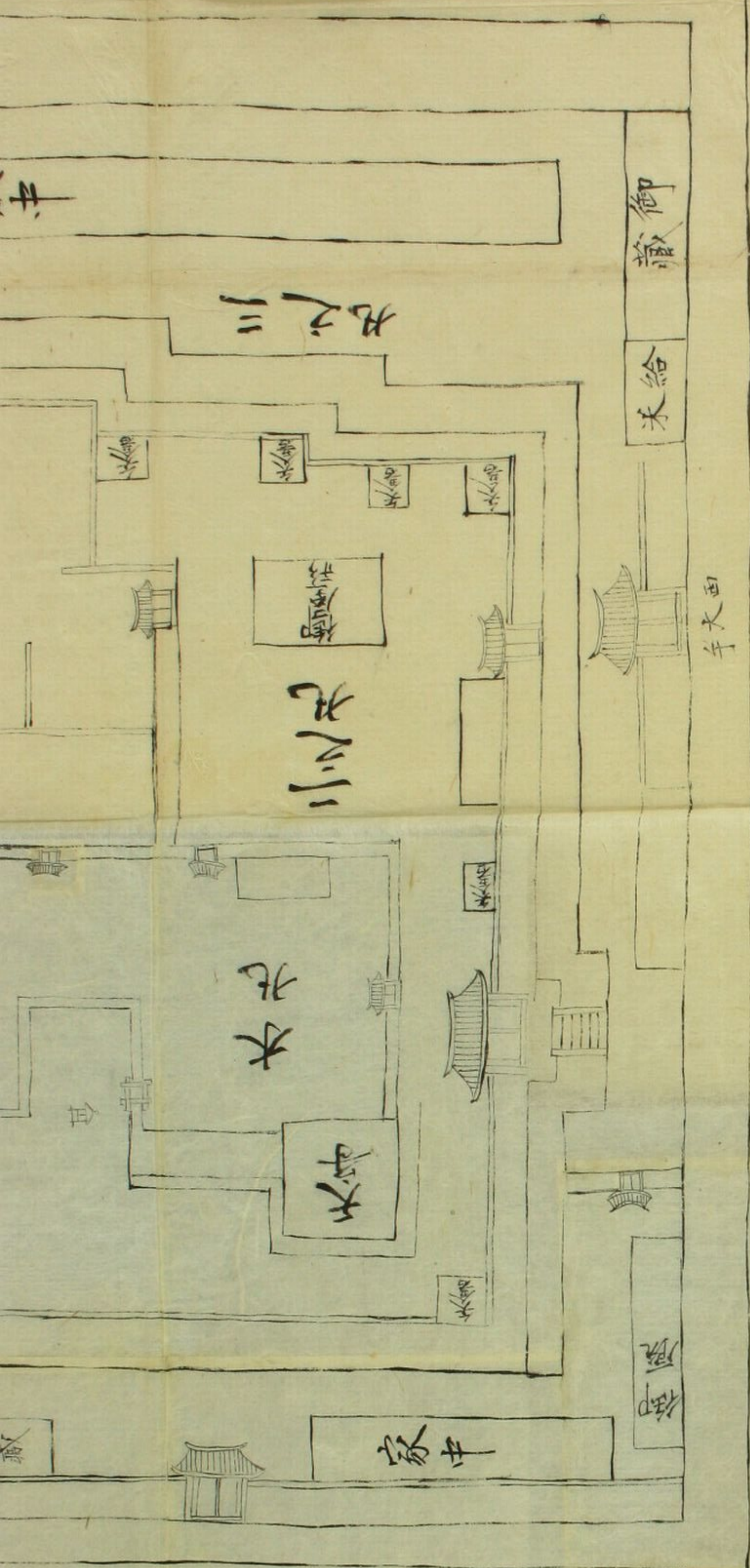
人

七

道

東

新川



城北諸家中

北

杉村

丹後

杉田

筒井
西村

西

筒井城之圖

木丸 東西拾九間半
南北貳拾九間半

坪數貳千拾八坪三分三厘

堀長四百七間一尺八寸五分

幅上口拾五間一拾間近

二之丸 東西百五十四間
南北百六十一間半

坪數貳千七百七十三坪三分五厘

屋形坪數千三拾五坪

同玄關東向

三之丸 東西九十九間半
南北貳百貳十間

坪數貳千貳拾二坪三分八厘

郭回丁數拾八十三拾三間

惣揃回丁數五拾丁拾三間

寛政元年正月筒井富直領地
獻之

城北

北

諸家半

十思教

御藏

門東

花園

十文東

十

十

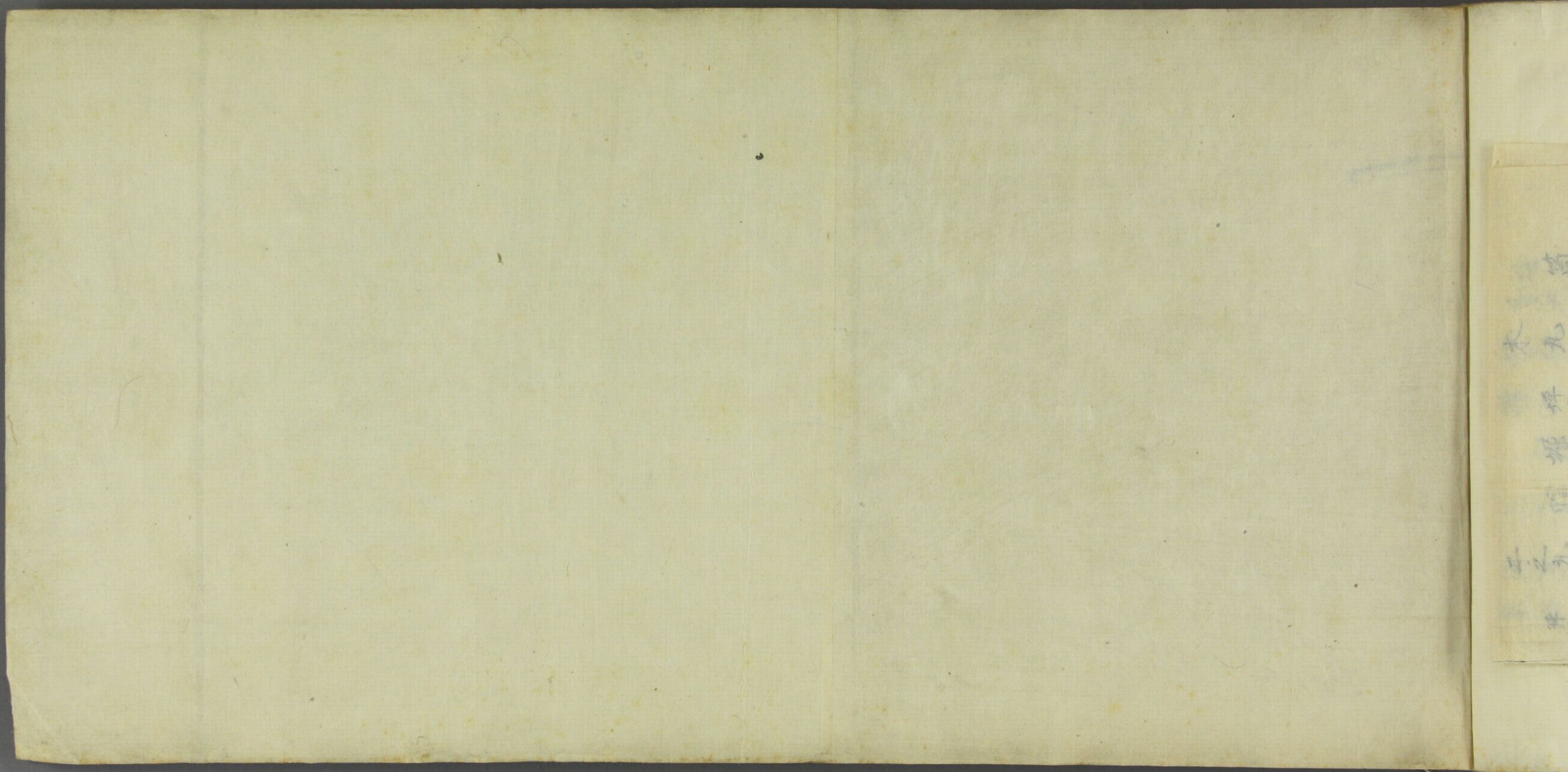
此所諸家半

筒井川

東

道新海道

川新



2 3 4 5 6 7 8 9 110 1 2 3 4 5 6 7 8 9 120 1 2 3 4 5 6 7 8 9 130 1 2 3 4 5 6 7 8 9 140 1 2 3 4 5 6 7 8 9 150 1 2 3 4 5 6 7 8 9 160 1 2 3 4 5 6 7 8 9 170 1 2

